HASHI MOTO ENOKI DA SITE

橋本榎田遺跡

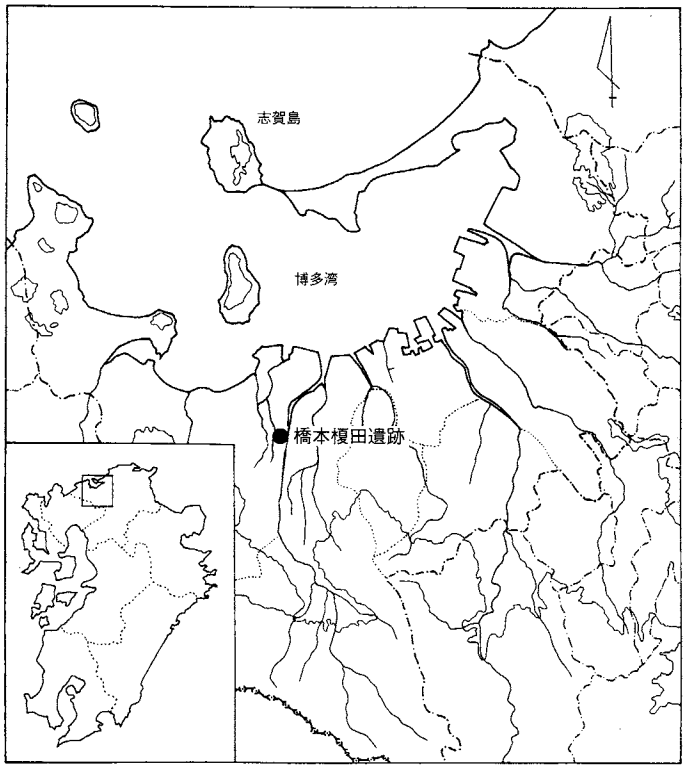
－福岡市埋蔵文化財調査報告書第542集－

1997

橋本榎田遺跡調査会
福岡市教育委員会

橋本榎田遺跡

－福岡市埋蔵文化財調査報告書第542集－



調査番号　8014
遺跡略号　HTE-1

1997

橋本榎田遺跡調査会
福岡市教育委員会

(1) 掘立柱建物SB01(北から)

(2) 木棺墓SD01(西から)

(3) 青白磁合子(?)242

(4) 越州窯系青磁椀166

序

福岡市は古来より大陸文化摂取の門戸として栄え、市内に数多くの遺跡や文化財が残されています。

福岡市西部を流れる室見川左岸一帯には、国指定史跡の野方遺跡や吉武高木遺跡をはじめ、数多くの埋蔵文化財が残されています。福岡市教育委員会では、これらの史跡整備を進めるとともに、各種開発に対する埋蔵文化財の事前調査に努めています。

本書は、宅地造成に伴い、昭和55年７月から56年３月に実施した福岡市西区橋本に所在する橋本榎田遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査では、弥生時代前期の溝状遺構、平安時代の掘立柱建物や井戸などの遺構を検出するとともに、弥生土器や石器、貿易陶磁器や国産土器などの各種の豊富な遺物が出土しました。

本書が文化財保護の一助となり、学術研究の資料として活用されますことを願っています。

平成９年３月15日
福岡市教育委員会
教育長　町　田　英　俊

例　言

1、本書は、昭和54年度に、東洋開発株式会社による建売分譲住宅地造成工事に先行して実施した橋本榎田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2、本書のFig, 5には、国土地理院発行の1/50,000の地形図「福岡西南部」を原図とした。

3、本書に使用した方位はすべて磁北である。座標北に対して西偏6°20′を測る。

5、掲載した遺物には、種類、材質、出土遺構の別を問わず掲載順に通し番号を付した。

6、実測図と写真図版中の遺物番号は同一である。

7、本書に掲載した遺構実測・写真撮影は塩屋勝利、田中壽夫が、また遺物実測・写真撮影は田中が行った。

8、本書の図面整理・整図は、宮園登美枝、田中が行なった。

9、本書の執筆は第1・2章を塩屋、第3・4章を田中が分担した。

10、本書の編集は塩屋と協議の上、田中、宮園が行なった。

11、本報告に関わる出土遺物、記録類はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理される。

本文目次

頁
第１章　序　　説……1
１、調査に至る経過……1
２、調査の組織……1
３、調査の経過……2
第２章　遺跡の位置と環境……3
１、位置と地理的環境……3
２、歴史的環境……3
第３章　調査の記録……6
１、調査の概要……6
２、遺構と遺物……9
第４章　結　　語……20
１、検出遺構について……20
２、出土遺物について……21
３、まとめ……21

挿図目次

Fig, 1　第2区作業風景……2頁
Fig, 2　第4区作業風景……2
Fig, 3　掘立柱建物掘り下げ作業……2
Fig, 4　第6区作業風景……2
Fig, 5　橋本榎田遺跡と周辺の遺跡分布図（1/25,000）……5
Fig, 6　周辺地形と調査区配置図（1/1,000）……7
Fig, 7　橋本榎田遺跡遺構分布全体図（1/600）……折り込み
Fig, 8　第5区掘立柱建物分布図（1/200）……11
Fig, 9　井戸SE01～04・溝SM03～10 分布図（1/400）……17
Fig, 10　復元条里と橋本榎田遺跡の位置（1/50,000・1/8,000）……22
Fig, 11　第1区遺構平面図（1/200）……33
Fig, 12　第2区・第3区遺構平面図（1/200）……34
Fig, 13　第1区・第2区土層断面図（1/80）……35
Fig, 14　第4区遺構平面図（1/200）……36
Fig, 15　第4区溝SM03・04 土層断面図（1/50）……37
Fig, 16　第4区溝SM04 遺物出土状況平面図（1/40）……37
Fig, 17　第5区遺構平面図（1/400）……38
Fig, 18　第6区遺構平面図（1/300）……39
Fig, 19　第6区溝SM03・05～07 土層断面図（1/50）……40
Fig, 20　第6区溝SM04・06・07 土層断面図（1/50）および柵列（SA）平面・断面図（1/80）……41
Fig, 21　掘立柱建物（SB）平面・断面図1（1/80）……42
Fig, 22　掘立柱建物（SB）平面・断面図2（1/80）……43
Fig, 23　掘立柱建物（SB）平面・断面図3（1/80）……44
Fig, 24　掘立柱建物（SB）平面・断面図4（1/80）……45
Fig, 25　掘立柱建物（SB）平面・断面図5（1/80）……46
Fig, 26　掘立柱建物（SB）平面・断面図6（1/80）……47
Fig, 27　掘立柱建物（SB）平面・断面図7（1/80）……48
Fig, 28　木棺墓・土壙（SD）、井戸（SE）平面・断面図（1/40）……49
Fig, 29　井戸（SE）平面・断面図（1/40）……50
Fig, 30　遺物実測図1（1/3・2/3・1/2）……51
Fig, 31　遺物実測図2（2/3・1/2）……52
Fig, 32　遺物実測図3（1/2）……53
Fig, 33　遺物実測図4（1/3）……54
Fig, 34　遺物実測図5（1/3）……55
Fig, 35　遺物実測図6（1/3）……56
Fig, 36　遺物実測図7（1/3）……57
Fig, 37　遺物実測図8（1/4・1/3・1/2）……58
Fig, 38　遺物実測図9（1/3）……59
Fig, 39　遺物実測図10（1/3）……59
Fig, 40　遺物実測図11（2/3）……60
Fig, 41　遺物実測図12（1/3・1/2）……60
Fig, 42　遺物実測図13（1/3・1/2）……61
Fig, 43　遺物実測図14（1/4・1/3）……62
Fig, 44　遺物実測図15（1/3・2/3）……63

図版目次

巻頭図版 (1)掘立柱建物SB01(北から) (2)木棺墓SD01(西から)
(3)青白磁合子(?) (4)越州窯系青磁椀
PL, 1 (1)橋本榎田遺跡遠景(南東から) (2)調査前近景(北から)
PL, 2 (1)第1区全景(西から) (2)第2区全景(西から) (3)第3区全景(西から)
PL, 3 (1)第4区作業風景(北から) (2)第4区全景(南から) (3)第5区全景(南から)
PL, 4 (1)第6区全景(北西から) (2)第6区全景(南から)
PL, 5 (1)掘立柱建物SB01(南から) (2)掘立柱建物SB01(西から)
(3)掘立柱建物SB08(南から)
PL, 6 (1)木棺墓SD01遠景(西から) (2)木棺墓SD01(西から)
(3)木棺墓SD01(北から)
PL, 7 (1)土壙SD02(北から) (2)土壙SD03(北西から)
(3)土壙SD04(西から)
PL, 8 (1)井戸SE02(西から) (2)井戸SE02井組南東部(北西から)
(3)井戸SE02井組南東部(北から) (4)井戸SE02井筒(西から)
PL, 9 (1)井戸SE01(北から) (2)井戸SE03(東から)
(3)井戸SE04(北東から)
PL, 10 (1)溝SM01・02(北から) (2)溝SM03(北西から)
(3)溝SM04検出状況(西から) (4)溝SM04掘り下げ作業風景(南西から)
(5)溝SM04周辺作業風景(西から)
PL, 11 (1)第4区溝SM04(西から) (2)第6区溝SM04(西から)
(3)溝SM04第6区東壁土層断面(西から) (4)溝SM04第6区南北土層断面(西から)
PL, 12 (1)溝SM03北側(南東から) (2)溝SM03北側遺物出土状況(東から)
(3)溝SM03・05・07(北西から)
PL, 13 (1)第6区溝群SM03・05～08(南東から) (2)第6区溝群SM03・05～08(南東から)
(3)溝SM08・09(北東から)
PL, 14 出土遺物1 (1/3・1/2)
PL, 15 出土遺物2 (1/3)
PL, 16 出土遺物3 (1/3)
PL, 17 出土遺物4 (1/3)
PL, 18 出土遺物5 (1/3・2/3)
PL, 19 出土遺物6 (1/3・1/5)
PL, 20 出土遺物7 (1/3・3/5)

表目次

Tab, 1 橋本榎田遺跡検出掘立柱建物計測一覧表……13頁
Tab, 2 橋本榎田遺跡検出遺構編年表……20
Tab, 3 橋本榎田遺跡出土土器・陶磁器所見一覧表……23～28
Tab, 4 橋本榎田遺跡出土石器・石製品所見一覧表……29～31
Tab, 5 橋本榎田遺跡出土その他所見一覧表……31

第１章　序　　説

１、調査に至る経過

橋本榎田遺跡の発掘調査に至る経過は次のとおりである。

開発事前審査

1) 開発事前審査（福岡市教育委員会文化課受付）

申 請 日：昭和54年９月14日

申 請 者：東洋開発㈱　代表取締役　庄野崎哲哉

福岡市中央区大名二丁目10－34

申 請 地：福岡市西区大字橋本字榎田1208他42筆

開発面積：22,504.43㎡

開発用途：宅地造成

試掘調査

2) 試掘調査

調 査 日：昭和54年11月13日～11月22日

担 当 者：二宮忠司（福岡市教育委員会文化課）

3) 試掘調査の所見

本調査を要する根拠

申請地は、古代の地名で額田（現在は榎田・野方）と呼ばれ、この付近には奈良・平安時代には怡土から大宰府へ通じる官道がこの一帯を通り、さらに、駅家が置かれていたことが推定されていることから、試掘調査を行うこととした。調査は東西南北に20ｍ間隔の方眼を組み、幅1.0ｍの試掘トレンチを22本設定し掘削した。その結果、台地（微高地）上に溝状遺構・柱穴、台地下に台地縁辺に沿う杭列を検出し、また、奈良時代から平安時代の土師器、須恵器、青磁、白磁などとともに、馬の下顎骨も出土した。確認されたこれらの遺構と遺物からみて、古代の駅家に関連する遺跡の存在が予想されたために、遺構が分布する約10,000㎡の範囲について本調査を要すると判断された。

２、調査の組織

発掘調査の組織は以下のとおりである。

調査委託：東洋開発㈱　代表取締役庄　野崎哲哉

調査主体：橋本榎田遺跡調査会

福岡市教育委員会文化部文化課課長　井上　剛紀

調査担当：　埋蔵文化財第２係　塩屋　勝利

田中　壽夫

調査補助：　喜多　圭介

整理補助：　宮園登美枝

整理作業：　堀　一恵・山口玲子・寺村チカ子・金石邦子

3、調査の経過

経過概要

発掘調査は昭和55年７月１日に着手し56年３月30日に完了した。その間、業務上の都合と工事工程との調整のために２回中断した。調査の実施にあたっては、便宜上第１～３期に分け、第１期調査は55年７月１日～10月16日、第２期調査は昭和55年12月15日～25日、第３期調査は昭和56年３月３日～30日にかけて実施し、延べ８ヶ月を要した。

調査日誌抄

７月１日(火)　本日より調査着手。東洋開発㈱主催の安全祈願式。
７月3～5日(土)　伐採作業および調査区設定。10ｍ方眼基準杭設置作業。第２～５区の重機による表土除去作業開始。
７月10日(木)　第５区の表土除去および遺構検出作業を行う。
７月15日(火)　梅雨明け間近かで久しぶりの青空と涼風。第５区の表土剥ぎと検出作業を行い、柱穴を多数検出。
７月16日(水)　第５区の表土除去と遺構検出作業を継続。包含層には弥生土器片、石鎌、土師器、須恵器等を含む。南北棟２×３間・１×２間の掘立柱建物各１棟を確認。
８月２日(土)　台地下で検出した２条の溝状遺構(SM01、SM02)の発掘。
８月７日(木)　台地西側段落ち部に平面隅丸方形の土壙(SD01)を検出。床面から完形の土師器椀２個、皿６個が出土。
８月25日(月)　第５区台地下東側部分土壙(SD03、SD04)を検出。
８月29日(木)　第５区台地下東側部分の遺物包含層掘り下げ作業。
９月３日(木)　第５区台地上の清掃作業、写真撮影。
９月11日(木)　台風13号九州東岸を通過。
９月22日(月)　SM03の発掘作業開始、SM04南側台地縁部の発掘作業。
９月26日(金)　SM04北側台地縁部で井戸(SE01)を検出。
10月14日(火)　台風19号通過。SE02の井戸枠が破壊される。
10月16日(木)　平板測量、第２期調査区基準杭改定作業。
２月15日(月)　本日より第２期調査開始。
２月18日(木)　SM04検出状況写真撮影、瓦器、土師器皿、白磁等出土。
12月19日(金)　SM03の延長部分と新たな溝状遺構２条を検出。
２月22日(月)　SM04のＥ列断面土膚図作成およびＤ列土層断面写真撮影。
３月３日(火)　本日より調査再開、調査区全域の清掃作業。
３月11日(水)　SM03、SM05の発掘作業。
３月12日(木)　SM05に切られた溝状遺構１条(SM07)を新たに検出。
３月20日(金)　D11区で新たに溝状遺構(SM08)と土壙２基を検出。
３月23日(月)　SM07、D11区のSD03～SD05の実測、写真撮影。
３月26日(木)　SM08の発掘作業、SM03～07の実測、写真撮影。
３月28日(土)　調査区全体の清掃作業、全景写真撮影、SM06平板実測。
３月30日(月)　等高線測量、器材整理、記念写真撮影。本日で延べ８ヶ月にわたる調査を終了。

Fig, 1　第２区作業風景

Fig, 2　第４区作業風景

Fig, 3　掘立柱建物掘り下げ作業

Fig, 4　第６区作業風景

第２章　遺跡の位置と環境

１、位置と地理的環境

橋本榎田遺跡

橋本榎田遺跡は、福岡市西区大字橋本字榎田に所在し、早良平野のほぼ中央部に位置する。早良平野は東側を油山山塊から延びる飯倉丘陵によって福岡平野と、西側を背振山塊から伸びる長垂丘陵によって今宿平野と画されている。旧早良郡内野付近を要部とし、室見川を中心河川として開析され、博多湾に向かって扇形に展開する複合扇状地の平野であり、室見川の両側共にいくつかの小河川の開析による沖積扇状地を形成している。

本遺跡は、室見川中流左岸から西方600ｍの沖積微高地上に立地し、200ｍ西方には名柄川が北流する。当該地点は本来は緩やかに南北へ延びる沖積台地であったが、現況は調査区中央の台地部分が墓地を改葬した畑地で、最高所の標高は9.5ｍである。その周辺は削られて水田が営まれ、台地面との比高差１～1.5ｍの平坦面をなしている。

２、歴史的環境

本遺跡が所在する橋本の地は、昭和16(1941)年に福岡市に合併する以前は早良郡壱岐村に含まれ、近世には早良郡橋本村であった。福岡藩３代藩主黒田光之はこの地に誕生し、早良区高取にある紅葉八幡宮は、遺跡の南々東300ｍに位置する橋本八幡宮を寛文６(1666)年に遷座したとされる(貝原益軒編『筑前国続風土記』)。中世の早良平野に関する史料は飯盛神社関係や妙法寺榊家文書などが知られ、古代には早良郡には毗伊、能解、額田、早良、平群、田部、曾我、能巨の各郷があった(『倭名抄』)。この中では現在の地名では野方となって遺り、古代における橋本周辺は、額田郷に属していたと考えられる。本遺跡を含む早良平野における遺跡の調査史は、戦前の段階、戦後から1960年後半段階、およびその後の段階に分けられる。戦前では、弥生時代前期・古墳時代初期の埋葬遺跡である藤崎遺跡が調査されたほか、箱式石棺墓から銅鏡や銅鏃などが出土した五島山古墳、奈良時代の城ノ原廃寺跡が知られていただけである。戦後においても、1960年代後半までは偶然の発見による小規模な調査が行われただけで、有田遺跡の甕棺墓や重留の箱式石棺墓などが研究者によって調査されたに過ぎない。早良平野における埋蔵文化財の本格的な発掘調査は有田地区の土地区画整理事業に伴い1967年～1968年の２年次にわたって行われた有田遺跡の調査が最初である。この調査以後、早良平野においても道路建設、大模団地建設、地下鉄建設、圃場整備など各種開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が相次ぎ、各時代の様相が明らかにされつつある。

橋本八幡宮
早良郡七郷
額田郷
藤崎遺跡
五島山古墳
城ノ原廃寺跡
有田遺跡

旧石器時代では、早良平野の各地から表面採集の遺物が知られていたが、その後の有田遺跡の発掘調査で石器包含層が検出されたほか、吉武遺跡群の調査でも出土している。縄文時代では、草創期から中期までの遺跡はいまだ明確ではなく、後期を主体とする四箇遺跡の調査が最初である。晩期の遺跡としては

吉武遺跡群
四箇遺跡

有田七田前遺跡
東入部遺跡

有田台地西側にある有田七田前遺跡が調査され、突帯文土器が出土している。晩期末の埋葬遺跡としては、平野奥部の東入部遺跡で夜臼式の大型壺を組み合わせた形式のものが調査されている。

有田環濠集落遺跡
石丸古川遺跡

早良平野においても弥生時代になると遺跡数が増大するが、前期初頭には有田台地に大規模な集落遺跡が出現する。この集落は径200×300ｍの環濠を巡らす大規模なもので、板付遺跡をはるかに上回り、早良平野における前期初頭の唯一の集落遺跡である。有田台地周辺は、現在まで184次に及ぶ発掘調査が行われ、弥生時代から中世に至る各時期の遺構が発掘されている。このほかの前期の遺跡としては十郎川に面する沖積地の石丸古川遺跡があり、突帯文土器や前期の土器、各種の石器類が出土している。この時期の埋葬遺跡は有田遺跡をはじめ海岸部の藤崎遺跡、平野中央部の田村遺跡などが調査されている。前期末から中期初頭の時期の遺跡は早良平野全域に拡大するようになる。埋葬遺跡では海岸部の藤崎遺跡、平野中央部の吉武高木遺跡、平野奥部の東入部遺跡などが著名である。

野方遺跡群

中期から後期の遺跡は本遺跡周辺では、野方中原遺跡、野方塚原遺跡、野方久保遺跡などが調査されたほか、古墳築造前夜の様相を示す宮ノ前遺跡も調査されている。

方形周溝墓
樋渡古墳・拝塚古墳
西新町遺跡
野方勧進原遺跡

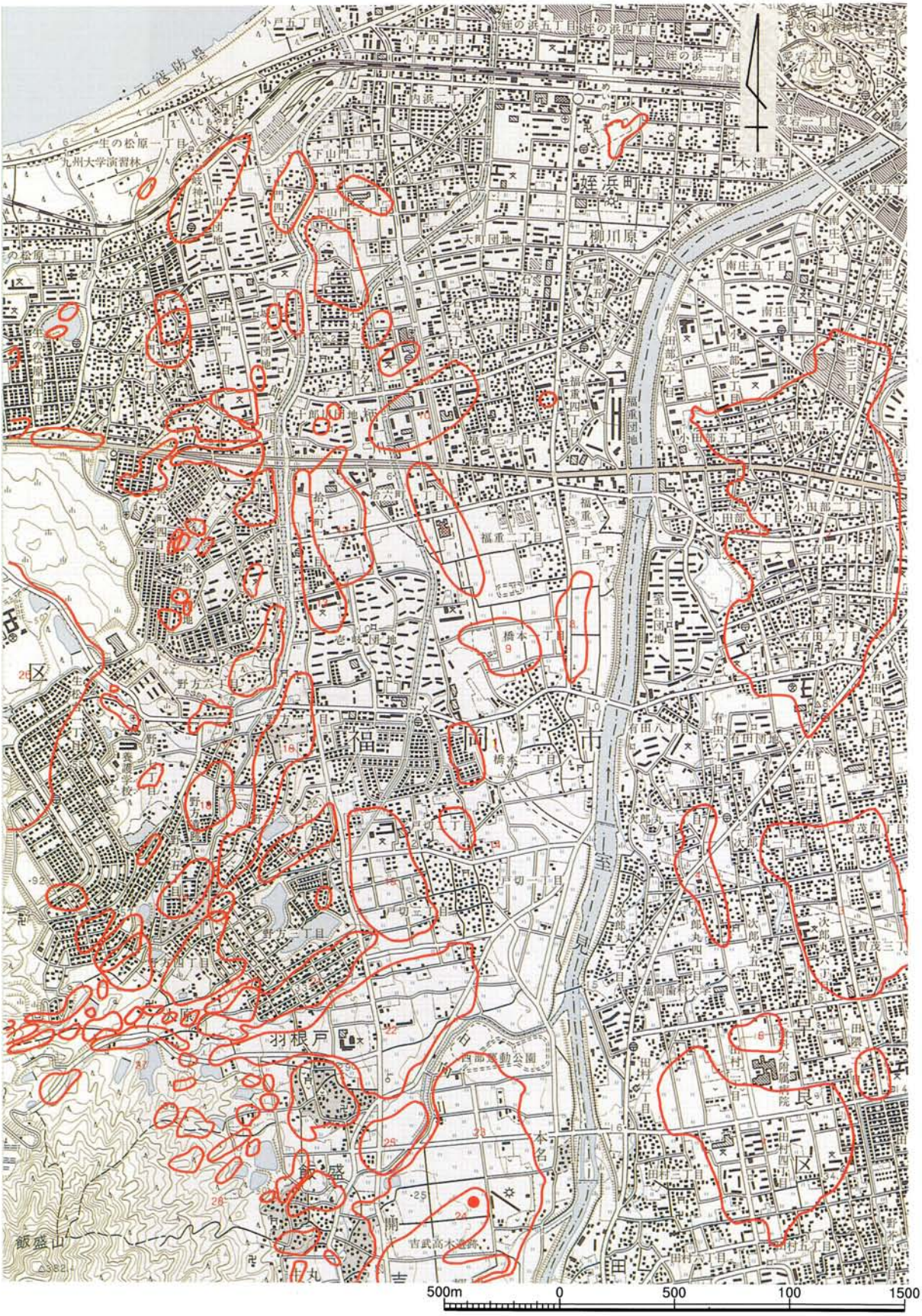
古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の樋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも５世紀～６世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勧進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。

吉武古墳群
早良郡衙
郷家・郷倉
斜ケ浦瓦窯跡
鴻臚館跡

古代から中世の遺跡も早良平野全体に見られ、数多くの遺跡が調査されている。寺院跡では城ノ原廃寺が古くから知られていたが、発掘調査は行われていない。発掘調査では吉武遺跡群から仏像に垂下したと思われる金銅製勾玉や八稜鏡が出土し、寺院が存在したことが想定される。しかしながら現在までの調査では、古代における早良郡衙や郷家・郷倉を特定する遺構は確認されていない。有田遺跡群の調査で古代の大規模な建物群が検出され、早良郡衙の可能性が指摘されているものの確定には至っていない。本遺跡の北西に位置する下山門の斜ケ浦瓦窯跡の確認調査で、「伊貴作瓦」銘を刻印した瓦が出土しており、鴻臚館跡の発掘調査でも「伊貴作瓦」銘が出土している。また、斜ケ浦瓦窯跡からは以前「警固」銘瓦が採集されており、鴻臚館の付属施設が警固所であることから、斜ケ浦瓦窯跡の瓦が鴻臚館の建物に葺かれていた可能性が高く、今後の調査が期待される。

小田部城跡

中世の遺跡では平野各地域で集落遺跡が調査されているほか、有田遺跡群で戦国時代の小田部城跡の濠が調査され、吉武の都地城跡が一部調査されている。



1．橋本榎田遺跡　2．有田遺跡群　3．次郎丸高石遺跡　4．次郎丸遺跡　5．田隈遺跡　6．平田遺跡
7．田村遺跡　8．橋本辻遺跡　9．橋本遺跡群　10．拾六町平田遺跡　11．橋本一丁目遺跡　12．拾六町亀田遺跡
13．牟多田遺跡　14．戸切巡り町遺跡　15．戸切遺跡群　16．野方久保遺跡　17．野方平原遺跡　18．野方中原遺跡
19．野方塚原遺跡　20．道隈遺跡　21．羽根戸原B遺跡群　22．羽根戸原C遺跡群　23．吉武遺跡群　24．樋渡古墳
25．太田遺跡　26．広石遺跡群　27．羽根戸古墳群　28．羽根戸南古墳群

Fig, 5　橋本榎田遺跡と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

第３章　調査の記録

１、調査の概要

1) 調査区の設定

発掘調査にあたっては、試掘調査の成果を踏まえ、遺構と遺物の存在が確認された６地点について調査区を設け（Fig, 6）、第１区～第６区と呼称した。調査区の配置は、開発予定地の中央から南にかけて特に遺構分布密度が高かった沖積台地周辺を中心とした。全体の調査面積は6,832.07㎡である。また、開発予定地全体を覆って、測量のための一辺10ｍの方眼地区割りを設定し、北から南へ1～21、西から東へＡ～Ｊと、番号およびアルファベットを付した。なお、南北基準線は磁北から10°41′西へ偏している。

調査総面積
6,832.07㎡

2) 各調査区の概要

試掘調査によって明らかとなったように、遺構・遺物は、第５区の中央から北側にかけて残った台地上において比較的良好に残っていることが確認されたが、その他の調査区においては、中世以降の削平や、客土による土取り等の結果、消滅している部分が多い。

第１区

3) 第１区

開発予定地の最も北側に設定した。調査区面積は809.25㎡。ここでは主として、南北に延びる旧沖積台地の遺存状況を把握し、遺構の有無について確認することを調査目的とした。

標高7.1～7.3ｍの面（黄褐色砂質粘土層上面）での遺構検出作業の結果、調査区中央～東側で、沖積台地縁辺部を確認した。この縁辺部は、室見川の氾濫により平安期以降に開析されたものと考えられ、台地東縁辺部から室見川にかけて展開する沖積層（暗褐色～黒褐色粘質土）は第4・５区で検出した溝SM04が掘削される以前の堆積である。

第２区

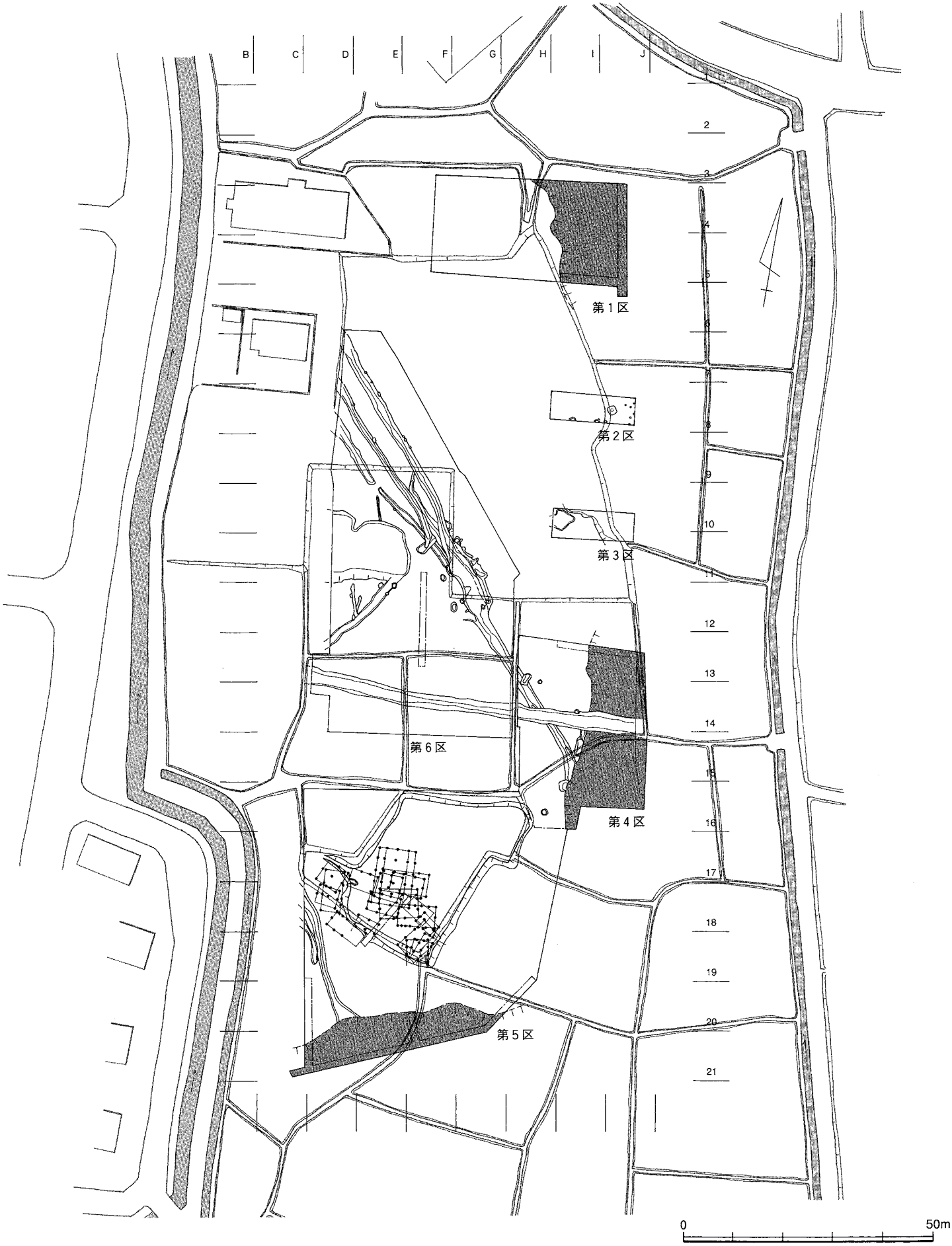
4) 第２区

開発予定地の北側東縁辺部に設定した。調査面積は93.5㎡。当該区では第１区と同じく、旧沖積台地の遺存状況を把握し、遺構の有無を確認するために設定した。検出した遺構は、調査区中央からやや東側にかけて、方形の木組み枠および桶組の井筒を有する井戸（SE02）を１基検出した。廃絶時期は平安末のものである。また調査区南壁で近世の土壙を２基、時期不明の柱穴状ピットを７其検出した。第１区の東側で検出した台地東縁は確認できていない。なお、遺構検出面は標高7.1～7.2ｍで、黄褐色砂質粘土層上面である。

第３区

5) 第３区

第２区の南に設定した。調査面積は95.72㎡である。中央から東側は近代以降の土取りにより大規模に削平され、西側が一段高くなっている（標高7.8m）。この面では撹乱土壙を１基検出したのみである。なお、第2～3区周辺台地部の本来の高さは7.8ｍ以上あったことが推定された。



Fig, 6　周辺地形と調査区配置図（1/1,000）

第４区

6)第４区

第３区の南側、第５区の北東部に隣接する。調査面積は893.38㎡。

当該区では試掘調査で確認された２条の溝および台地部の落ち際の状況観察を調査目的とした。調査では、東西に直線的に延びる平安時代後期～末期の溝SM04と弥生時代～古墳時代の溝SM03、平安末期～鎌倉時代の素掘りまたは井筒に曲物を用いたと思われる井戸３基(SE01・02・04)、土壙１基、および台地際に展開する沖積氾濫原を調査区中央から東側で確認した。沖積氾濫原はSM03とほぼ同時期かそれ以降の堆積で、SMO4よりも古い時期の堆積である。なお、遺構検出面は標高7.3～7.5ｍで、黄褐色～明褐色粘質土層上面である。

第５区

7)第５区

開発予定地の中央から南側に位置している。調査面積は2,613.04㎡。調査区東北部は第４区と接している。当該区中央から北側に、戦後間もないころまで墓地に利用し、その後畑地として使われていたやや小高な沖積台地がある。この台地周辺では試掘調査によって多数の柱穴と溝が確認され、遺構の遺存状況が最も良好な地点である。台地の最頂部は現況で9.5ｍを測る。検出遺構は、台地部で柵列(SA)１条、掘立柱建物(SB01～20)20棟、平安時代後期の木棺墓(SD01)１基、台地下では、調査区西側において、溝(SM01・02)を２条検出した。掘立柱建物は、一部弥生時代のものを含みながら、古墳～平安期のものが重複している。なかでも、両面庇を有する２×５間のSB01、３×３間の総柱のSB08、柵列SA01等は、第４・６区の溝SM04とともに、古代における本遺跡の性格を考える上で重要である。遺物は平安時代後期～末期頃の土師器・黒色土器・瓦器・須恵器質の陶硯破片、中国越州窯系青磁、北宋～南宋代の白磁、朝鮮製陶器等が出土している。第１区と４区で確認された沖積氾濫原は、本調査区東側から南側縁辺に沿って弧を描いて展開しており、古墳時代から奈良・平安前期時代にかけては、台地は南南西から北北東方向に長軸をもつ楕円形を成していたと推定された。なお台地部および台地下における検出面の標高は、それぞれ8.5ｍ前後、7.6ｍ前後で、約１ｍの比高差がある。

第６区

8)第６区

開発予定地の中央から北西部に位置する。調査面積は2,327.18㎡である。本調査区では、試掘調査および第４区の調査で確認された、弥生時代から古墳時代にかかる溝状遺構の配置状況を明らかにすることを目的とした。調査の結果検出された遺構は、弥生時代～古墳時代のものと思われる溝状遺構５条(SM03・05～08)、時期不明の溝２条(SM09・10)、第４区で検出された溝SM04の西側延長部分、不定形土壙(SD03～05)等が検出された。SM03～08の各溝からは、弥生時代前期末～中期初頭の土器および石器、古墳時代の須恵器片などが出土。なお遺構検出面は標高7.3～7.4ｍの明褐色砂質粘土層上面である。

2、遺構と遺物

1) 概要

遺構の遺存状況は各調査区ともあまり良くない。第5区の一部以外は本来の台地状の高まりが中世以降に削平されているためである。遺物もまた二次的堆積状況で、表土直下の包含層から出土したものがほとんどである。比較的原位置を保って出土したものは、第5区木棺墓SD01副葬遺物と第4区SM04埋土中位に投棄された遺物群のみである。ここでは各調査区で検出された遺構と遺物について柵列(SA)、掘立柱建物(SB)、土壙(SD)、井戸(SE)、溝(SM)の順で説明する。掘立柱建物と各遺構からの出土遺物の個別的な内容についてはTab, 1～5を参照されたい。

2) 柵列(SA)

SA01

SA01　第5区で検出された柱穴列である。柱間は2.3～2.42mを測り、ほぼ等間隔である。柱穴の直径は19～26cmで、規模は比較的小さな柵列である。暗褐色粘質土を埋土とする。柱穴列の方向はN－79°－Eで、後述するSB08の長軸とほぼ直交する。

3) 掘立柱建物(SB)

柱穴は第5区の北側に残った沖積台地上で検出された。台地は北側半部の削平が特に顕著で、南側に集中して分布しているかのようであるが、確認できた柱穴はごく一部のものと思われる。柱穴の検出面は、弥生から古墳時代の遺物を含む暗褐色粘質土層上面とその下部の明褐色砂質粘土層上面である。ただし、下部で検出された柱穴には上層から掘り込まれたものも含まれている。暗褐色粘質土層上面で検出された柱穴群のうち、建物が推定復元できたものはSB01～03・06・08～10・16・18・19である。明褐色砂質粘土層上面で検出された柱穴群のうち、建物が推定復元できたものはSB04・05・07・11・13・15・17・20である。これらの建物群の先後関係および、各群の復元建物の方向は以下のように大きく6群に分かれる。なお下の表で下線のあるものは長軸が同一群内で直交するものであり、また(　)の遺構は方向性を同じくするものである。

《遺構の切合い関係》 SB03→SB02
SB09→SB02→SB01→SB04
SB12→SB09
SB09→SB08

《復元建物の方向》

a群	SB12・13・15	(SM03)
b群	SB07・11・17・20	
c群	SB04・05・14	
d群	SB02・09・16・19	
e群	SB01・03・06・18	(SM04)
f群	SB08・10	(SA01)

以上の関係から建物群の変遷は次のようになると考えられる。

1－1期	SB12　SB13　SB15	a	(SM03・05～07)
－2期	SB07・(SB11)・SB17・SB20	b	
2－1期	SB05・SB03・14	c / e	(SM04) (SA01)
－2期	SB09・SB19	d	
	SB02・SB16	d	
－3期	SB08・SB10	f	
－4期	SB01・SB18	e	
	SB04・SB06・(SB18)	e / c	

SB01　**SB01**（Fig, 21）台地中央からやや北側に位置する南北棟である。身舎が2×5間で、総柱の建物である。東西の側面に庇を有しており、推定復元された建物では最も規模の大きな建物である。身舎部分の柱穴は直径が40～47cmで、柱痕跡から推定して、柱は直径26cm前後の大きさが推定できる。庇部分の柱穴は小さく直径30cm内外である。平面形は西北部へわずかに歪んだ長方形である。

SB02　**SB02**（Fig, 22）SB01と重複する2×3間の東西棟である。南側柱のうち南東隅から1間目の柱穴は確認できていない。平面形は西南部へ歪んだ長方形である。南北側柱間は間隔にややばらつきがある。東西梁行の中柱は棟筋におさまっている。西側妻の中柱から土師器丸底杯（Fig, 30-1）が出土している。

SB03　**SB03**（Fig, 22）SB01の南東隅で一部重複している2×3（5）間の東西棟である。北側柱はほぼ等間隔で並んでいるが、南側柱は間隔が不均等である。この建物で注意されるのは、東側2×2間部分が床の可能性がある点である。この部分のみに束柱があり、低い床が設けられていた可能性がある。

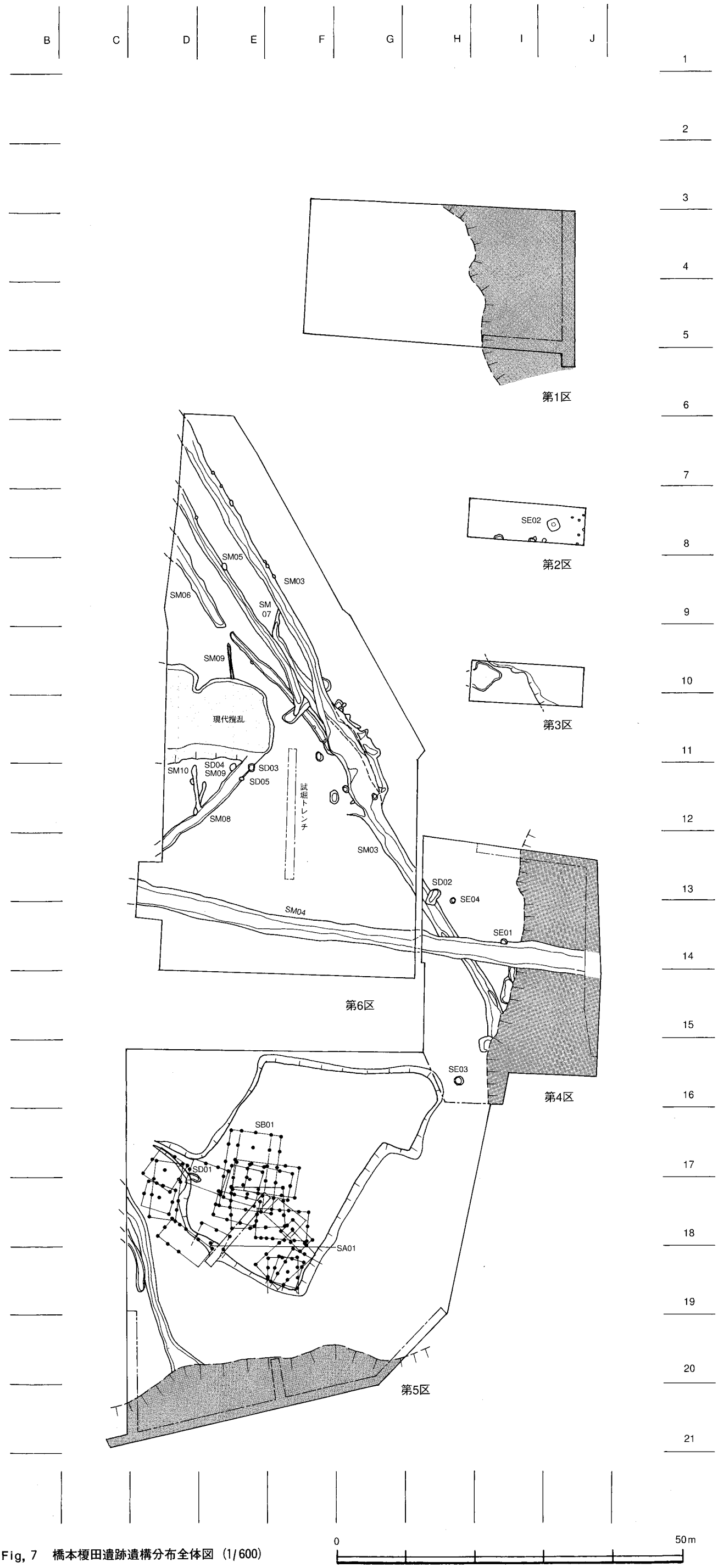
SB04　**SB04**（Fig, 22）SB01の南側に重複している。2×3間の東西棟である。柱の配列は均等で、平面形は長方形を呈する。東側妻の中柱は中央よりに2本配している。

SB05　**SB05**（Fig, 22）SB01の西側に一部重複している。2×3間の東西棟である。北および東側柱、西側妻の中柱は確認できたが、西および南側柱については確認できなかった。

SB06　**SB06**（Fig, 23）SB01中央部分で重複している。2×5間の東西棟である。東側妻の中柱および西南隅柱から1間分東側の側柱は確認できなかった。柱穴は直径20～27cmでやや小さいが、建物規模は長大である。柱の配列は均等である。平面形は南東隅がわずかに歪んでいる。

SB07　**SB07**（Fig, 23）台地南東部に位置する。2×3間以上の南北棟である。柱配列はほぼ均等で、直径20～30cm、柱痕跡は直径18～22cmを測る。

SB08　**SB08**（Fig, 24）SB01の南側に重複している。3×3間総柱の東西棟である。



Fig, 7　橋本榎田遺跡遺構分布全体図（1/600）

Fig, 8　第５区掘立柱建物分布図（1/200）

柱配列はほぼ均等であるが、平面形は南辺がやや広い長方形である。柱穴は30～56cmを測り、柱痕跡は20～28cmを測る。この建物から約１間分（1.86m）南側に柵列SA01が平行して東西に延びている。

SB09　**SB09**（Fig,23）SB01の中央から南側にかけて重複している。２×２間の総柱建物で、南北棟と思われる。西側の中柱は未確認である。南側中柱は隅柱芯間を結んだ線から南にはみ出している。束柱と考えられる平面中央の柱穴は直径22cmで他と比べて小さい。

SB10　**SB10**（Fig,24）台地南東側に位置し、SB07・15・16と一部重複している。２×２間の総柱の東西棟である。平面形は南西隅部がやや歪んだ長方形である。柱穴の直径は40cm前後で比較的大きい。柱痕跡は22～24cmである。

SB11　**SB11**（Fig,24）SB01南西隅部に重複している。１×２間の南北棟である。推定復元した建物では最も規模が小さく、また方向性が他と比べ異質である。

SB12　**SB12**（Fig,25）台地部東南側に位置し、SB03・07・08などと重複している。２×３間の東西棟である。平面形は南西隅部が歪んだ長方形である。西側妻の中柱、西南隅柱から１間分東側の柱穴は未確認である。南北側柱は中央に寄って配されている。層位関係では最も古い建物である。

SB13　**SB13**（Fig,25）台地東南側に位置し、SB03・07・12・15と重複している。SB12・15との先後関係は不明であるが、方向性はほぼ一致しており、古墳時代後期以降と考えられる溝状遺構SM03等とは直交している。

SB14　**SB14**（Fig,25）台地南側に位置している。SB17と一部重複している。２×２間の東西棟の可能性がある。総柱の建物である。南西部は削平を受けている。

SB15　**SB15**（Fig,26）台地南東部に位置する。SB03・07・10・13・16と重複している。２×３間の南北棟で、総柱の建物である。柱穴は北東および南東隅柱が未確認である。柱配列は均等で、平面形は端正な長方形である。

SB16　**SB16**（Fig,25）台地南東部に位置する。SB07・10・15と重複している。２×２間の南北棟で総柱建物である。平面形は端正な方形で、南北がわずかに長い。東側中柱は未確認である。

SB17　**SB17**（Fig,26）台地南西部に位置し、SB14と一部重複している。２×３間の東西棟で長大な建物である。南側柱は一部未確認のものがある。柱穴は直径24～39cmで、柱痕跡は20cm前後を測る。SB07・12・20などと方向性が一致する。

SB18　**SB18**（Fig,27）台地西側に位置する。SB19・20と重複している。１×３または２×３間の長大な南北棟である。柱間は2.3～2.5mを測り、梁行は3.8m前後を測る。南北妻の中柱が未確認のため明確ではないが、桁行の１間は約1.9mほどと考えられる。方向性はSB01と等しく、併存していた可能性が高い。

SB19　**SB19**（Fig,27）台地西側に位置する。２×２間の東西棟である。南西隅柱と床平面中央の束柱は未確認である。２×２間規模の建物では最も規模が小さい。

SB20　**SB20**（Fig,27）台地西側に位置する。２×２間の東西棟で、総柱建物である。北西隅柱は確認できていない。床平面中央の柱穴は直径40cmを測る。SB07・17等と方向をほぼ同じくしている。

Tab, 1　橋本榎田遺跡検出掘立柱建物計測一覧表

遺構No.	間取り規模		長軸方位	梁行×桁行(m)	床面積(㎡)	先後関係
SB01	東西両面庇付 2×5間総柱	南北棟	N－4°－W	7.424×10.88 7.696×11.152	身舎48.43	SB02→SB01
SB02	2×3間	東西棟	N－88°40′－W	4.06 × 6.24 3.904× 6.48	25.41	SB02→SB01 SB02→SB12 SB03→SB02
SB03	2×3 (5)間	東西棟	N－85°30′－W	4.184× 7.46 4.24 × 7.464	31.29	SB03→SB02
SB04	2×3間	東西棟	N－86°－W	3.60 × 6.24 3.64 × 6.32	22.72	SB01→SB04
SB05	2×3間	東西棟	N－80°－W	(5.2)× 3.6	(18.71)	
SB06	2×5間	東西棟	N－87°20′－W	4.304× 9.12 4.368× 9.448	40.5	
SB07	2×3間か	南北棟	N－21°40′－E	不明	不明	
SB08	3×3間総柱	東西棟	N－81°－E	7.328× 6.024 7.744× 6.024	45.87	SB08→SB09
SB09	2×2間総柱	南北棟	N－3°20′－E	4.656× 5.024 4.72 × 5.088	23.53	SB09→SB01 02 08
SB10	2×2間総柱	東西棟	N－81°－E	3.344× 4.264 3.56 × 4.32	14.79	
SB11	1×2間	南北棟	N－19°－E	2.08 × 3.856 2.032× 3.92	7.88	
SB12	2×3間	東西棟	N－60°30′－W	3.024× 5.024 3.48 × 5.184	16.58	SB02→SB12
SB13	2×2間	東西棟	N－57°－W	2.368× 3.696 2.44 × 3.776	8.976	
SB14	2×2間総柱	南北棟	N－74°40′－W	4.32 ×(4.32)	(18.7)	
SB15	3×3間総柱	南北棟	N－37°－E	4.8 × 7.28 4.88 × 7.26	35.69	
SB16	2×2間総柱	南北棟	N－8°－W	3.64 × 3.772 3.768× 4.0	14.144	
SB17	2×3間	東西棟	N－65°－W	3.32 × 7.384 3.304× 7.40	24.522	
SB18	1 (2)×3間	南北棟	N－4°－W	3.84 × 8.08 3.888× 8.12	31.18	
SB19	2×2間	東西棟	N－85°－W	3.488× 4.08 3.69 × 4.255	14.904	
SB20	2×2間	東西棟	N－68°－W	4.48 × 4.68 4.584× 4.864	21.38	

4) 土壙(SD)

SD01

SD01（Fig, 28）第5区北側台地上で検出した。木棺墓と考えられる。掘立柱建物SB05と重複しているが、先後関係は不明である。平面形は隅丸の長方形で、長軸および短軸の長さは、1.91m・1.16mである。長軸の方向はN－69°－W、断面形は逆台形で、深さは検出面から0.4m。床面は平坦で、長方形をなしており長辺1.25m、短辺0.54mを測る。埋土は暗褐色～灰褐色粘質土で、東壁と北壁に一段の平坦なテラスがある。東床面・壁は板材の圧痕が残る。出土遺物からみて12世紀半ばころのものと考えられる。

出土遺物（Fig, 30）副葬品と考えられる土師器皿(3～7)・椀(8・9)が床面からやや浮いた状況で出土している。椀は東西壁際に、皿は中央にまとまって出土している。遺物の出土状況から頭部は西側に位置していたものと思われる。皿はいずれも表面が磨耗しており調整痕は不明であるが、おそらく回転ヘラ切によるもので、板目圧痕が残るものがある。椀8は内面のみに燻しを施した内黒土器である。椀9は焼成があまい須恵質の椀で、底部は幅広の輪高台状に仕上げている。東播磨産の可能性がある。その他埋土から二次的混入の格子目叩き痕の残る瓦片・瓦器等・須恵器・管状土錘10等が出土している。

SD02

SD02（Fig, 28）第4区西側で検出した。古墳時代の溝SM03より古い土壙である。平面形は南北に長い不定形で、断面形は逆台形である。長さ2.57m、幅1.2～1.5m、深さ0.9m、長軸方位N－18°40′－Eを測る。埋土は黒褐色粘質土である。埋土中からは弥生土器の小片がわずかに出土しているのみで、図示し得るものはない。弥生時代前期末～中期以降のものと思われる。

SD03

SD03（Fig, 28）第6区西側に位置する。古墳時代の溝SM08よりも新しい。平面形は隅丸の長方形で、長さ0.98m、幅0.84m、深さ0.16～0.20cm。長軸の方向はN－38°－Wである。埋土は黒褐色～灰褐色粘質土で、木炭片を若干含む。床面は平坦である。出土遺物はない。

SD04

SD04（Fig, 28）第6区西側に位置する。溝SM08よりも新しい。平面形は不定形である。長さ1.58m、幅1.0～1.1m、深さ0.20cm。長軸方向はN－30°－Wである。埋土はSD03と同様に黒褐色～灰褐色粘質土で、木炭片を若干含む。床面は浅く窪んでいる。出土遺物は土師器片が若干出土している。

SD05

SD05（Fig, 28）第6区西側に位置する。SD03の約3m南西側に位置する。溝SM08よりも新しい。平面形は楕円形で、長さ0.75m、幅0.53m、深さ0.12cm。長軸方向はN－79°－Eである。埋土は灰褐色粘質土で、木炭片を若干含む。出土遺物はない。

5) 井戸(SE)

SE01

SE01（Fig, 28）第4区中央に位置する。平安期の溝SM04の北壁に重複している。検出時には扁平な板石で上面を塞いでいた。平面形はほぼ円形で、断面形は円筒状である。直径0.8～0.9m、深さ0.85mを測る。埋土は暗灰褐色粘質土で一時的に埋め戻している。平坦な床面には拳大の河原石を敷き詰めている。素掘りの井戸と考えられる。鎌倉期に廃絶されたものと思われる。

出土遺物　二次的混入により埋土から土師器、白磁、青磁片が出土している。

SE02

SE02（Fig,29）第2区東側で検出した。一辺1.52mの隅丸方形の竪穴を掘った後、井戸床面に桶を倒置し井筒としている。また竪穴の四隅には7～9cm角の柱を立て、ホゾ穴を穿って床面から約1.00mの高さに横木を渡し、長さ80cm以上、幅15～28cm、厚さ3.5～5cmの板目材を土留め用の板枠としている。井筒に用いた桶は口径0.52～0.62m、底部径約0.60m、高さ0.57～0.62mの杉材を用いており、井筒の底には拳大よりもやや大きな礫石を置き、水を汲む際の土砂の混入防止を図っている。12世紀前半代頃に廃絶されたものと思われる。

出土遺物（Fig,30）井筒内の埋土から土師器皿片11、黒色土器12、瓦器椀片13・青磁・白磁片が、また井筒の下部から馬の骨14が出土している。

SE03

SE03（Fig,29）第4区南端部に位置する。平面形はほぼ円形で直径1.43mを測る。底部は二段掘となっており直径0.9m、深さ0.48mを測る。おそらく桶を用いた井筒がおさまっていたと思われる。埋土は黒褐色粘質土で砂礫・木炭片を含んでいる。平安時代末期から鎌倉期に廃絶されたと思われる。

出土遺物　埋土から弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁等の破片が出土している。いずれも小片で磨耗し二次堆積による混入品である。

SE04

SE04（Fig,29）第4区西側、SD02の東側に位置する。平面形は楕円形で、長軸0.94m、短軸0.81m、深さ0.68mを測る。SE01～03と比べ規模が小さい。曲物を用いた井筒を据え置いた可能性がある。埋土は暗褐色粘質土で底部近くに木炭が比較的多く認められた。廃絶時期は明確でないが平安時代末期に廃絶されたものと思われる。

出土遺物　土師器破片・須恵器片がわずかに出土している。

6)溝状遺構(SM)

溝は全調査区で10条確認されている。これらは弥生時代前期末から平安時代にかかる時期のものである。調査で確認された先後関係は下記のようになる。

・SM01→SM02
・SM03→SM04
・SM07→SM06→SM05
・SM07→SM06→SM03
・SM08→SM09→SM10
・SM03とSM05との直接の切合い関係はないが、出土遺物から見てSM03→SM05の関係が考えられる。
・SM01・05・08は一連の溝の可能性がある。

これらの所見をもとに、出土遺物から時期区分をすると次のようになる。

弥生時代前期末以降	古墳時代後期以降	平安時代後期～鎌倉時代
SM07	SM06	
←――	SM03→	SM09
	SM05	SM10
	SM08	SM02
	SM01	SM04

次に各溝の調査所見について述べる。

SM01

SM01（Fig, 17）第５区の西南側に位置している。古墳時代後期以降の溝である。長さ26ｍ以上、幅1.2ｍ～1.4ｍ、深さ0.4～0.6ｍを測る。断面形は逆台形で、緩やかに蛇行しながら北西～南東方向に延び、台地縁辺部と氾濫原の境で大きく開きながら終わっている。おそらく南側の氾濫原に流れこんでいたものと思われる。埋土は灰褐色～暗褐色粘質土で床面には黒色粘質土が薄く堆積している。なお、SM01はSM05・08と一連の溝と考えられる。

SM02

SM02（Fig, 17）第５区の西南側に位置する。SM01と重複している。SM01よりも新しい。溝南端部は消滅している。長さ８ｍ以上、幅1.0～1.2ｍ、深さ0.17ｍを測る。埋土は灰色～暗青灰色砂質土である。

SM03

SM03（Fig, 18）第４区と第５区にかけて検出した。ほぼ直線的に延びる溝である。総延長は101ｍ、幅1.8～2.1ｍ、深さ0.5～0.7ｍを測る。主軸の方向はＮ－47°40′－Ｗである。断面形は、基本的には逆台形と思われるが、部分的に浅皿状になる箇所もある。埋土は暗灰褐色粘質土を主とする（Fig, 19）。

第６区中央ではSM05・06・07・08が重複しており埋土が質的に類似しているために、明確な平面形および溝の走向の状況を確認することが難しかったが、土層断面の結果（Fig, 19）で先述したような先後関係が確かめられた結果、第５区の北側で３条並列している溝のうち、東端側の溝が第４区SM03につながるもので、また、最も古く考えられるSM06・07はSM03北側の当初部分と考えられた。すなわち、第６区中央から北側において、ある時期に溝の流路を東側に変更したものと考えられる。SM03の上限は古墳時代後期以降と考えられる。

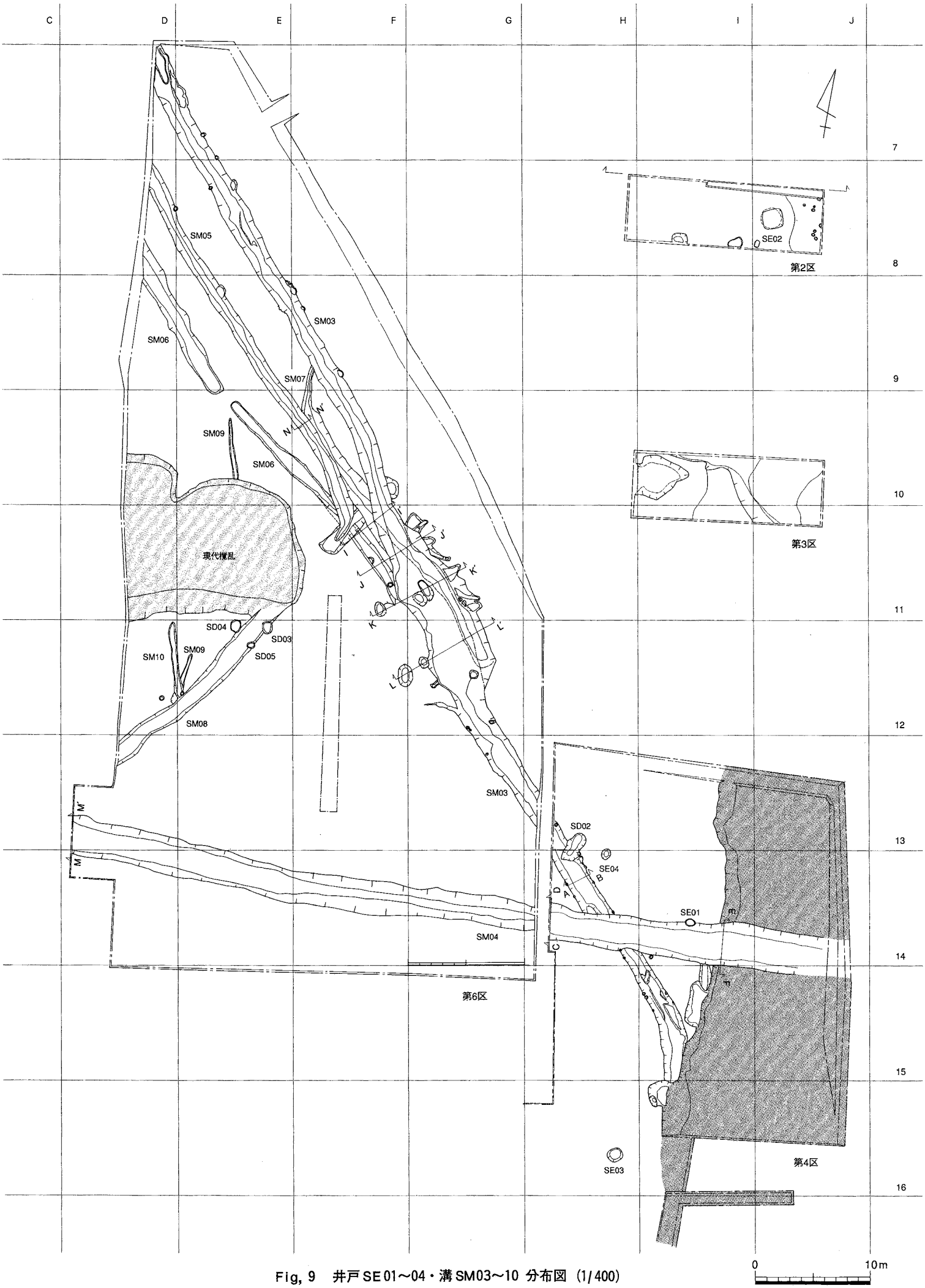
出土遺物（**15～56**）弥生前期末～中期土器甕等の破片、黒曜石片、玄武岩破片、黒曜石または頁岩製の打製石鏃（**18～46**）、石斧（**47・49・50・53～55**）、石包丁（**52**）、磨石（**56**）、管状土錘（**48**）、土師器甕・甑片、古墳時代須恵器（杯**15～17**、甕など）片が中層から下層にかけて、上層から上面で黒曜石製ナイフ形石器（**18**）、中国産の北宋代の白磁片が出土している。弥生時代の遺物はかなり磨耗している。これらはいずれも二次的な堆積である。

SM04

SM04（Fig, 14, 18）第４区中央から５区にかかって検出された平安時代末期の溝である。ほぼ直線的に東西に延びている。主軸の方向はＮ－87°30′－Ｅである。調査では長さ65ｍにわたって検出した。溝の両端はいずれもさらに延びている。断面形は逆台形である。南北両壁の傾斜は50～60°ほどで比較的傾斜が強く掘削されている。幅は2.2～3.1ｍ、深さは0.8ｍ～0.93ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土を主とし、灰白色砂が下部から中位にかけて薄く堆積している。

当該溝の早良平野における復元条里上における位置を推定すると、里境から北に１坪分（約118ｍ）北側へいった坪境上に位置している（Fig, 10）。

出土遺物（**57～175**）遺物はほとんどが埋土下層～中位からの出土で、二次的混入によるものが多く、いずれも磨耗している。出土分布は第５区東側から第４区の範囲が密度が高く、特に４区においては南壁側から投棄されたと考えられる土師器破片等が集中的に出土した。出土した遺物には、弥生土器（甕・鉢・壷など）、土師器（皿**57～68・84～92・111～120・136・160・161・168・169**、



Fig, 9　井戸SE01～04・溝SM03～10 分布図 (1/400)

高台付皿93、丸底杯122・134・138、杯94・121・135、椀123)、黒色土器、瓦器(椀69～74・95～97・99～104・124～127・130～133・139～143・162～164、杯98、皿137)、須恵器(壷152、甕156、杯165)、中国産宋代白磁(皿75・76・147・148、椀77～82・105・106・109・128・129・144～146・149～151・167・171)、越州窯系青磁(壷83、椀107・166、皿108)、中国産陶器(鉢110)、滑石製品(紡錘車153、石鍋破片154、円面硯155、土錘170、板材172、下駄173、不明木製品174・175、馬下顎骨 (00906) などである。

SM05 **SM05** (Fig, 18) 第5区北側から中央に位置する。古墳時代後期以降の溝である。幅1.2～1.3m、深さ0.4～1.5mを測り、断面形は逆台形または浅皿状である。調査では長さ約37mにわたって検出された。南端部は南西に向かって屈曲しており、底部が緩やかに高くなりながら消滅している。その方向はSM08の方向に等しく、本来両者は同一の溝と考えられる。

出土遺物 須恵器、弥生土器、黒曜石の破片が埋土中位から上層にかけて散発的に出土している。

SM06 **SM06** (Fig, 18) 第5区北側から中央に位置している。古墳時代の溝である。幅1.3～2.15m、深さ0.45m前後を測る。断面形は浅皿状であるが、逆台形をなしていたと思われる。調査では長さ38.2mを確認し、調査区西壁から14.8mの地点で1.7mの長さでいったん途切れている。南端部はSM03西壁に接する。

出土遺物 埋土中位から溝底部にかけて弥生土器・土師器片が出土している。

SM07 **SM07** (Fig, 18) 第5区中央に位置する。弥生時代中期以降の溝である。北端部はSM03によって切られている。すでに述べたように、SM07はSM03北側の付け替え以前の溝である。古墳時代以降の溝から切られている。断面形はV字形または逆台形で、幅0.8～1.8m、深さ0.54m前後を測る。

出土遺物 埋土および溝底部から弥生前期末～中期の土器片、玄武岩と黒曜石破片が出土している。

SM08 **SM08** (Fig, 18) 第5区中央から南西部に位置する。溝東北端部は現代の撹乱によって消滅している。先述したSM05の一部と思われる。SM05との間には、少なくとも約3mの間隙があったことが考えられる。

出土遺物 遺物の出土量は少なく、弥生土器・土師器片が若干出土している。

SM09 **SM09** (Fig, 18) 第5区南西部に位置する。鎌倉期以降の比較的新しいと考えられる溝である。非常に残りが悪く、幅0.6m、深さ0.2m前後を測る。土壙SD03～05によって切られている。

出土遺物 遺物の出土量は少なく、弥生土器・土師器片が若干出土している。

SM10 **SM10** (Fig, 18) SM08・09を切っている。鎌倉期以降の溝である。遺存状況は悪く、幅0.7m、深さ0.3m前後である。

7) その他の遺物

各調査区の表土・表土直下の包含層、台地落ち際の氾濫原包含層などから各種の遺物が出土している。いずれも二次的に堆積したものである。重要と思われるものを、抜き出し、Fig, 39～44に図示した。個別の説明はTab, 2・3を

参照されたい。ここでは出土遺物の概要について述べる。

出土遺物は、弥生時代の土器片が大量にあるが、磨耗が顕著で小さな破片が多く図示し得るものは少なかった。時期的には弥生時代前期末から中期前半代にかかるもので、182～192・193・194・270～274はこの時期の所産のものと思われる。

出土遺物で主体となるのは、平安時代の遺物である。10世紀後半から12世紀半ば頃におさまると考えられ、特に、中国産越州窯系青磁214・216・219・240・250～256・258・263・267、新羅土器179～181、北宋代白磁195・197・198・241～243・245・246等は注意される。

国内産の陶器で注意されるのは、東播磨産と考えられるコネ鉢238等がある。SD01副葬品中の椀9と同様12世紀代のものと考えられる。

本遺跡の終末時期を推定する遺物に、鎌倉時代13世紀半ば頃の龍泉窯系青磁256、口禿の白磁257等があるが、数量的にきわめて少なく、遺物の出土状況から見ると、本遺跡の終末期は12世紀半ば頃と考えられる。

第4区溝SM04 馬下顎骨出土状況

第4章　結　　語

以上、調査所見について述べてきたが、今回の橋本榎田遺跡の調査成果についてまとめると以下のようになる。

1、検出遺構について

橋本榎田遺跡の発掘調査は開発面積22,504.43㎡のうち、遺構の存在が予想された6地点について調査区を設定し、総面積6,832.07㎡を調査した。各調査区とも後世の削平や掘削等によって遺構の遺存状況は悪かった。検出遺構は、第1区では氾濫原の一部の確認、第2区では平安時代後期の井戸SE02、第3区では近代以降の土取り跡、第4区では土壙SD02、井戸SE01・03・04、溝状遺構SM03・04、氾濫原、第5区では旧沖積台地上に1条の柵列SA01、20棟の掘立柱建物、木棺墓SD01、溝状遺構SD01・02、第6区では溝状遺構SM03～10、土壙SD02～04がある。

これらの遺構群は、弥生時代前期末から中期初頭を上限として、下限が平安時代末期頃までのものと考えられ、平安時代後期の遺構群が本遺跡を特色づけるものである。

以上の遺構群の先後関係は、遺構間の切合い関係、氾濫原と遺構との先後関係、各遺構内の埋土、規模、方向性等を勘案すると、大きく2群に分けられ、下記Tab,2のようになると推定された。

Tab,2　橋本榎田遺跡検出遺構編年表

	掘立柱建物	方向性	柵列・溝状遺構	土壙	井　戸	推定時期
1-1期			SM07			弥生時代まで遡るか
	SB12　SB13　S15	a	SM06			↑
			SM03			古墳時代後期以降
1-2期	SB07・(SB11)・SB17・SB20	b	(SM01・05・08)			
	氾濫原（湿地または水田化）					
2-1期	SB05・SB03・14	c/e				平安時代10世紀半
2-2期	SB09・SB19	d	↑			
	SB02・SB16	d	(SM04)			≀
2-3期	SB08・SB10	f	(SA01)		↑	
2-4期	SB01・SB18	e	↓	SD01	SE01・02	12世紀後半
	SB04・SB06・(SB18)	e/c	SM02・09・10		SE03・04	

2、出土遺物について

遺構の遺存状況が悪かったこともあり、原位置で出土した遺物は少ない。第5区木棺墓SD01副葬遺物と第4区SM04埋土中位に投棄された遺物群が比較的まとまって出土したのみで、ほとんどが表土・包含層から出土した。出土量はコンテナケースで約40箱分で、調査面積に比して量的にはさほど多くない量である。

時代別に出土遺物をみると、先土器時代の石器、弥生時代前期から中期前半の土器・石器、古墳時代後期の須恵器、土師器、平安時代の国産土器（土師器、須恵器、瓦器等）、瓦、須恵質陶硯、滑石製品（石鍋等）、中国産青磁・白磁、朝鮮産陶器（新羅～高麗）、鎌倉時代の土師器・中国産青磁などがある。また木製品、馬下顎骨等も出土している。

ナイフ形石器

先土器時代のナイフ形石器18は形態的に見て当該時期終末に近い頃のものと思われる。

弥生時代の土器片が大量にあるが、磨耗が顕著で小さな破片が多く図示し得るものは少なかった。時期的には弥生時代前期から中期前半代にかかるもので、182～192・193・194・270～274はこの時期の所産のものと思われる。磨製石鏃46・47は前期後半代の大陸系のものと考えられる。黒曜石のチップ、玄武岩の砕片等も出土しており、弥生時代のある一定期間において、当該地で集落が営まれた可能性が高い。

越州窯系青磁

出土遺物で主体となるのは、平安時代の遺物である。9世紀代のものがわずかにあり、10世紀後半から12世紀後半頃のものが主体となる。中国産越州窯系青磁214・216・219・240・250～256・258・263・267、朝鮮産陶器179～181、北宋代白磁195・197・198・241～243・245・246等は、10世紀後半から11世紀代の本遺跡の性格づけを行うにあたって重要な遺物である。国内産の陶器で注意されるのは、9世紀代のものと考えられる須恵質の円面硯155がある。また、やや時代は降るが東播磨産と考えられるコネ鉢238、畿内系の瓦器13等がある。これらはSD01副葬品中の椀9と同様12世紀半ば頃と考えられ、当該期の国内流通の一端を知ることができる。

円面硯

本遺跡の終末時期を推定する遺物としては、鎌倉時代13世紀半ば頃以降と考えられる龍泉窯系青磁256、白磁218、口禿の白磁257等があるが、数量的にきわめて少ない。

したがって、遺物の全般的な出土状況および遺構のあり方から考えると、本遺跡は、弥生時代前期後半から末期を上限とする弥生時代、古墳時代後期以降の時期、平安時代後半から終末期の3時期に大きく区分できる（Tab, 2）

3、まとめ

ここでは、橋本榎田遺跡の主体である平安時代後期の遺構群を中心に遺構配置等について述べまとめとする。

遺構の構成を見ると、おそらく氾濫原が形成された古墳時代後期以降から奈良時代もしくは平安時代初期を境として遺構の配置のあり方が、大きく変化し

ていることがわかる。すなわちそれ以前の遺構群はSM03をはじめとする磁北から西へ大きく偏する溝状遺構に規制されたあり方を示しているのに対して、それ以降の平安時代後期以降と考えられる遺構群はSM04の方向性にほぼ規制されているとみなすことができる。

早良区条里

日野氏によると、早良平野の条里は単一条里区からなり、その南北基軸線の方向は座標軸北から7°20′西に偏しており（東西軸は97°20′西偏）、また駅路は『和名抄』に記す田部郷（現在の小田部）とその南に続く有田の間を復元条里に平行しながら東西に横断すると想定している（Fig, 10の点線）。

この復元案と、先述の溝SM04の配置関係を図化するとFig, 10の様になる。

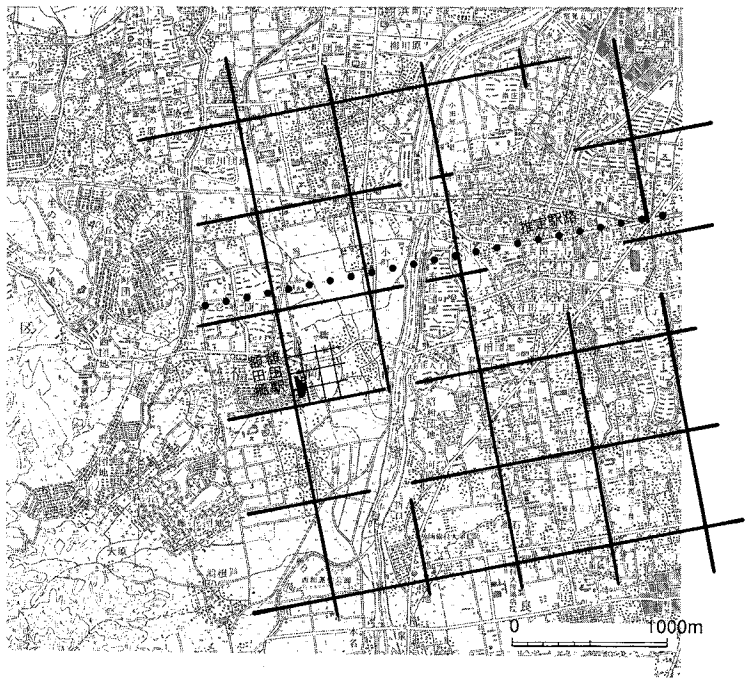
駅路

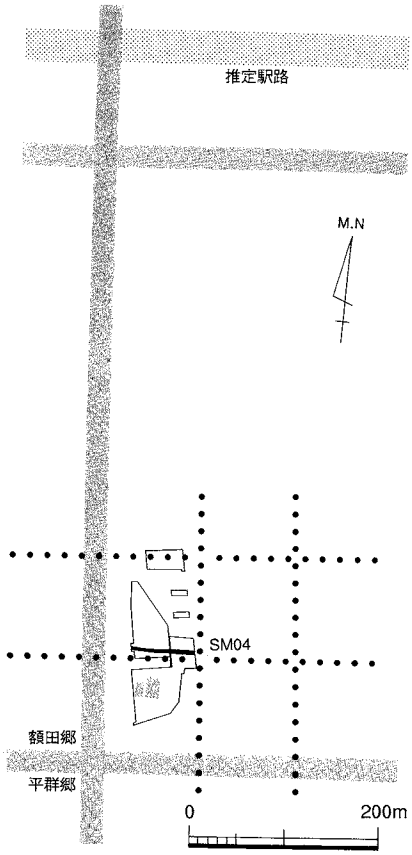
SM04の復元条里における位置は、駅路推定線から南へ7町（約750m）下った東西里境（現在この境は大字橋本と大字戸切の境界である）から北へ約1町上った東西坪境上にほぼ近い。またSM04の主軸方位は磁北から西へ92°20′偏している。国土地理院座標軸に換算するとN－98°21′－Wとなり、方位の上では約1°のずれがあるが、検出範囲が狭いこともあり大局的にはほぼ合致していると考えられる。

したがって、今回の調査で検出されたSM04およびそれと方向を同じくするSB08等の建物群は、条里地割りに規制されたものと想定でき、その開始時期は遡って10世紀後半代以降と一応考えられる。なお、SM04から南へ約1町下ったの東西里境は額田郷と平群郷との郷境にあたる可能性が高く、本遺跡は額田郷内に属する遺跡と考えられる。

平安時代後期居館跡

これらの遺構から構成される本遺跡の性格については、先述した遺物から見て、在地豪族層の居館跡と一応考えておきたい。SB01等は建物施設の内主要な建物とみなすことができ、総柱の高床倉庫と考えられるSB08等の大型家屋の存在は一時期当該地が郷倉的な機能を有していた可能性も示唆している。





Fig, 10　復元条里と橋本榎田遺跡の位置（1/50,000・1/8,000）

Tab, 3　橋本榎田遺跡出土土器・陶磁器所見一覧表

凡例｛素は素地(胎土)の略
　　｛法量の口径は外径、(　)は復元値

Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	高台径	形態・技法上の特徴 成形・製作手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土遺構
30	14	1	646	土師器	丸底杯	14.7	3.8	—	—	—	口縁部内面～体部外面は回転ナデ。内面にヘラ先による暗文有。回転糸切底。	明褐色	良	良	SB02
30	14	3	649	土師器	Ⅲ	10.8	1.2	7.7	—	—	口縁部内～外面はヨコナデ。板目圧痕有。	明褐白色	良	軟	SD01 P2
30	14	4	650	土師器	Ⅲ	10.7	1.3	8.2	—	—	口縁部内～外面はヨコナデ。板目圧痕有。	明褐白色	良	軟	SD01 P3
30	—	5	652	土師器	Ⅲ	10.4	1.6	8.2	—	—	口縁部内～外面はヨコナデ。	明褐白色	良	軟	SD01 P6
30	14	6	651	土師器	Ⅲ	10.8	1.4	7.8	—	—	体部及び口縁部内～外面はヨコナデ。	明褐白色	良	軟	SD01 P4
30	—	7	655	土師器	Ⅲ	10.5	1.4	9.8	—	—	口縁部内～外面は回転ナデ。	明褐白色	良	不良	SD01
30	14	8	653	土師器(内黒)	高台付椀	15.1	5.9	—	0.6	6.8	口縁部内～外面はミガキ。体部内面はヘラ先による磨研。高台はナデツケ。	黒灰色 外下半：明褐色	良	やや良	SD01 P8
30	14	9	654	土師器	椀	15.3	6.2	7.7	—	—	口縁部内～外面は回転ユビナデ。体部外面にロクロ回転による水引き痕有。回転ヘラ切り底。	灰～暗灰色 体部：灰色	やや良	不良	SD01 P8
30	—	11	662	土師器	Ⅲ 口縁部片	(9.2)	1.4	6.6	—	—	口縁部内～外面は回転ナデ。	明褐白色	良	やや良	SE02
30	—	12	663	黒色土器	椀 底部片	—	—	—	1.2	6.2	外面はナデツケ、指圧痕有。	黒灰色	良	軟	SE02
30	—	13	661	瓦器	椀 口縁部片	(16.5)	5.5	—	—	—	内～外面ヘラミガキ。	灰白色	良	軟	SE02
30	—	15	685	須恵器	杯蓋片	11.6	3.7	—	—	—	内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	青灰色	良	堅緻	SM03 D7下層
30	—	16	689	須恵器	杯蓋片	14.2	4.2	—	—	—	回転ヘラ切り底。	青灰色	良	堅緻	SM03 D8最下層
30	14	17	684	須恵器	杯身片	11.7	4.05	受け部径 13.9	受け部かえり高 1.0	—	内～外面は回転ナデ。回転ヘラケズリ底。	青色～灰色	良	堅緻	SM03 D6·7下層
33	—	57	852	土師器	Ⅲ片	9.0	1.4	7.0	—	—	底部内面はヨコナデ。回転ヘラ切り底。板目圧痕有。他は回転ナデ。	明褐色	良	軟	SM04 試掘
33	—	58	872	土師器	Ⅲ片	9.4	1.5	7.2	—	—	底部内面はヨコナデ。ヘラ切り底。板目圧痕有。他は回転ナデ。	明褐色	良	良	SM04
33	—	59	873	土師器	Ⅲ片	9.7	0.9	8.0	—	—	ヘラ切り底。板目圧痕有。他は回転ナデ。	明褐～明褐白色	良	不良	SM04
33	—	60	868	土師器	Ⅲ	10.4	1.4	7.7	—	—	ヘラ切り底か？他は回転ナデ。	明褐白色	良	軟	SM04
33	—	61	867	土師器	Ⅲ	10.2	1.2	7.0	—	—	口縁部内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	明黄白色～明褐白色	良	軟	SM04
33	—	62	763	土師器	Ⅲ	9.1	1.3	7.4	—	—	ヘラ切り底か？調整不明。	淡褐色	やや粗い	不良	SM04 下層
33	—	63	853	土師器	Ⅲ片	(10.0)	1.4	8.4	—	—	内面～体部外面はナデ。	明褐色	良	良	SM04 ベルトlb層F13
33	—	64	755	土師器	Ⅲ片	9.5	1.4	(7.1)	—	—	ヘラ切り。調整不明。	淡褐色	やや細かい	不良	SM04 F13
33	—	65	869	土師器	Ⅲ	9.2	1.6	6.9	—	—	内面～口縁部外面はヨコナデ。体部外面は回転ナデ。ヘラ切り底。板目圧痕有。	明褐色	良	良	SM04
33	—	66	871	土師器	Ⅲ片	9.1	1.3	6.7	—	—	内面～口縁部外面はヨコナデ。体部外面は回転ナデ。ヘラ切り底。板目圧痕有。	明褐色	良	良	SM04
33	—	67	874	土師器	Ⅲ片	9.4	(1.5)	(7.6)	—	—	内～外面は回転ナデ。ヘラ切り底。	明褐白色	良	軟	SM04
33	—	68	870	土師器	Ⅲ	9.1	1.9	7.3	—	—	内面～口縁部外面はヨコナデ。体部外面は回転ナデ。ヘラ切り底。板目圧痕有。口縁部に油煙が付着。	灰褐白色	良	良(やや軟)	SM04
33	—	69	865	瓦器	椀片	15.7	4.5	—	0.5	6.0	内面～口縁部外面は回転ナデ後ミガキ。内面に重ね焼き痕、外面に指圧痕有。	黒灰色	良	良	SM04
33	—	70	866	内黒土器	椀片	15.5	(5.3)	—	—	—	高台剥離。内面から口縁部外面を燻している。調整痕は不明瞭	黒灰色 外：明褐白色	良	不良	SM04
33	15	71	740	内黒土器	椀	17.6	5.6	—	0.8	7.1	口縁部内～外面は回転ヘラミガキ。他は手打ちヘラミガキ。高台貼付後ヨコナデ。口縁部内面にコテアテ痕有。	淡灰白色 口縁は黒変	細かい	良	SM04 E13
33	15	72	716	瓦器	椀	17.0	5.5	—	0.3	7.1	内面は回転ヘラ後ヘラ先による不定方向のミガキ。外面は回転ヘラミガキ。高台はナデツケ後手持ちヘラミガキ。	灰色 外,口縁部：黒色	良	良	SM04 P5
33	—	73	760	瓦器	椀片	15.8	4.7	—	0.5	6.1	糸切り底。	灰白色	やや細かい	不良	SM04 1層
33	15	74	759	瓦器	椀片	16.7	5.9	—	0.5	6.8	内面ヘラ先のナデツケ。口縁部内～外面は回転ヨコナデ。高台はナデツケ。体部外面下部に指圧痕。底にヘラ記号有。	灰～灰白色 外,口縁：黒灰色	良	良	SM04 1層
33	—	75	864	白磁	Ⅲ片	10.2	(2.5)	(3.4)	—	—	外面ヘラケズリ。底部·体部下部は露胎。内面見込に界線をめぐらす。	素：白色 釉：灰白色半透明	精良	堅緻	SM04

凡例｛素は素地(胎土)の略
法量の口径は外径、( )は復元値

Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	高台径	形態・技法上の特徴 成形・製作手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土遺構
33	19	76	733	白磁	Ⅲ 口縁部片	10.0	(2.2)	—	—	—	口縁部外面はヨコナデ、体部外面は回転ヘラケズリか？ 口縁部内面～外面体部施釉。	素：灰白色 釉：淡灰白色透明	良	堅緻	SM04 D13
33	—	77	734	白磁	椀 口縁部片	16.8	(4.1)	—	—	—	体部外面下部ヨコナデ。 口縁部内面～体部外面施釉。	素：乳白色 釉：白濁色不透明	良	やや良	SM04 D13
33	—	78	751	白磁	椀 口縁部片	17.0	—	—	—	—	内面～口縁部外面は回転ナデ。体部外面は回転ヘラケズリ。体部外面中央部は露胎。	灰白色 半透明	良	堅緻	SM04 F13
33	—	79	750	白磁	椀 口縁部片	16.5	—	—	—	—	口縁部外面はナデ。体部外面はヘラケズリ、下半以下は露胎。	素：白色 釉：灰色透明	良	堅緻	SM04 F13
33	—	80	746	白磁	椀 底部片	—	—	—	0.7	5.4	体部外面下半は回転ヘラケズリ。 内面～体部外面は施釉。	素：淡灰白色 釉：白濁色不透明	良	良	SM04 F13
33	—	81	748	白磁	椀 底部片	—	—	—	0.9	5.1	高台は回転ロクロ仕上げ。 高台外面は露胎。内面に櫛描文。	黄緑灰色	良	やや 不良	SM04 F13
33	—	82	747	白磁	椀 底部片	—	—	—	1.3	6.0	内面に沈圏線１条。櫛目文を有す。	素：灰白色 釉：灰色透明	良	堅緻	SM04 F13
33	15	83	744	青磁	壺胴片	—	(18.6)	—	—	—	外面はヨコナデ。内面は痕を残す。 内・外面施釉。	素：灰白色 釉：青灰色不透明	細かい	良	SM04 F13
34	—	84	861	土師器	Ⅲ片	8.4	1.0	6.8	—	—	内～外面は回転ナデ。回転糸切り底。	明褐色	良	軟	SM04 崩壊層上面
34	—	85	860	土師器	Ⅲ片	9.6	1.5	8.0	—	—	内面はヨコナデ。口縁部内～外面は回転ナデ。回転糸切り底。板目圧痕有。	明褐色	良	良	SM04 崩壊層
34	—	86	722	土師器	Ⅲ片	9.1	1.2	6.6	—	—	内～外面は回転ナデ。回転糸切り底。	明褐色	良	軟	SM04 P13
34	15	87	762	土師器	Ⅲ	8.5	1.4	6.6	—	—	糸切り底。	淡褐色	細かい	やや良	SM04 1層
34	—	88	723	土師器	Ⅲ片	9.1	1.2	7.5	—	—	内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	暗褐色	良	軟	SM04 P14
34	15	89	728	土師器	Ⅲ片	9.1	1.2	7.5	—	—	内～外面はヨコナデ。回転糸切り底。 板目圧痕有。	明褐色	良	軟	SM04 P19
34	—	90	717	土師器	Ⅲ	8.7	1.4	6.7	—	—	内～外面は回転ナデ。 底はヘラ切り後ナデ仕上げ。	灰褐色	良	やや良	SM04 P７
34	15	91	732	土師器	Ⅲ	9.2	1.5	7.0	—	—	ヘラ切り底。	淡赤褐色	粗い	不良	SM04 D５
34	—	92	764	土師器	Ⅲ片	9.6	1.0	7.3	—	—	ヘラ切り底。板目圧痕有。	淡橙色	細かい	不良	SM04 1層
34	15	93	729	土師器	脚付杯	10.7	3.4	脚底径 6.4	脚高 1.1	—	見込みは不定方向のヘラミガキ。他は回転ヘラケズリ。ヘラ切り底。板目圧痕有。	明褐白色	良	良	SM04 P21
34	—	94	859	土師器	杯片	16.6	(2.6)	(13.0)	—	—	内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	暗褐～ 灰褐色	良	不良	SM04 崩壊層
34	16	95	772	瓦器	椀	15.6	5.6	—	0.5	6.8	内～外面はヘラ先によるミガキ。 高台はナデツケ。外面下半に指圧痕有。	明褐色	良	軟	SM04 崩壊土上層
34	16	96	718	瓦器	椀	16.0	5.3	—	0.6	6.7	内面は回転ナデ後ミガキ。口縁部内～外面は回転ナデ後ヘラミガキ。高台はナデ後一部ヘラミガキ。	明灰色	良	良	SM04 P８
34	16	97	719	瓦器	椀片	16.5	5.0	—	0.5	6.8	内～体部外面は回転ヘラミガキ。 高台はナデツケ。	灰～暗灰色 口縁外面：黒色	良	やや良	SM04 P8·9 ２層
34	16	98	720	瓦器	丸底杯	17.0	5.2	—	—	—	内面はヨコナデ・ミガキ。体部外面は回転ヘラミガキ。 回転ヘラ切り底。板目圧痕の後手持ちヘラケズリ。	灰～暗灰色 口縁外面：黒灰色	良	やや良	SM04 P９ 1·2層
34	16	99	721	瓦器	椀片	16.6	5.9	—	0.5	6.0	見込みはヨコ方向のヘラミガキ。口縁部内～外面はナナメ方向のヘラミガキ。外面は回転ヘラケズリ。高台は回転ナデ。	灰～暗灰色 内半分，口縁：黒灰色	良	良	SM04 P10
34	16	100	724	瓦器	椀	16.8	5.3	—	0.6	6.1	内面～口縁部外面は手持ちヘラミガキ。体部外面は手持ちヘラミガキの後ケズリ。高台はヨコナデ。板目圧痕有。	内：黒銀灰色 外：黒灰～暗灰色	良	良	SM04 P15
34	16	101	725	瓦器	椀	16.5	4.5	—	0.7	6.3	内面はヨコ方向のヘラミガキ。口縁～体部外面は回転ヘラミガキ。ヘラ記号有。	灰色～暗灰色 口縁：黒灰色	良	良	SM04 P16
34	16	102	726	瓦器	椀片	16.6	5.1	—	—	—	内～外面回転ヘラミガキ。	暗灰褐色	良	良	SM04 P17
34	16	103	727	瓦器	椀片	17.2	5.8	—	0.5	7.7	内～口縁部外面はナデ後ヘラミガキ。体部外面はヘラミガキ。高台はナデ。回転糸切り底。	黒灰～灰色	良	やや良	SM04 P18
34	16	104	730	瓦器	椀片	16.1	5.2	—	0.6	6.0	内～外面は手持ちヘラミガキ。高台はナデツケ。底は板目圧痕をナデツケ。	内：黒灰～銀灰色 外：黒灰～暗灰色	良	良	SM04 P22
34	—	105	863	白磁	椀 底部片	—	—	—	0.8	6.8	高台は回転ヘラケズリ、露胎。	素：白色 釉：青緑透明	良	堅緻	SM04
34	16	106	715	白磁	椀	15.4	6.0	—	0.9	6.4	体部外面はヨコナデ、下半は回転ヘラケズリ。 見込みに釉輪ハギ、その上に胎土目が残る。	空色がかった 灰白色半透明	やや良	堅緻	SM04 P２
34	—	107	857	越州窯 系青磁	椀 底部片	—	—	—	0.5	7.0	畳付に目痕。全面施釉。	赤褐色	良	堅緻	SM04 崩壊層
34	—	108	858	越州窯 系青磁	Ⅲ 底部片	—	—	5.7	—	—	見込み・畳付に目痕。畳付はカキトリ。	茶褐色	良	堅緻	SM04 崩壊層

凡例｛素は素地(胎土)の略
法量の口径は外径、(　)は復元値

Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	高台径	形態・技法上の特徴 成形・製作手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土遺構
34	19	109	757	白磁	椀 口縁部片	15.2	—	—	—	—	体部外面は回転ヘラケズリ、下位は露胎。	白色透明	良	堅緻	SM04 1層
34	—	110	768	陶器	鉢片	25.6	11.2	12.8	—	—	内～外面ヨコナデ。口縁部内面は貼付。	暗灰褐色～暗紫灰褐色	良	良	SM04 2層
35	16	111	790	土師器	小皿	9.0	1.5	7.6	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡褐色	細かい	良	SM04 2層
35	16	112	793	土師器	小皿片	(8.8)	1.4	(6.6)	—	—	口縁部内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡黄白色	細かい	やや良	SM04 2層
35	16	113	791	土師器	小皿	9.4	1.4	7.9	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡褐色	細かい	やや良	SM04 2層
35	16	114	792	土師器	小皿片	(9.8)	1.4	(8.6)	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡灰褐色	細かい	やや良	SM04 2層
35	—	115	794	土師器	小皿片	(8.8)	1.4	(6.0)	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。板目圧痕有。	淡褐色	細かい	やや不良	SM04 2層
35	16	116	789	土師器	小皿	9.2	1.5	7.9	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。板目圧痕有。	淡褐色	細かい	良	SM04 2層
35	—	117	795	土師器	小皿片	(9.0)	1.2	(5.0)	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡褐色	細かい	やや良	SM04 2層
35	—	118	798	土師器	小皿片	(9.6)	1.1	(8.0)	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。板目圧痕有。	淡赤褐色	細かい	良	SM04 2層
35	—	119	796	土師器	小皿片	(9.6)	1.2	(7.3)	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。板目圧痕有。	淡赤灰色	細かい	良	SM04 2層
35	—	120	797	土師器	小皿片	(9.8)	1.3	(7.7)	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡黄白色	細かい	不良	SM04 2層
35	—	121	788	土師器	丸底杯片	16.4	2.5	(12.6)	—	—	内面はミガキか？口縁部内面～体部外面はヨコナデ。ヘラ切り底、指圧痕有。	褐色	細かい	良	SM04 2層
35	—	122	787	土師器	丸底杯片	15.3	3.3	7.8	—	—	内～外面はヘラケズリ。	赤～明褐白色 底部：黒色	良	やや軟	SM04 2層
35	—	123	784	瓦器	椀	16.7	—	—	—	—	内外面とも丁寧なヘラミガキ。口縁部は玉縁状に肥厚する。	明褐白色	良	硬	SM04 2層
35	16	124	774	瓦器	椀片	(15.4)	5.2	—	0.7	6.5	内面にはヘラ暗文。外面下半には不定方向のヘラミガキ。	黒灰色～暗灰色	良	良	SM04 2層
35	17	125	775	瓦器	椀	16.6	5.4	—	0.5	6.7	内～外面はヘラミガキ。高台はナデツケ。体部外面下位に指圧痕。底に板目圧痕有。	黒灰色 内：灰色	良	良	SM04 2層
35	17	126	776	瓦器	椀片	16.3	5.5	—	0.5	6.9	内面は横方向のヘラミガキ。外面体部下位はナナメ方向のヘラミガキ。	黒灰～暗灰色	良	軟	SM04 2層
35	17	127	777	瓦器	椀片	17.4	5.8	—	0.4	6.3	内～外面ヘラミガキ。高台はナデツケ。	外：黒褐色～灰色	良	軟	SM04 2層
35	—	128	769	白磁	椀 底部片	—	—	—	2.3	6.5	高台内は円形の焼き台(ハマ)を使用。	素：白色 釉：乳白色半透明	良	良	SM04 2層
35	—	129	770	白磁	椀 口縁部片	16.2	(4.8)	—	—	—	内～外面に施釉。	素：淡灰白色 釉：白濁色不透明	良	良	SM04 2層
35	17	130	780	瓦器	椀片	16.9	5.0	—	0.5	6.7	口縁部内～体部外面はヘラミガキ。高台はナデツケ。	内：黒灰色 外：暗灰～灰色	良	やや良	SM04 2層
35	17	131	781	瓦器	椀片	16.5	5.2	—	0.7	7.3	口縁部内～体部外面はヘラミガキ。高台はナデツケ。体部外面下位～高台に指圧痕。	内：黒灰色 外：灰色	良	やや良	SM04 2層
35	—	132	782	瓦器	椀	16.5	4.7	—	0.5	8.4	やや浅めの椀。体部中央に弱い稜線がめぐる。	黒灰色～灰白色	良	良	SM04 2層
35	17	133	783	瓦器	椀片	16.6	5.3	—	0.4	5.8	内～外面はヘラミガキ。体部外面下位は指圧痕後、不定方向のヘラミガキ。高台内はヘラミガキ。	口縁部：黒灰色	良	良	SM04 2層
35	—	134	785	土師器	椀	16.3	(4.7)	—	—	—	高台剥離。内外面ともに丁寧なヘラミガキ。口縁部は丸くおさまる。	明褐白色	良	良	SM04 2層
35	—	135	786	土師器	椀	17.4	5.0	—	0.8	(7.6)	内外面ともヘラミガキ。体部上位に弱い稜がめぐる。指圧痕が残る。	明～赤褐白色	良	軟	SM04 2層
36	17	136	741	土師器	Ⅲ	9.0	1.2	6.7	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	褐色	細かい	良	SM04 E13
36	17	137	834	瓦器	Ⅲ	10.0	1.6	8.0	—	—	内～外面ヨコナデ。底に指圧痕有。	灰色	細かい	堅緻	SM04 2b層F13
36	—	138	826	土師器	丸底杯片	(13.4)	2.6	(8.5)	—	—	外面ヨコナデ。ヘラ切り底か？	暗褐色	細かい	不良	SM04 2ab層
36	17	139	773	瓦器	椀 口縁部片	15.9	(5.5)	—	0.6	(6.1)	内～外面はナデの後ミガキ。	黒色～暗灰色	良	良	SM04 2層
36	17	140	778	瓦器	椀	15.8	4.9	—	0.5	6.5	外面の口縁～体部は回転ナデ、体部～底部は手持ちヘラミガキ。高台はナデツケ。体部外面下位に指圧痕。	黒灰色 外下半：灰～暗灰色	良	良	SM04 2層
36	—	141	824	瓦器	椀片	(17.6)	5.6	—	0.5	(6.5)	内面～外面はヨコナデ。体部外面に板目痕有。高台は断面三角を呈し、貼付後ヨコナデ。	外：黒灰色 内：灰白色	細かい	堅緻	SM04 2ab層

凡例 { 素は素地(胎土)の略
法量の口径は外径、( )は復元値

Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	高台径	形態・技法上の特徴 成形・製作手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土遺構
36	—	142	825	瓦器	椀片	(17.6)	—	—	—	—	口縁部外面は回転ヘラケズリ。体部外面は手持ちヘラミガキ。高台内はヘラ切り、板目痕有。	灰白色 外:黒灰色～黒色	細かい	堅緻	SM04 2ab層
36	17	143	838	瓦器	椀	16.1	5.3	—	0.9	7.4	外面は手持ち回転ヘラミガキ。高台はナデツケ。内底は横方向のヘラミガキ。	黒灰色～黒銀灰色	良	やや軟	SM04 2層
36	—	144	854	白磁	椀 高台片	—	—	—	1.4	5.5	高台は回転ヘラケズリ。露胎、胎土には細かな黒色斑含む(V類)	白色不透明	良	堅緻	SM04 ベルト2b層F13
36	—	145	739	白磁	椀 高台片	—	—	—	2.0	5.3	内～外面は回転ヘラケズリ。高台は露胎。	灰白色透明	良	堅緻	SM04 E13
36	19	146	829	白磁	椀 高台片	—	—	—	0.6	5.0	内～外面は回転ヘラケズリ。高台は露胎。	素:白色 釉:淡黄白色半透明	やや粗い	堅緻	SM04 2b層
36	19	147	737	白磁	Ⅲ 口縁部片	9.6	2.5	3.4	—	—	体部外面はヨコナデ。底はナデ。	釉:黄味の強い灰白色 半透明	良	やや良	SM04 E13
36	19	148	823	白磁	Ⅲ 口縁部片	(10.2)	2.6	(5.3)	—	—	口縁部内面～体部外面に施釉。	素:灰白色 釉:灰色透明	良	良	SM04 2ab層
36	—	149	817	白磁	椀 高台片	—	—	—	1.7	6.2	体部外面に施釉。	素:灰白色 釉:乳白色不透明	良	良	SM04 2ab層
36	—	150	738	白磁	椀 口縁部片	15.2	(5.2)	—	—	—	口縁部外面はヨコナデ。体部外面は回転ヘラケズリ。口縁部内面～体部外面に施釉。	素:灰白色 釉:乳白色不透明	良	堅緻	SM04 E13
36	17	151	833	白磁	椀	15.2	7.4	—	0.9	7.4	体部外面は回転ヘラケズリ、下位は露胎。	淡黄白色 不透明	良	堅緻	SM04 2b層F13
36	—	152	903	須恵器	壺 口縁部片	18.8	—	—	—	—	頸部に9条の櫛描文。	灰白色	良	堅緻	SM04 2ab層
36	17	155	905	須恵器	円面硯	外径 11.8	海径 8.0	—	—	—	海部には調整痕がそのまま残る。	青灰～灰色	やや粗い	やや軟	SM04 2ab層
37	—	159	767	須恵器	甕 口縁部片	25.2	胴部最大径 38.0	—	—	—	口縁部内～外面はヨコナデ。体部内面はアテ具後ヨコナデ。体部外面は平行タタキをナナメ格子状に施す。	灰色～灰青色	良	やや軟	SM04 2層
37	—	160	842	土師器	Ⅲ	8.9	1.1	7.1	—	—	見込みはヨコナデ。内面～外面はロクロ回転ナデ。回転ヘラ切底。板目圧痕有。	明褐色	良	やや軟	SM04 2層
37	—	161	843	土師器	Ⅲ	9.1	1.1	6.7	—	—	回転ヘラ切り痕か。	明褐色	良	やや軟	SM04 2層
37	—	162	841	瓦器	椀	16.3	5.0	—	0.4	6.2	内外面ヘラミガキ。体部中位は一部ヘラケズリ。一部銀灰色。	黒灰～灰褐色	良	良	SM04 2層
37	—	163	839	瓦器	椀	16.1	4.8	—	0.6	7.2	体部外面は指圧痕の後、ヘラミガキ。高台はナデツケ。内面に重ね焼き痕有。	黒灰～暗灰色	良	良	SM04 2層
37	18	164	837	瓦器	椀	15.4	5.1	—	0.5	6.1	内面～口縁部外面はヘラミガキ。体部外面はナデ後ヘラミガキ。	灰～暗灰色 外,口縁:黒灰色	良	軟	SM04 2層
37	—	165	878	須恵器	杯身	11.2	(4.2)	受部外径 13.8	受部立上り高 0.6	—	内面～体部外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	灰～灰白色	良	やや堅緻	SM05 覆土上層
37	18	166	835	越州窯系青磁	小椀	10.0	4.0	—	0.5	5.2	高台・体部下部露胎。見込内底には押捺印花文。口縁部はやや内湾気味。	黄味の強い淡オリーブ色半透明	細かい	良	SM04 2層
37	18	167	836	白磁	椀	16.3	6.8	—	0.8	7.3	体部外面下位～高台は回転ヘラケズリ。体部外面下位の一部は露胎。畳付部は、なめらかに研磨。	淡黄白色 不透明	良	堅緻	SM04 2層
37	18	168	731	土師器	Ⅲ	9.4	1.6	6.9	—	—	内～外面は回転ナデ。底は回転ヘラ切り後板目圧痕をナデ。	灰～灰褐色	良	軟	SM04 P28
37	—	169	856	土師器	Ⅲ	10.3	(1.4)	(7.7)	—	—	内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	明褐白色	良	良	SM04 粗砂層
37	—	171	848	白磁	椀 底部片	—	—	—	1.2	6.5	見込みは輪状カキトリ。高台は回転ヘラケズリ。高台内はヘラケズリ。体部外面下位は露胎。	素:黄白色 釉:黄灰白色不透明	良	堅緻	SM04 5層
39	—	176	441	土師器	Ⅲ	9.1	1.3	6.8	—	—	内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	明褐白色	良	軟	5区表採
39	—	177	431	龍泉窯系青磁	椀	—	—	—	0.7	4.7	内面に草花文。高台は露胎。やや小振り。	モスグリーン 透明	良	堅緻	表採 (試掘)
39	—	178	436	龍泉窯系青磁	輪花椀	(12.8)	5.2	—	0.7	4.3	見込みに釉ダマリ。畳付は釉をカキトリ。高台内はヘラケズリ。	素:灰白色 釉:モスグリーン	良	堅緻	表採 (試掘)
39	—	179	405	朝鮮陶器	甕 口縁部片	(19.8)	—	—	—	—	内～外面は回転ナデ。	黒灰色 断:青～赤紫色	良	良	6区 表土層
39	—	180	434	新羅陶器	甕片	—	—	—	—	—	内面は平行目アテ。外面は格子目タタキ。外面にタタキ後ナデ仕上げの三角突帯貼付。	青灰～暗灰色 断:暗赤褐色	良	堅緻	表採 (試掘)
39	—	181	403	新羅陶器	甕 底部片	—	—	—	—	—	内面は平行タタキ後軽くナデ。外面はタタキ後横方向のハケ目調整。	青灰～暗褐色	良	堅緻	6区 表土層
41	19	195	446	白磁	輪花椀 底部片	(13.8)	4.6	—	0.9	4.8	体部外面～高台はヘラケズリ。内面に櫛描による草花文。	白色	良	堅緻	包含層 (試掘)
41	—	196	452	土師器	Ⅲ	9.8	1.5	7.8	—	—	内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	暗褐色	良	軟	包含層1区 台地落1層
41	—	197	448	白磁	椀 口縁部片	(15.1)	—	—	—	—	体部外面下位は回転ヘラケズリ。	白色	良	堅緻	包含層 (試掘・南台下)

凡例｛素は素地（胎土）の略
法量の口径は外径、（　）は復元値

Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	高台径	形態・技法上の特徴 成形・製作手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土遺構
41	－	198	449	白磁	椀底部片	－	－	－	1.6	5.7	体部外面下位～高台は回転ヘラケズリ。	素：灰～白色 釉：青緑色透明	良	堅緻	包含層
42	18	200	521	土師器	Ⅲ	9.4	1.6	7.3	－	－	内～外面は回転ナデ。 底は回転ヘラ切り後板目圧痕をナデ。	褐白色	良	軟	包含層4区 台地落
42	－	201	485	土師器	Ⅲ	10.1	1.4	8.8	－	－	口縁部外面は回転ナデ。 底は回転ヘラ切り後板目圧痕。	褐～暗褐色	良	軟	包含層4区 H14トレンチ
42	18	202	536	土師器	Ⅲ	9.6	1.4	6.7	－	－	内底はヨコナデ。口縁部内～外面は回転ナデ。底は回転ヘラ切り後板目圧痕。	明褐白色	良	軟	包含層4区 台地落3層
42	－	203	522	土師器	Ⅲ	9.6	1.7	6.2	－	－	内～外面は回転ナデ。回転糸切り底。	明褐色	良	軟	包含層4区 台地落
42	－	204	532	土師器	杯	(13.1)	3.1	9.2	－	－	内底はヨコナデ。口縁部内～外面は回転ナデ。糸切り底か。				包含層4区 台地落覆土
42	－	205	484	土師器	丸底杯	(16.3)	3.8	－	－	－	内～外面はナデ。内底に指圧痕。 底に板目圧痕。	明褐色	良	軟	包含層4区 H14トレンチ
42	18	206	483	土師器	椀	(14.8)	5.6	－	0.9	6.8	内底はヨコナデ、指圧痕有。 高台は回転ナデ。	明褐色 口縁内面：黒灰色	良	やや硬	包含層4区 H14台下2層
42	－	207	507	瓦器	椀	(16.2)	5.0	－	0.6	7.0	内～外面はやや粗いヘラミガキ。 高台はナデツケ。	黒色	良	やや硬	包含層4区 台地下
42	－	208	467	土師器	丸底杯	(15.6)	3.8	－	－	－	底は回転ヘラ切り後、ナデ。	明褐白色	良	軟	包含層 H13台下2層
42	18	209	478	瓦器	椀底部片	(16.5)	4.6	－	0.5	6.2	内～口縁部外面は横方向のヘラミガキ。 体部外面は手持ちヘラミガキ。高台はヘラミガキ後、ナデ。	灰～黒灰色	良	硬	包含層 H13砂層
42	－	210	465	土師器	椀	(15.4)	5.8	－	0.9	6.7	内底は不定方向のナデ、指圧痕有。 外面は回転ナデ。高台はナデツケ。	明褐白色	良	軟	包含層 H12台下砂層
42	18	211	490	白磁	ミニチュア Ⅲ	3.8	1.6	－	0.5	2.3	体部外面～高台は回転ヘラケズリ。	素：白色 釉：透明	良	堅緻	包含層4区 H15
42	－	212	502	高麗青磁	椀底部片	－	－	－	0.6	4.8	高台内に部分的に釉がかかる。	素：灰色 釉：半透明	良	堅緻	包含層4区 台黒
42	－	213	503	白磁	蓋または瓶	蓋外径5.7 瓶口径2.4	推定高台 4.2	つまみ推定径 1.4	－	－	つまみは宝珠形か。	素：白色 釉：半透明	良	堅緻	包含層4区 台地下
42	20	214	628	越州窯系青磁	椀底部片	－	－	－	0.45	6.1	見込みに目痕。 高台は回転ヘラケズリ。	釉が剥楽	良	堅緻	包含層4区 3層酸鉄混
42	20	215	528	灰釉陶器	椀底部片	－	－	7.0	－	－	内外面に薄いオリーブ色の釉を施釉。 胎土は須恵質で灰色。	素：灰色 釉：透明	良	良	包含層4区 台地落覆土
42	－	216	501	越州窯系青磁	椀底部片	－	－	－	1.1	7.0	高台内に目痕。内～外面ともに施釉。	素：灰紫～灰色 釉：モスグリーン	良	良	包含層4区 台黒
42	－	217	464	白磁	Ⅲ 口縁部片	9.4	－	－	－	－	内面から口縁部外面に施釉。 口縁部は玉縁状に肥厚する。	スリガラス状半透明	良	堅緻	包含層 H12台下砂層
42	19	218	524	白磁	椀口縁部片	－	－	－	－	－	外面にヘラ片彫による花文。	釉：透明 部分的に青白色	良	堅緻	包含層4区 台地落覆土
42	－	219	515	越州窯系青磁	椀底部片	－	－	(10.2)	－	－	体部外面下位に水びき痕。 見込みに目痕。	素：灰色 釉：オリーブ色	良	堅緻	包含層4区 台地落
42	－	220	477	白磁	椀	(15.7)	6.5	－	0.8	5.5	内面に6本の白堆線。体部外面中～下位は回転ヘラケズリ、下位は露胎。	素：白色 釉：黄褐色不透明	良	堅緻	包含層 H13砂層
43	－	226	481	白磁	Ⅲ 底部片	－	－	3.5	－	－	体部外面下位～底部はヘラケズリ、露胎。	素：明灰白～明白色 釉：青緑灰色	良	堅緻	包含層4区 H14台下2層
43	－	227	499	土師器	Ⅲ	(9.1)	1.9	5.9	－	－	内～外面はナデ。回転糸切り底。	明褐白色	良	軟	包含層4区 台地下4層
43	－	228	494	土師器	Ⅲ	10.7	1.5	8.4	－	－	内～外面は回転ナデ。 底はヘラ切り後板目圧痕。	明灰褐白色	良	軟	包含層4区 北隅セクションS1
43	－	229	460	白磁	椀口縁部片	(16.4)	－	－	－	－	体部下半は露胎。ヘラケズリ。 内面上位に界線をめぐらす。	素：白色 釉：灰白色	良	堅緻	包含層 H12台下2層
43	－	230	456	白磁	椀底部片	－	－	－	0.75	7.0	体部外面下位～底部は回転ヘラケズリ。	素：灰白～白色 釉：うすい灰緑色	良	堅緻	包含層4区 北隅セクションP2
43	－	231	489	白磁	椀底部片	－	－	－	0.8	6.3	体部外面下位～底部は回転ヘラケズリ。	灰白色透明	良	堅緻	包含層4区 H14　3層
43	－	232	475	土師器	丸底杯	(15.8)	3.3	－	－	－	内底は指圧痕をヨコナデ。口縁部内～外面は回転ヨコナデ。底は回転ヘラ調整後板目圧痕。	明褐白色	良	軟	包含層 H13　4層
43	－	233	474	土師器	丸底杯	(15.6)	4.2	－	－	－	内底は指圧痕をヨコナデ。口縁部内～外面は回転ヨコナデ。底は回転ヘラ調整後板目圧痕。	暗～黒褐色	良	軟	包含層 H13　4層
43	－	234	492	土師器	丸底杯片	(16.1)	4.0	13.2	－	－	内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	灰褐白色	良	軟	包含層4区 H15
43	－	235	497	黒色土器	椀口縁部片	(16.5)	体部高 4.7	－	－	－	内～外面はナデ。 体部外面中位に指圧痕。	黒灰色	良	軟	包含層4区 台地下3層
43	19	236	466	土師器	椀	(14.4)	5.4	－	1.5	6.8	内底は不整方向のヘラミガキ。体部内面は横方向のヘラミガキ。口縁部内面～体部外面はナデ。高台・高台内は回転ナデ。体部外面下位に指圧痕。	明黄褐色	良	やや硬	包含層 H13台下2層

凡例 { 素は素地(胎土)の略
法量の口径は外径、( )は復元値

Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	高台径	形態・技法上の特徴 成形・製作手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土遺構
43	—	237	482	瓦器	椀 口縁部片	(16.6)	5.9	—	—	—	内～外面はヘラミガキ（体部外面下位は横方向)。内底に指圧痕。	灰～黒灰色	良	硬	包含層4区 H14台下2層
43	19	238	457	東播系 須恵質土器	こね鉢	(21.9)	8.3	9.9	—	—	内底は不定方向のナデ。体部外面下位は回転ナデ。	青みがかった灰色 口縁外面：黒灰色	良	軟	包含層4区 3層
43	—	239	488	土師質土器	甕	31.8	24.8	—	—	—	口縁部内・外面はヨコナデ。内面はヨコハケ。外面はタテハケ。体部外面の中位はタテ～ナナメハケ。	外上半：黒褐色 内：暗褐色	粗い	軟	包含層4区 H14 3層
43	20	240	470	越州窯系青磁	椀 底部片	—	—	—	0.6	6.8	畳付に目痕。2次的な火を受けて釉薬剥落。	素：灰～茶灰色 釉：剥落	良	堅緻	包含層 H13 4層
43	—	241	469	越州窯系青磁	輪花椀 口縁部片	—	—	—	—	—	口縁端部にヘラによる切りこみ、五輪花か。	素：灰色 釉：青緑色	良	堅緻	包含層 H13台下4層
43	19	242	468	青白磁	有蓋合子か	—	—	—	—	—	青緑色を帯びた透明釉を全面施釉。身と蓋が融着。毛彫文様有り。	釉：青緑色 透明	良	堅緻	包含層 H13台下4層
43	19	243	455	白磁	椀 口縁部片	17.8	—	—	—	—	内面に1条の圏線。外面は回転ヘラケズリ、沈線による花文。	素：白色 釉：透明	良	堅緻	包含層4区 北隅セクションP1
43	—	244	476	新羅陶器	瓶または壺底破片	—	—	(17.0)	—	—	内外面ナデ仕上げ。胎土には白色細砂を含む。	暗灰～黒灰色 断：灰色	不良	軟	包含層 H13 4層
43	—	245	504	白磁	椀	(15.2)	7.2	—	1.6	6.6	内面に1条の圏線。体部外面下位～高台内は回転ヘラケズリ。	素：灰白～白色 釉：灰白色	良	堅緻	包含層4区 台地下
43	—	246	505	白磁	椀 底部片	(15.5)	6.1	—	1.2	6.2	内底は輪状カキトリ。体部外面中位～高台は回転ヘラケズリ。	素：灰白色 釉：モスグリーン	良	堅緻	包含層4区 台地下
44	19	247	539	土師器	皿	10.1	1.3	8.2	—	—	内底はヨコナデ。口縁部内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	灰褐白色	良	軟	包含層5区C-19 黒色土上面
44	19	248	540	土師器	杯	11.3	3.5	7.5	—	—	内底はヨコナデ。口縁部内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	明褐色	良	やや硬	包含層5区C-20 暗灰褐色土砂質層
44	19	249	562	土師器	脚付皿	11.8	2.6	—	脚高 1.3	脚径 8.8	内～外面は回転ナデ。高台はナデツケ。	明褐色	良	軟	包含層 5区
44	20	250	558	越州窯系青磁	椀 底部片	—	—	—	0.5	6.5	高台脇は回転ヘラケズリ。高台畳付周縁に目痕。	素：灰白色 釉：不透明	良	堅緻	包含層 5区
44	—	251	629	越州窯系青磁	椀 底部片	—	—	—	1.0	6.9	見込みに目痕。高台は回転ヘラケズリ。	素：灰色 釉：剥落	良	堅緻	包含層 5区
44	—	252	557	龍泉窯系青磁	椀 底部片	—	—	—	0.8	7.0	見込みに草花文。体部外面下位は回転ヘラケズリ。	素：灰色 釉：緑灰色不透明	良	良	包含層 5区
44	20	253	581	越州窯系青磁	椀 底部片	—	—	5.0	底部高台高 0.5	—	高台はナデ。見込みは施釉。体部外面下位～高台は露胎。	素：灰色 釉：灰緑色不透明	良	堅緻	包含層2次 D-11
44	20	254	538	越州窯系青磁	椀 底部片	—	—	—	0.8	8.0	見込みと高台畳付に目痕。	素：灰色 釉：灰緑色	良	堅緻	包含層5区 台下黒色土層上面
44	—	255	561	龍泉窯系青磁	椀 底部片	—	—	—	0.8	6.2	高台畳付は、鉄銹を施す。	青緑色 半透明	良	堅緻	包含層 5区
44	—	256	556	龍泉窯系青磁	椀 口縁部片	15.1	—	—	—	—	外面には蓮弁文。鎬はなく平坦である。	素：灰白色 釉：緑灰色	良	堅緻	包含層5区 台下包含層
44	—	257	553	白磁	椀 口縁部片	12.8	—	—	—	—	口縁端部は内外面とも施釉後掻き取っている。	白色	良	堅緻	包含層5区 台下包含層
44	—	258 259	554	越州窯系青磁	水注肩部及び把手部分	—	—	—	—	—	内面は露胎。肩～胴部に沈線を入れる。胴部はやや張りのある球形。	素：灰色 釉：灰緑色不透明	良	堅緻	包含層5区 台下包含層
44	20	260	555	国産釉陶器	水注または壺胴部片	—	—	—	—	—	内～外面は回転ロクロ仕上げ。	素：灰紫色 釉：黒褐色の鉄釉	良	堅緻	包含層5区 台下包含層
44	—	263	635	越州窯系青磁	椀 底部片	—	—	—	0.5	6.6	高台畳付に目痕。	素：灰白色 釉：灰緑褐色	良	堅緻	Bトレンチ
44	—	264	634	白磁	椀 底部片	—	—	—	0.8	5.9	高台脇は回転ヘラケズリ。高台はケズリ出し。	素：灰白色 釉：黄灰褐～灰色褐色	良	堅緻	Bトレンチ
44	19	265	641	土師器	丸底杯	15.8	4.3	—	—	—	体部内～外面は回転ナデ。回転ヘラ切り底。	明褐白色	良	軟	Eトレンチ
44	—	266	642	土師器 (内黒)	高台付椀	口縁部径 25.6	6.0	—	1.4	7.0	高台はナデツケ。	内：黒灰色 外：明褐色	良	軟	Eトレンチ
44	20	267	637	越州窯系青磁	椀 底部片	—	—	—	0.5	8.2	見込み・高台畳付に目痕。体部外面下位～高台は回転ヘラケズリ。	釉：緑灰色 透明	良	堅緻	Eトレンチ

Tab, 4　橋本榎田遺跡出土石器・石製品所見一覧表

凡例：法量の（　）は復元値

Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種類	素材	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	形態・製作上の特徴	出土遺構
30	−	2	647	鏃	黒曜石	2.5	1.8	3.5	1.2	良質の漆黒黒曜石を素材とする。表裏面から丁寧な二次調整。抉りは浅い。	SB03
30	−	10	656	管状土垂	泥質粘土	4.0	直径 0.9	孔径 0.3mm	4.0	両端は平坦に調整。全面ナデ仕上げ。	SD01
31	14	18	668	ナイフ形石器	黒曜石	2.5	1.1	3.5	1.0	表面はわずかに風化。縦長剥片を素材。側縁を最終剥離面から刃潰ししている。	SM03 上層
31	14	19	669	鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.35	0.6	黒灰色のやや質の悪い黒曜石を素材とする。右側返り欠損。二次調整はやや雑。	SM03 上層
31	14	20	670	鏃	黒曜石	2.1	1.6	0.4	1.0	黒色半透明の黒曜石を素材とする。先端部欠損。	SM03 上層
31	14	21	671	鏃	頁岩	2.3	1.5	0.35	0.7	二次調整はばらつきがあ。基部抉りはやや深い。表面は風化し灰色を呈す。	SM03 上層
31	14	22	688	鏃	黒曜石	2.7	1.7	0.55	1.6	漆黒色の黒曜石を素材とする。断面は三角形でやや厚手である。	SM03 D 8
31	14	23	693	鏃	頁岩	2.1	0.8	0.35	0.6	二次調整は丁寧。鏑は明瞭。基部抉りは三角形で深い。右側返りが欠損。	SM03 F12
31	14	24	712	鏃	頁岩	3.7	1.5	0.7	6.0	二次調整は両面から交互に施す。基部は薄く仕上げている。先端部は欠損。風化し灰色。	SM03 床面
31	14	25	694	鏃	頁岩	2.0	1.8	0.45	1.6	左側縁は細かな二次調整。基部は薄く仕上げている。風化し灰褐色。	SM03 F12
31	14	26	698	鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.0	良質の漆黒色黒曜石を素材とする。先端、右返りが欠損している。抉りは丸く深い。	SM03 覆土下層
31	14	27	711	鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	1.2	良質の漆黒色黒曜石を素材とする。先端は丸く仕上げ、弱い返りが基部に付く。	SM03 床面
31	14	28	667	鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.7	良質の漆黒色半透明黒曜石を素材とする。薄手で、五角形に仕上げている。	SM03 覆土上層
31	14	29	699	鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.35	0.7	良質の漆黒色黒曜石を素材とする。左側縁の二次調整20・25同様は細かい。	SM03 覆土下層
31	14	30	700	鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.4	良質の黒色黒曜石を素材とする。左右側縁から鏑を明瞭に作り出している。抉りは浅い。	SM03 覆土下層
31	14	31	674	鏃	頁岩	1.6	1.3	0.35	0.4	縁辺から粗い二次調整を施す。基部抉りは丸くやや深め。	SM03 C-6区下層
31	14	32	710	鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.15	0.4	良質の黒灰色半透明。薄手に仕上げている。返りはい。先端部は欠損している。	SM03 床面
31	14	33	708	鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.25	0.6	良質の黒灰色。薄手である。右側縁の二次調整は細かい。基部は薄く抉りは浅い。	SM03 床面
31	14	34	676	鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.35	0.8	二次調整はやや粗い。基部は両面から丁寧に丸く抉りを入れる。先端欠損。五角形。	SM03 C-6区下層
31	14	35	675	鏃	頁岩	2.5	1.5	0.38	1.1	やや長めの五角形。基部は両面から薄く仕上げる。風化し灰褐色。先端は欠損。	SM03 C-6区下層
31	14	36	697	鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.45	0.8	両側縁はわずかに内湾気味。基部は両面から丸く抉りをいれ薄く仕上げている。	SM03 E9～10下層
31	14	37	702	鏃	黒曜石	2.1	1.4	5.0	1.2	両側縁はわずかに外湾し、基部は両面から薄く直線的に仕上げている。やや厚手。	SM03 D7下層
31	14	38	703	鏃	黒曜石	2.2	1.9	0.4	1.1	良質の漆黒色黒曜石を素材とする。鏑は明瞭。抉りは両面から丸く入れている。	SM03 下層
31	14	39	701	鏃	黒曜石	2.15	1.5	0.35	1.1	先端はつまみ出したように尖る。両側縁は外湾し、基部は両側縁から直線的に仕上げる。	SM03 E10下層
31	14	40	677	鏃	黒曜石	2.7	0.9	0.3	1.0	やや長めの五角形。表裏の鏑は明瞭。基部の抉りは浅く、直線的。精良薄手である。	SM03 C-6区下層
31	14	41	704	鏃	頁岩	2.4	1.5	0.3	1.1	先端欠損。長めの五角形。抉りは浅い。二次調整はやや粗く、鏑は不明瞭。	SM03 下層
31	14	42	707	鏃	黒曜石	3.0	2.2	0.4	1.8	先端・返りが欠損。鏑は明瞭で二次調整は丁寧。大きさに比して薄手。抉りは直線的。	SM03 最下層
31	14	43	709	鏃	黒曜石	2.4	1.8	0.45	1.7	返りは欠損。二次調整はやや粗く、鏑は不明瞭。素材はやや不純物が目立つ。	SM03 床面
31	14	44	706	錐	黒曜石	3.2	1.5	0.5	2.1	素材は縦長の剥片。先端部は両面からの細かな二次調整により鋭く尖る。他は未調整。	SM03 最下層
31	14	45	687	磨製石鏃	頁岩	3.9	1.5	0.7	5.2	先端・基部は欠損。刃部に対し斜めから研ぎだし、断面菱形に仕上げている。	SM03 D7最下層
31	14	46	690	磨製石鏃	頁岩	5.2	1.5	0.65	5.9	先端・基部は欠損。刃部に平行・斜めから研ぎだし断面菱形に仕上げている。	SM03 1ベルト
31	14	47	691	石鑿	頁岩	4.7	1.6	0.8	−	風化し灰白色。基部は欠損。刃部は直線的に研ぎ出している。	SM03 F11
31	14	48	695	管状土錘	−	6.0	直径 1.7	孔径 0.4mm	15.0	捻りながら成形し、ナデ仕上げ。両端は細く仕上げる。焼成良好。明褐色。	SM03 F12

凡例：法量の（　）は復元値

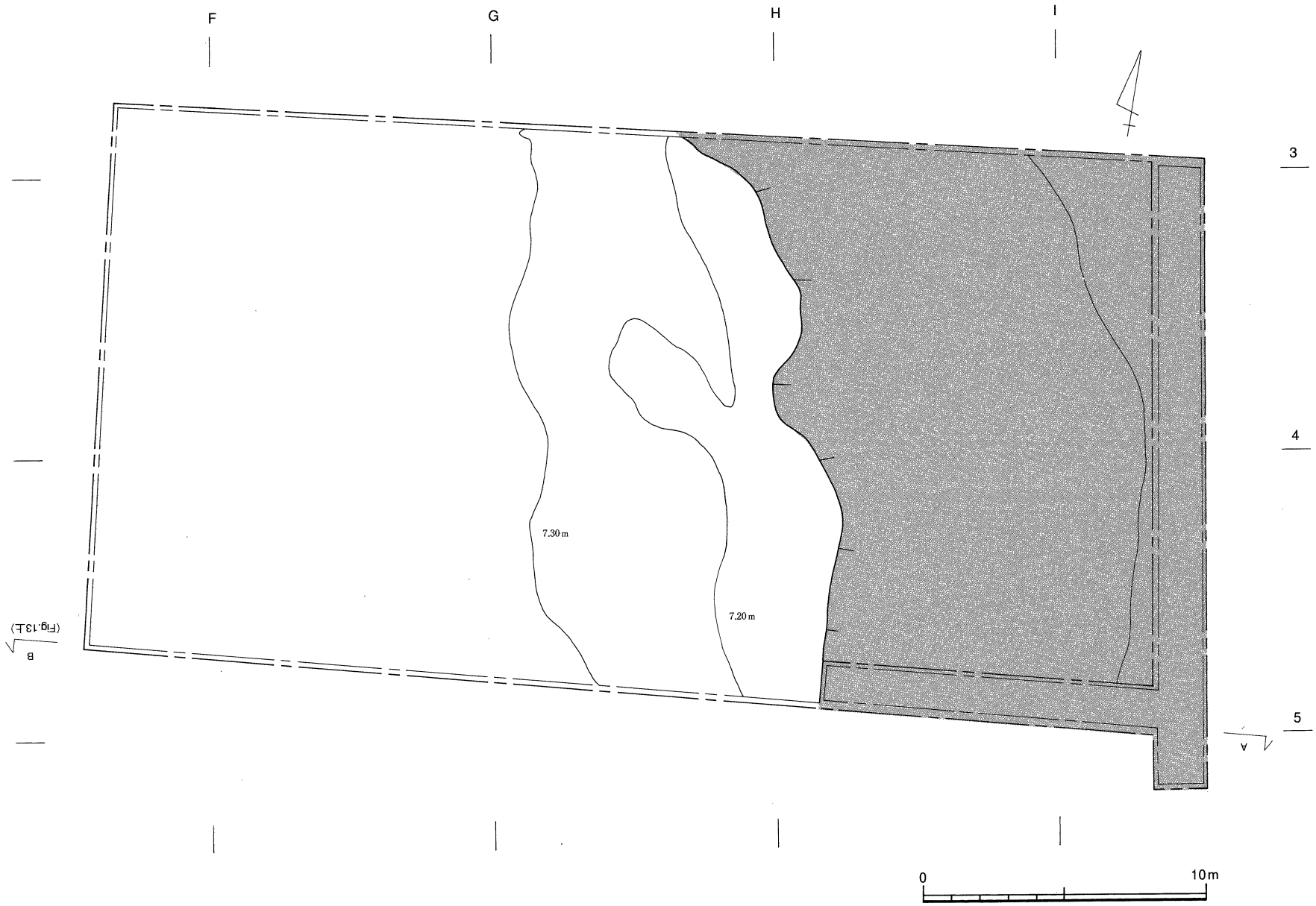
Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種類	素材	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態・製作上の特徴	出土遺構
31	15	49	899	石斧	玄武岩	10.0	基部幅3.6 6.6	4.5	—	刃部欠損。基部端は直線的。二次剥離・敲打痕を留めている。灰白色。磨耗している。	SM03 最下層
31	15	50	895	石斧	玄武岩	11.1	刃部幅 6.0	(3.5)	—	基部欠損。二次剥離・敲打痕を留めている。刃部は折損後叩き潰れている。灰白色。	SM03 F10　3層
32	15	51	680	石包丁	頁岩	9.0	5.2	0.4	—	敲打段階の未完成品。孔を両面から穿けている。刃部は部分的細かな二次剥離を施す。	SM03 C-6区下層
32	15	52	898	石包丁	頁岩	6.7	12.6	1.1	—	二次剥離調整段階の未完成品。刃部調整を終え背部の打撃により節理面から破損したもの	SM03 C6下層
32	15	53	896	石斧	玄武岩	13.7	8.4	(3.6)	—	刃部破損。刃部は折損後叩き潰れている。断面は扁平。灰白色。全体に磨耗している。	SM03 C6上層
32	15	54	679	斧	玄武岩	14.5	6.5	2.9	—	基部が柱状片刃石斧様の扁平な自然礫を素材とし、刃部を二次剥離により作り出している	SM03 C-6区下層
32	15	55	678	斧	玄武岩	9.0	8.8	3.3	—	基部欠損。断面形は扁平な楕円形。刃部は敲打使用により丸く潰れている。灰白色。	SM03 C-6区下層
32	—	56	714	磨石	花崗岩	9.5	8.1	5.2	—	扁平な円礫の縁周、上下面に敲打または打撃使用痕が残る。	SM03
36	20	153	812	紡錘車	滑石	直径3.7 孔径1.5	—	1.5	16.5 (24.7)	良質な灰色滑石を素材とする。全面丁寧な磨研仕上げ。側面には界線（段）を有す。	SM04 2層
36	—	154	855	石鍋片 耳部	滑石	(23.8)	耳部幅 3.1	—	—	良質な灰色滑石を素材とする。耳に向かって器面を削り込んでいる。	SM04ベルト 2b層F13
37	20	156	847	紡錘車	滑石	直径3.7 孔径1.7	—	1.7	33.5	良質な灰色滑石を素材とする。上面は稜が不明瞭でやや丸みがある。	SM04 3層
37	—	157	811	蓋	滑石	11.6	—	2.0	—	石鍋破片の転用。周縁を丸く削りその後滑らかに仕上げている。半損品で本来は円形か。	SM04 2層
37	19	158	765	石鍋蓋	滑石	9.7 孔径0.8	11.3	3.4	316.5	石鍋耳部の転用。周縁・裏面は角を削り落とし滑らかに仕上げている。中央で折損。	SM04 1層
37	—	170	862	土錘	—	(4.5)	—	直径1.1 孔径2.0	6.0	下端が欠損している。捻りながら成形しナデ仕上げている。焼成良好。褐色。	SM04 最下層
41	18	182	401	石核	黒曜石	2.7	3.1	2.5	—	素材は良質の小円礫。打撃面を作り剥片を剥ぎ取り、その面をまた打撃面として剥出。	表土層
41	18	183	402	石核	黒曜石	2.2	2.5	1.4	—	円礫自然面を打撃面として周縁から打撃し剥片を得る。結果的に円錐状になっている。	表土層
41	18	184	408	石核	黒曜石	2.3	4.6	2.2	—	素材はやや大きい角礫。打撃面を作り剥片を剥ぎ取り、その面をまた打撃面として剥出。	4区 表土層
41	18	185	410	鏃	黒曜石	3.3	(2.1)	0.3	1.9	やや大形の五角形。大きさの割りに薄手。基部は三角に抉る。返りは一部欠損。	表採
41	18	186	411	鏃	黒曜石	2.9	1.8	0.5	2.0	丁寧な二次調整で表裏の鎬はやや明瞭。基部は直線的に薄く仕上げる。	表採
41	18	187	412	鏃	黒曜石	2.1	1.8	0.35	1.0	返りが外に強く開く、五角形。抉りは浅い。二次調整はやや粗く、鎬は不明瞭。薄手。	表採
41	18	188	413	鏃	頁岩	2.1	1.2	0.3	0.5	先端・返りが欠損。鎬は明瞭で二次調整は丁寧。抉りは直線的に深く入れる。	表採
41	18	189	415	縦長剥片	黒曜石	3.85	1.9	0.4	—	素材は良質の半透明黒色縦長剥片。左側縁に細かな刃潰れあり。縄文時代後期の所産か。	表採
41	18	190	443	鏃	頁岩	2.8	1.6	0.3	1.2	素材は縦長の剥片。先端部は両面からの細かな二次調整により鋭く尖る。他は未調整。	表採 D7区
41	18	191	429	偏平片刃 石斧	頁岩	5.5	3.9	1.5	48.5	通常より全体的に丸みがある。刃部は研ぎなおしにより両端が磨耗し丸い。灰白色。	表採
41	18	192	409	石斧	玄武岩	6.8	刃縁幅 7.2	4.0	—	刃部破片。かなり大振りである。断面は扁平刃部は敲打使用により潰れ平坦になっている	4区 表土層
41	—	193	447	鏃	黒曜石	1.5	1.7	0.3	0.5	基部が幅広の三角形。二次調整はやや粗く、鎬は不明瞭。基部は直線的。	包含層
41	—	194	630	鏃	頁岩	2.6	1.4	0.4	1.3	両側縁がわずかに外湾している。二次調整は端正で、鎬が明確である。基部は直線的。	包含層 IZ2
41	19	199	453	石鍋 口縁片	滑石	—	—	—	—	腰の深い鉢の可能性がある。表面には炭化物が付着している。素材は良質の灰色滑石。	包含層1区 台地落1層
42	19	221	479	栓	滑石	口径 (11.0)	器高 3.1	—	—	宝珠様のつまみが付くと思われる。素材は良質の灰色滑石。石鍋片の転用か。	包含層 H13砂層
42	20	222	480	蓋か	滑石	口径 4.6	器高 2.5	底高 4.8	—	素材は良質の灰色滑石。石鍋片の転用か。蓋もしくは合子様の身とも思われる。	包含層 H13青灰微砂
42	19	223	509	石鍋片	滑石	口径 35.5	—	—	—	口縁部は強く内傾している。鍔下部には炭物が付着している。素材は良質の黒灰色滑石	包含層4区 台地下
42	18	224	495	石錘	片岩	9.2	8.2	1.6	160.0	扁平な円礫の周囲を二次調整し、紐を受けるため上下1対の浅い凹を作っている。	包含層4区 北隅セクション
42	18	225	897	石包丁	頁岩	8.1	7.9	0.6	—	穿孔段階の未完成品。穿孔している際に節理に沿って割れたもの。	E10 溝落覆土上層

凡例：法量の（　）は復元値

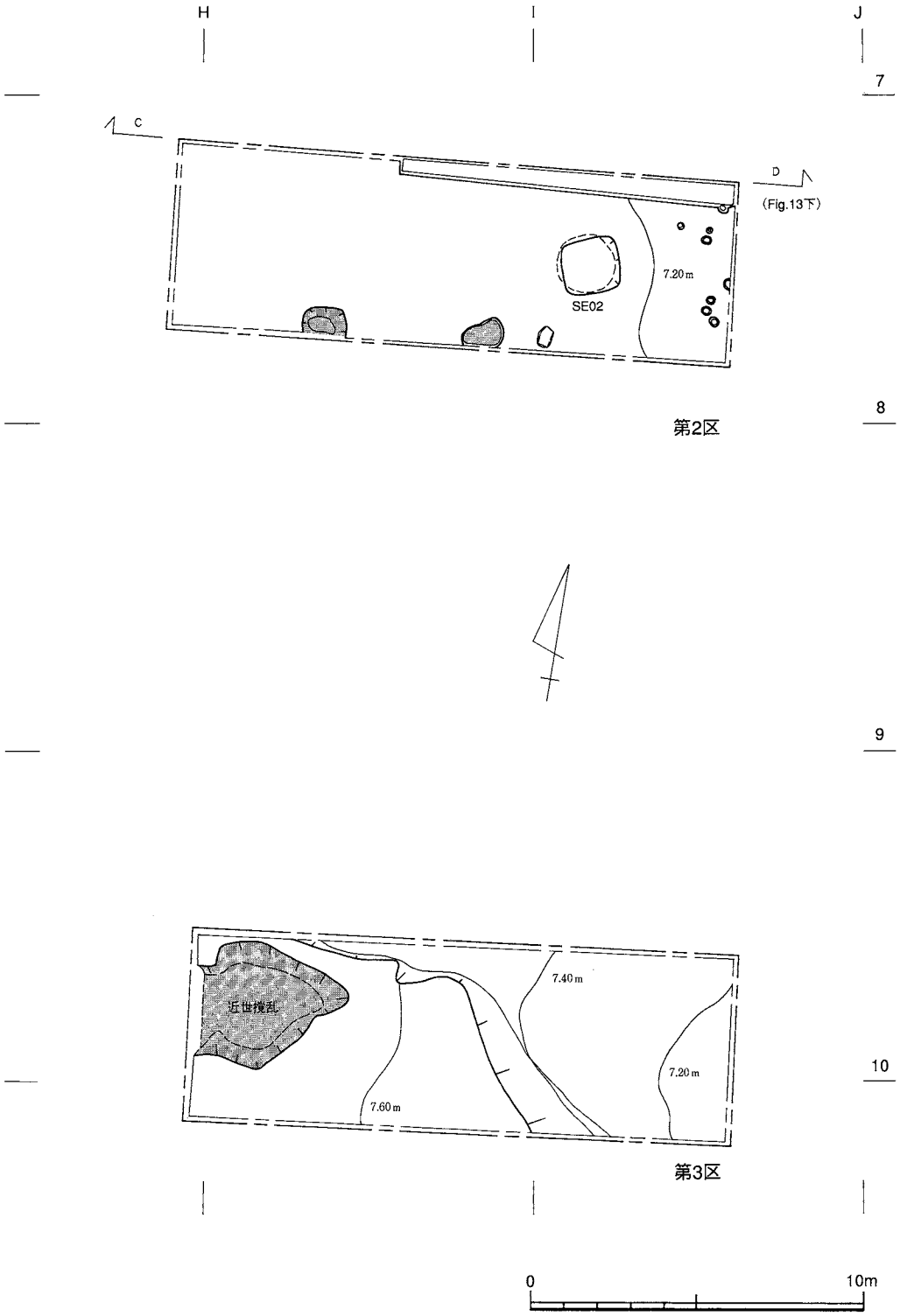
Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種　類	素　材	法　量				形　態・製作上の特徴	出土遺構
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
44	−	261	541	瓶の栓	滑石	4.3	直径 3.8	身直径 2.1	−	素材はやや良質な灰色滑石。下端は末広がりである。	包含層５区 C-20黒粘土
44	19	262	463	石鍋片	滑石	−	−	−	−	耳部の破片。やや質の悪い灰色滑石。表面は磨耗している。	包含層 H12台下3層
44	19	268	643	石鍋片 口縁耳部	滑石	5.0	耳幅(基部) 2.5	3.5	−	素材は良質の灰白色滑石。大型の鍋の耳部である。耳に向かって削り込んでいる。	Ｅトレンチ
44	20	269	636	石鍋片 用途不明	滑石	7.1	3.4	2.1	−	石鍋破片に両面から穿孔したもの。不整な円形。孔は紐等を通すものか。	Ｄトレンチ
44	−	270	625	石槍残欠	サヌカイト製	8.1 (9.8)	1.3	−	54.0	良質のサヌカイト（輝石安山岩）。両面から二次調背が施されている。明灰白色。	包含層２次
44	−	271	566	鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.5	1.3	良質の半透明黒色の黒曜石を使用している。鏑は明瞭。基部は下へややはみ出している	包含層 ５区
44	−	272	602	鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.6	先端部は欠損。両側縁からの二次調整はやや端正。基部は薄く平坦に仕上げている。	包含層 F-10下層
44	−	273	603	鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.9	先端と返りの一部が欠損している。鏑は明瞭基部は浅く、また薄く仕上げている。を	包含層 F-10下層
44	−	274	611	鏃	黒曜石	1.3	1.9	0.25	1.0	端正な三角形。薄手である。両側縁から細かな二次調整を加える。鏑は不明瞭。	包含層

Tab, 5　橋本榎田遺跡出土その他所見一覧表

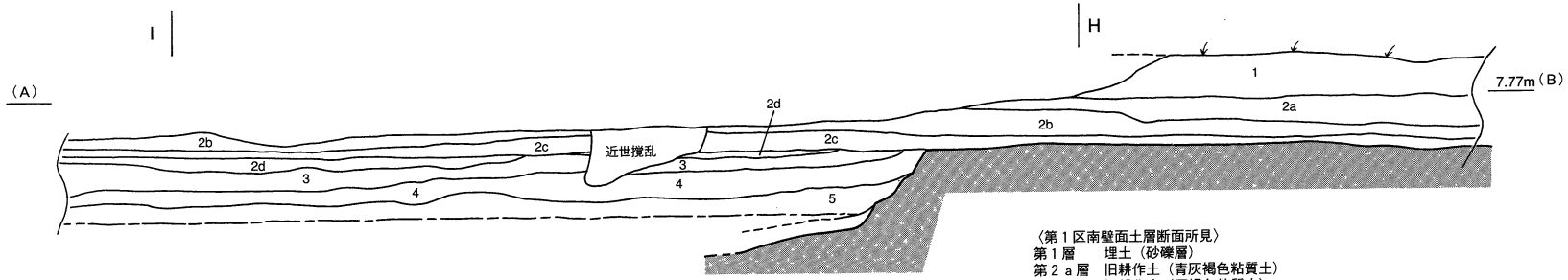
Fig	PL	掲載遺物番号	遺物登録番号	種　類	素　材	法　量				形　態・製作上の特徴	出土遺構
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
30	14	14	660	獣骨	−	19.8	最大径 4.5	−	−	ＳＥ02井筒内で出土。関節間の中央部に穿孔したもの。孔の直径は0.4～5㎜。馬骨か	SE02 底部



Fig,11　第１区遺構平面図（1/200）

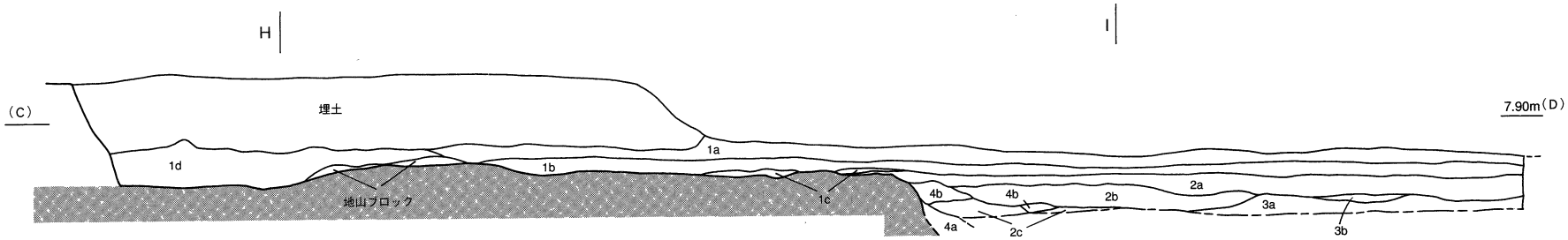


Fig,12　第２区・第３区遺構平面図（1/200）



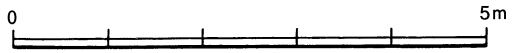
〈第1区南壁面土層断面図〉

〈第１区南壁面土層断面所見〉
第１層　埋土（砂礫層）
第２ａ層　旧耕作土（青灰褐色粘質土）
第２ｂ層　旧耕作土（灰褐色粘質土）
第２ｃ層　旧耕作土（暗灰褐色粘質土）
第２ｄ層　旧耕作土（暗褐色粘質土）
第３層　灰褐色粘土層（微砂、よくしまり硬質）
第４層　灰褐色粘質土層（細砂が混じり、軟質）
第５層　暗灰褐色粘土層（微砂が混じり、水分多く軟質）

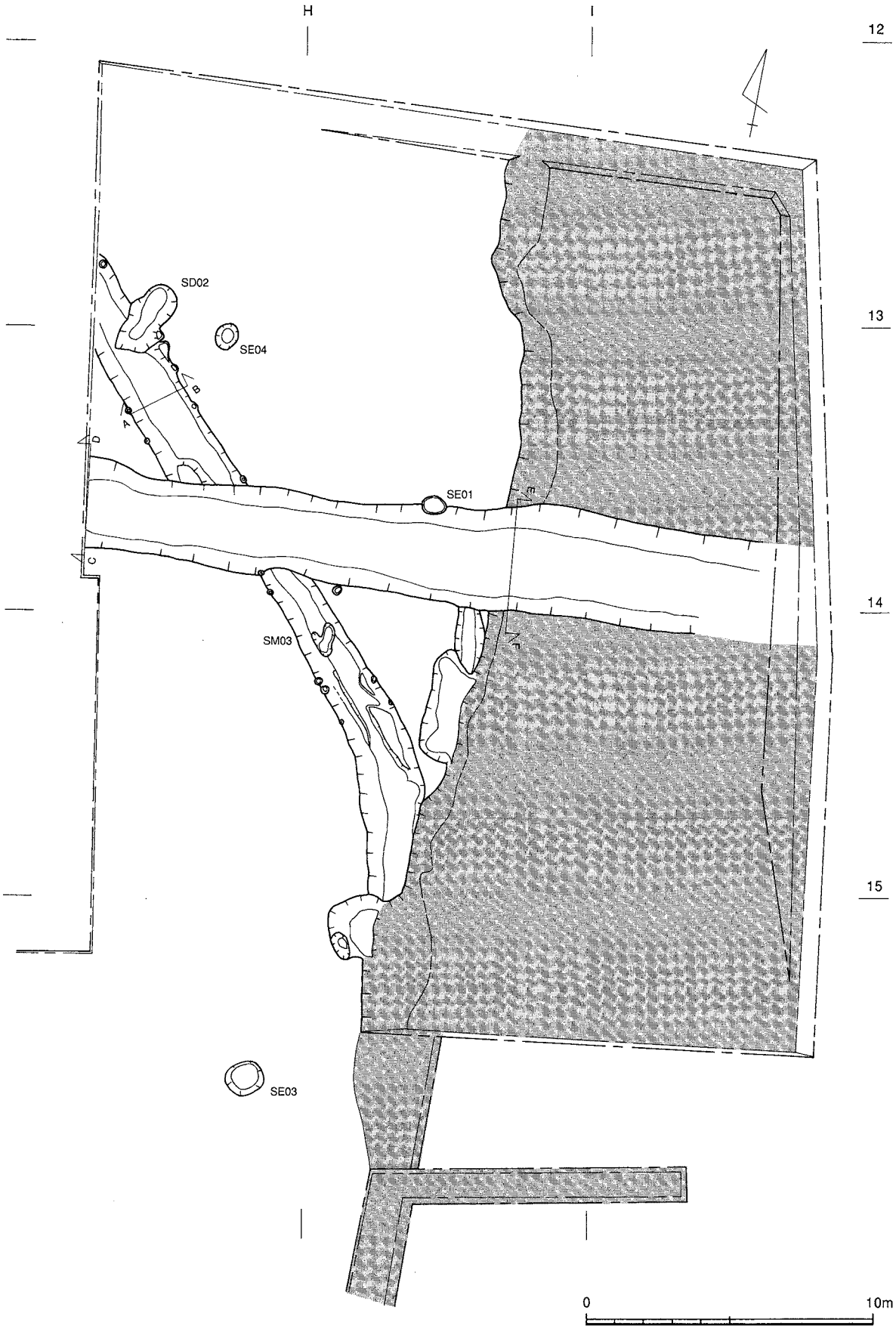


〈第2区北壁面土層断面図〉

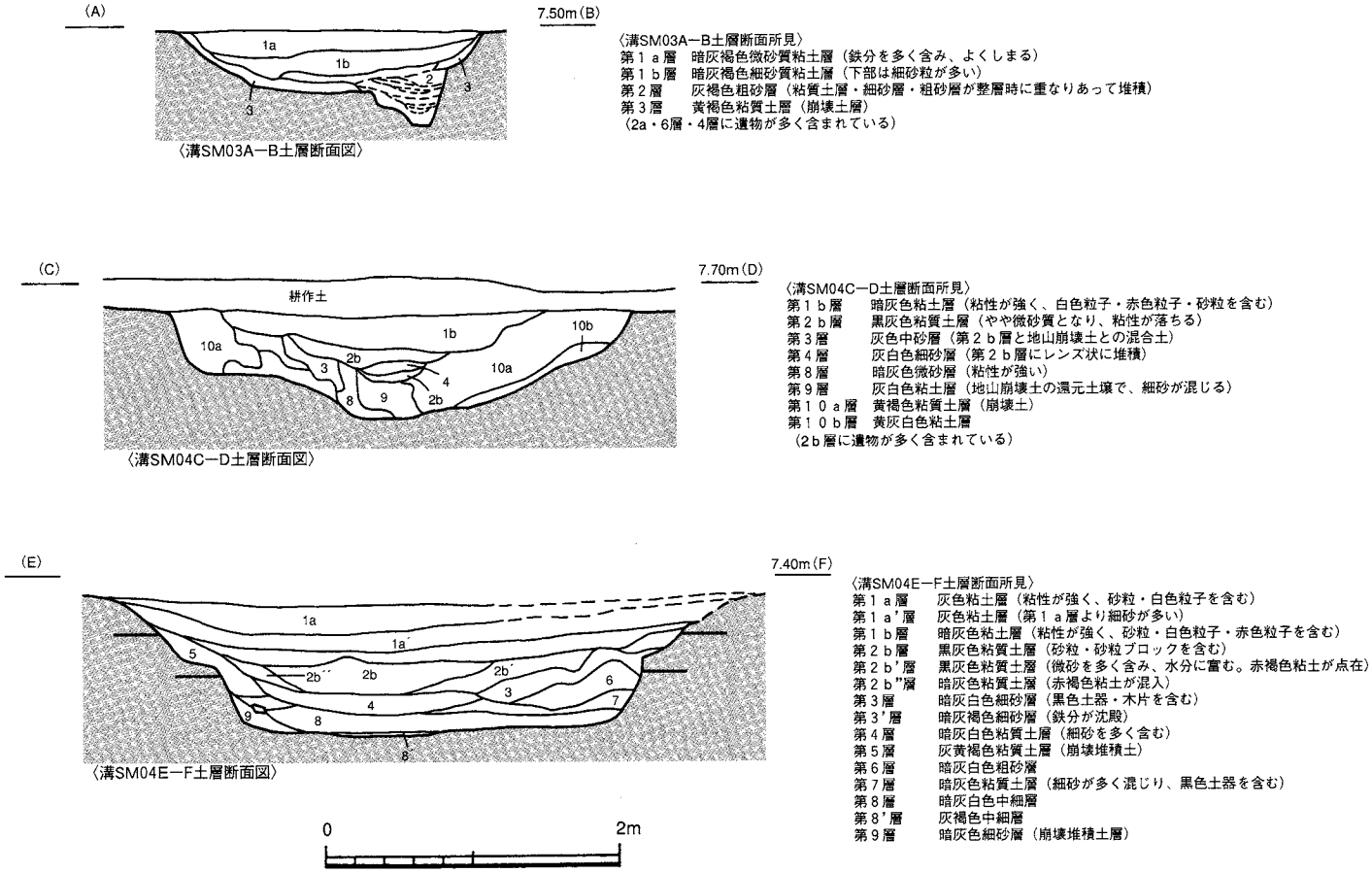
〈第２区北壁面土層断面所見〉
第１ａ層　灰褐色粘質土層（耕作土）
第１ｂ層　黄灰褐色粘質土層（床土）
第１ｃ層　黄色粘質土層（床土下）
第１ｄ層　暗灰地山ブロック混粘質土層（近世撹乱土）
第２ａ層　褐色粘質土層
第２ｂ層　褐色粘質土層
第２ｃ層　暗褐色粘質土層
第３ａ層　灰褐色粘質土層
第３ｂ層　第２ｂ層に近い
第４ａ層　灰白色粘質土層（地山）
第４ｂ層　ブロック状に入る



Fig,13　第１区・第２区土層断面図（1/80）



Fig,14　第４区遺構平面図（1/200）

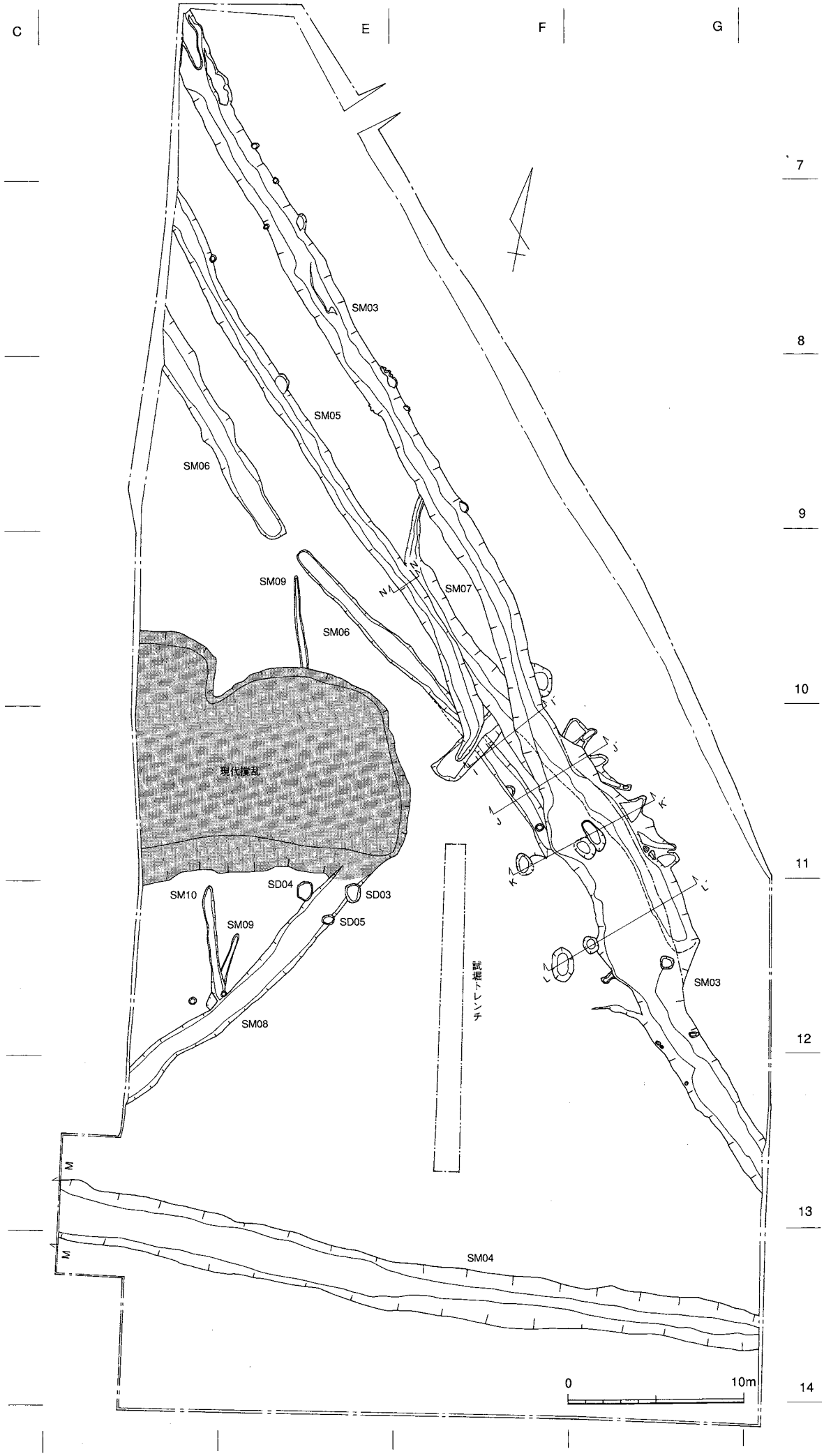


Fig,15　第４区溝SM03・04 土層断面図（1/50）

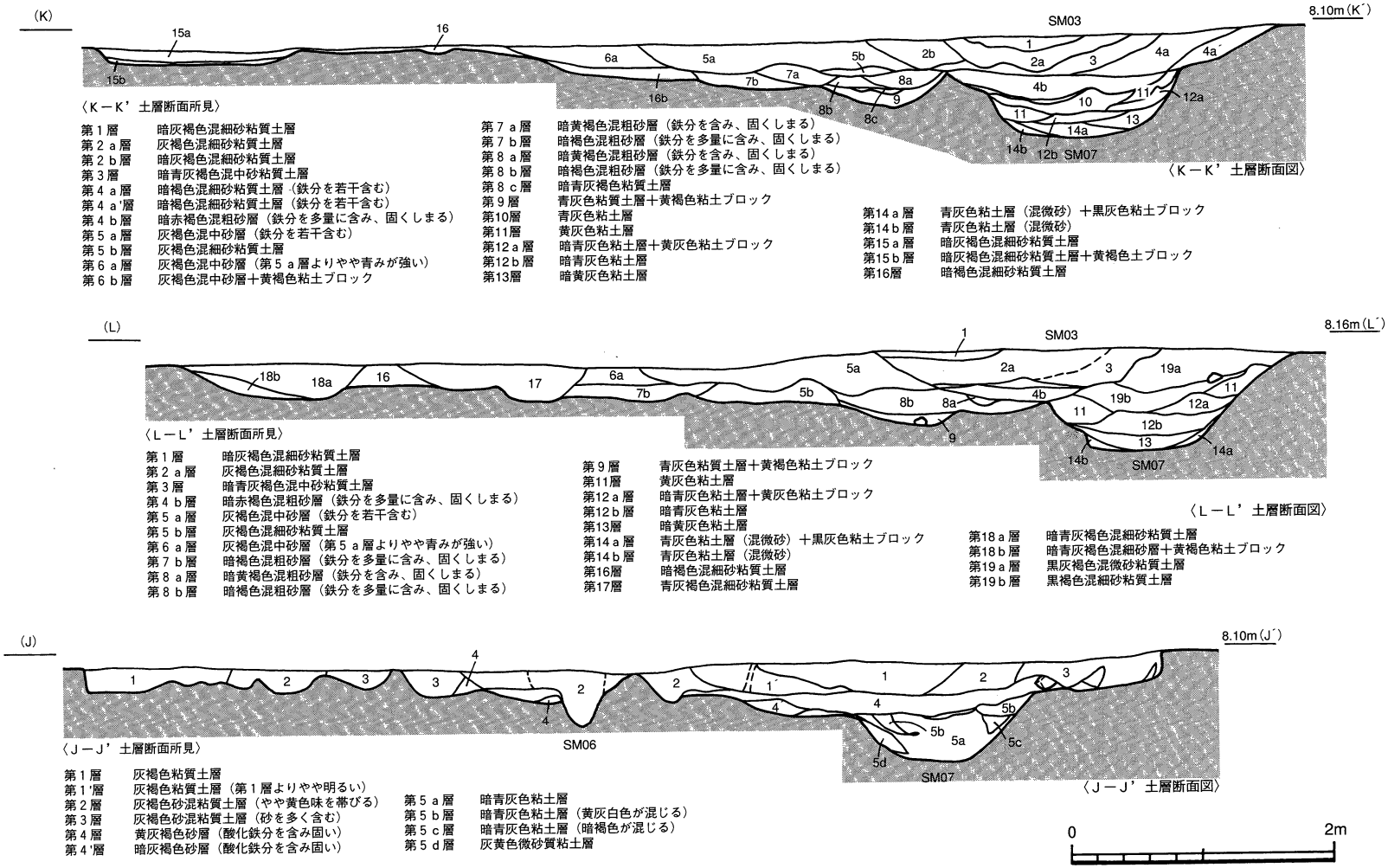
Fig,16　第４区溝SM04 遺物出土状況平面図（1/40）

(建物復元図は、Fig6～8を参照のこと)

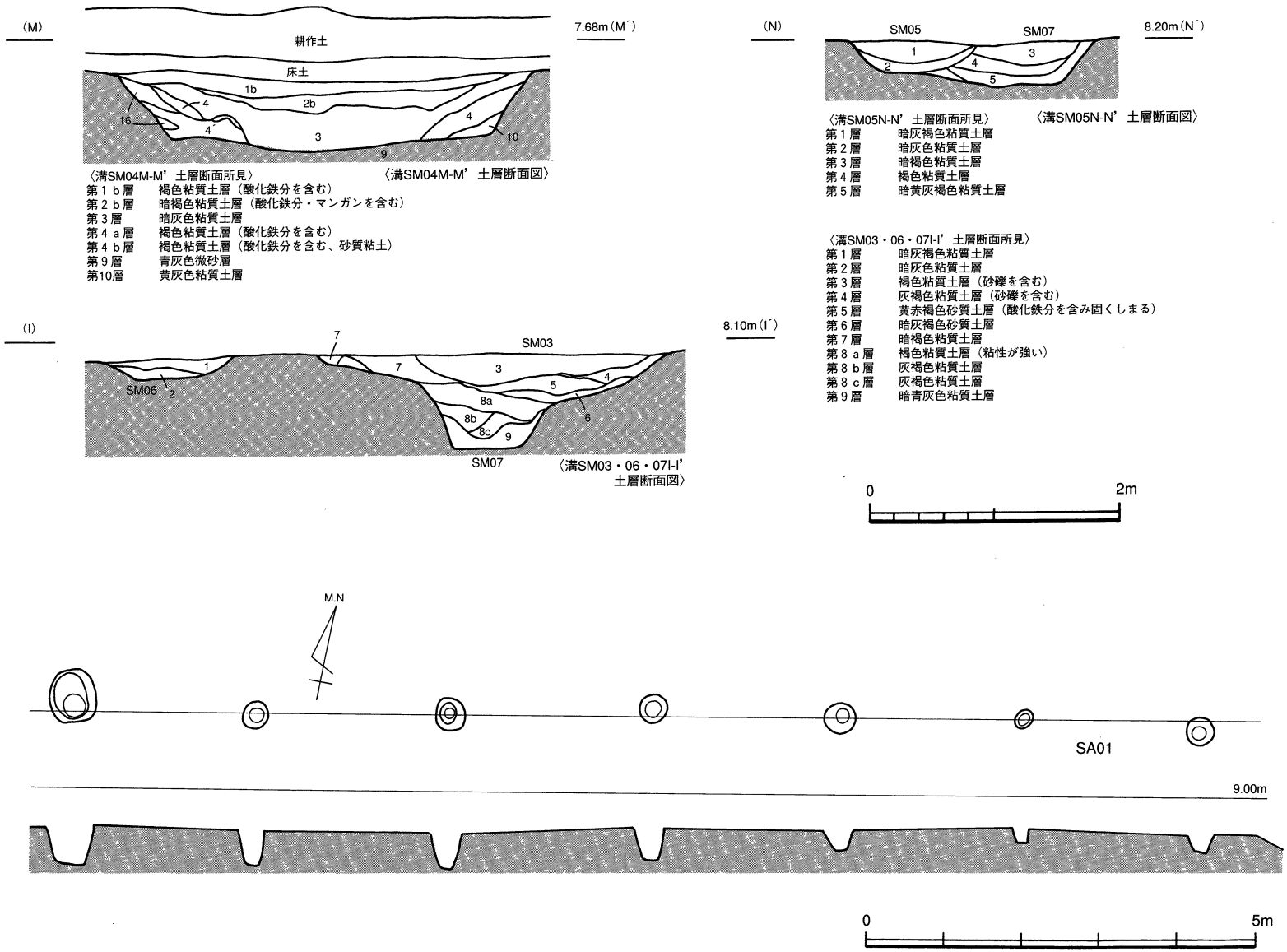
Fig,17　第５区遺構平面図（1/400）



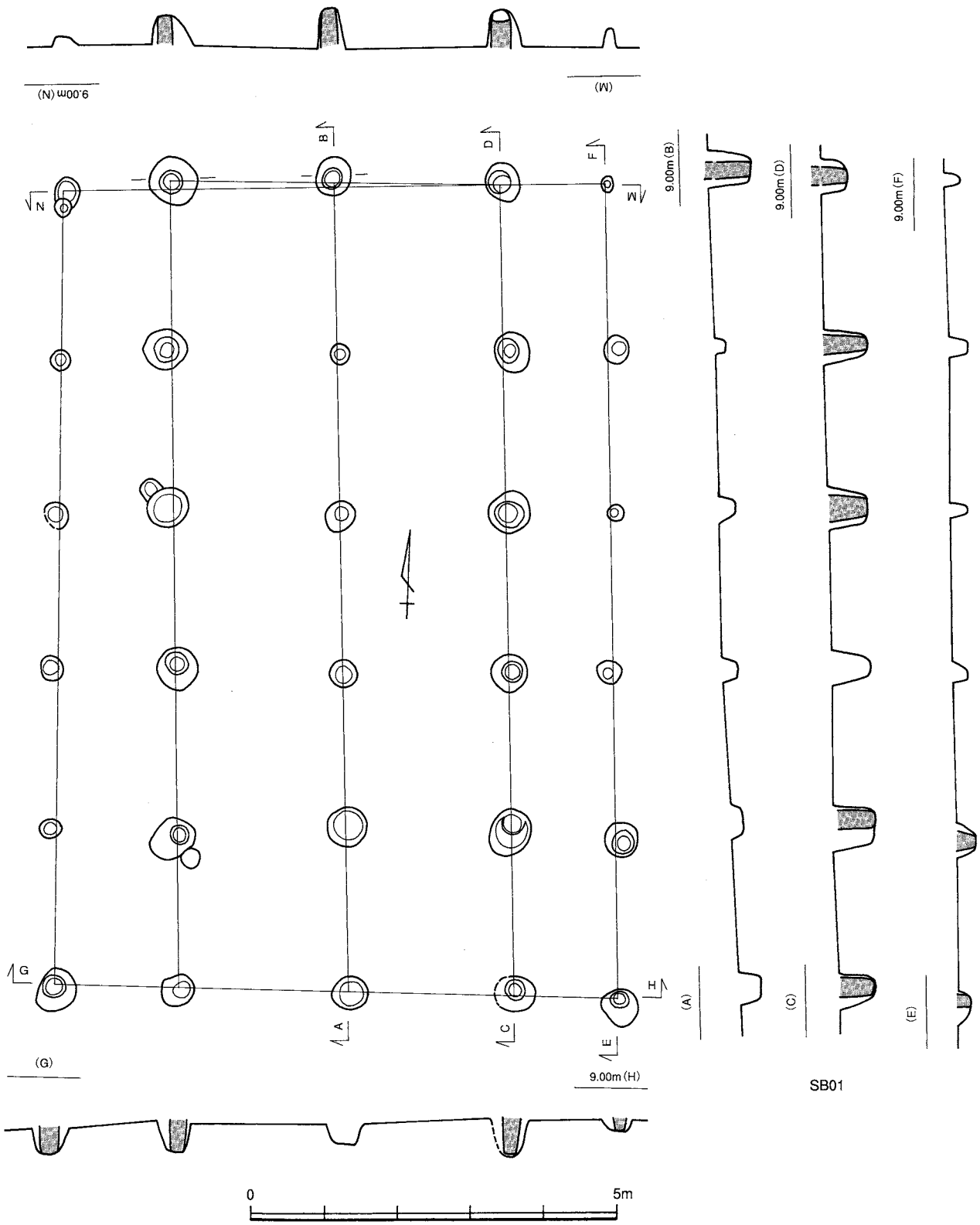
Fig,18　第6区遺構平面図（1/300）



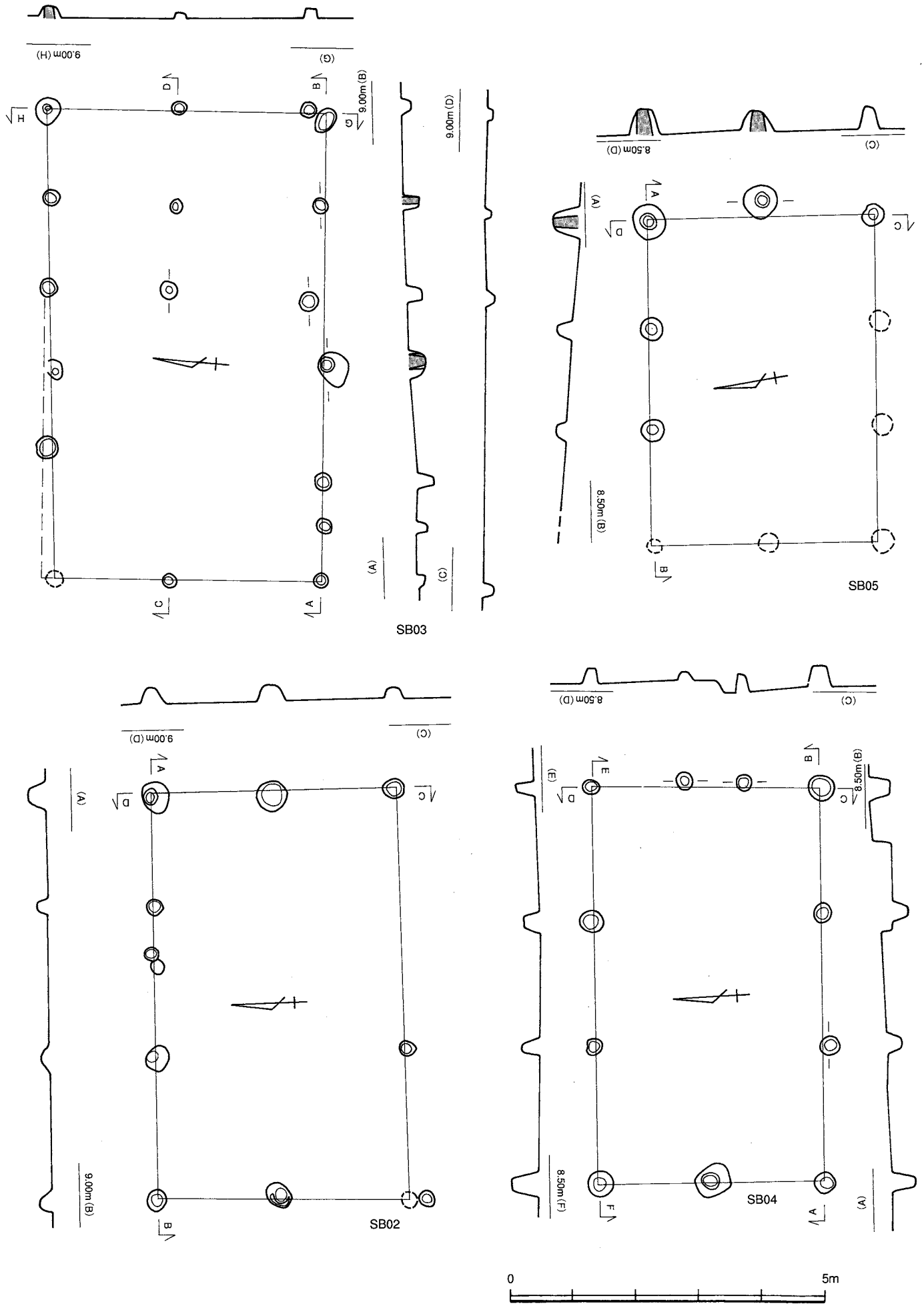
Fig,19　第６区溝 SM03・05～07 土層断面図（1/50）



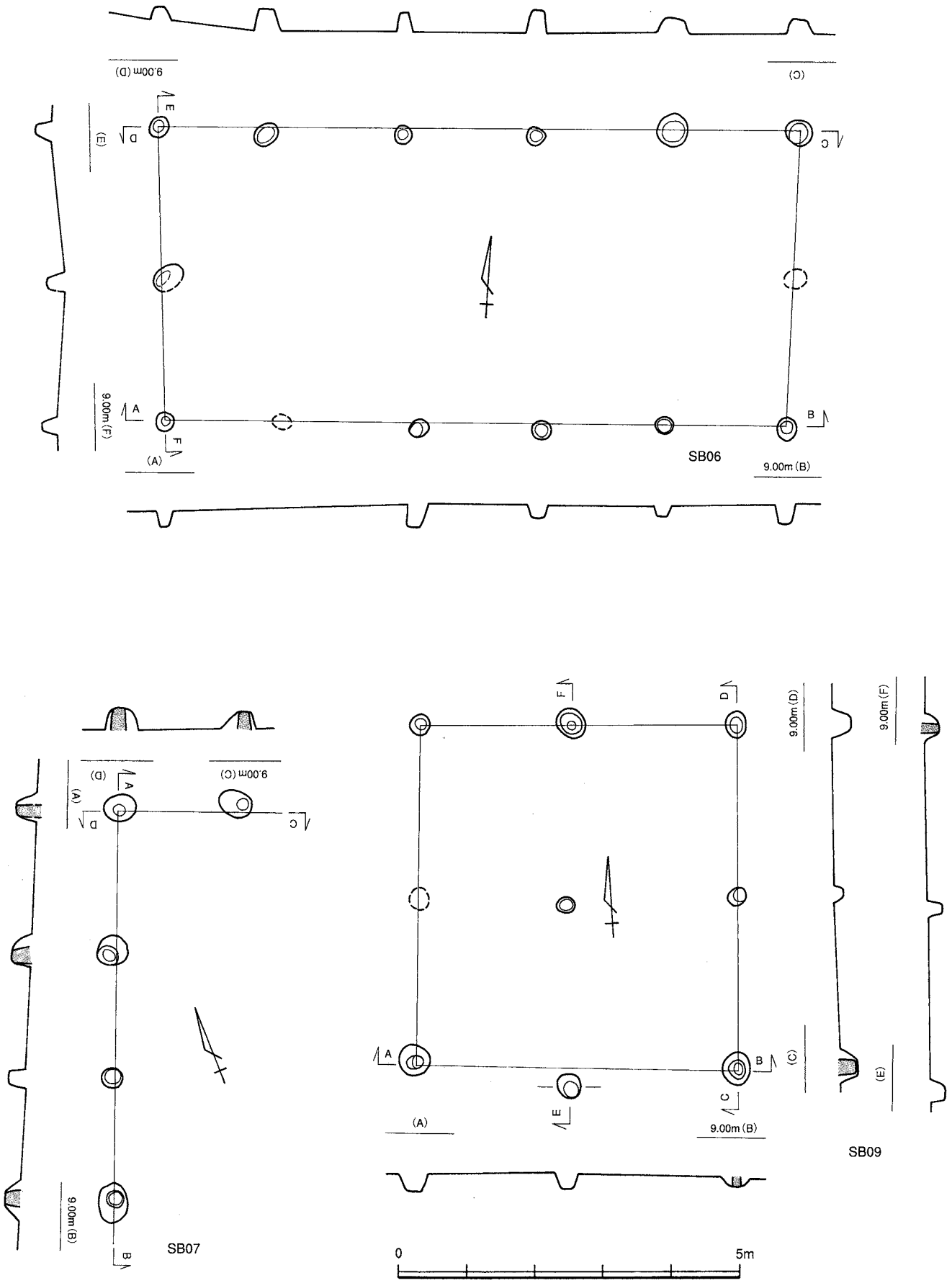
Fig,20　第6区溝SM04・06・07 土層断面図（1/50）および柵列（SA）平面・断面図（1/80）



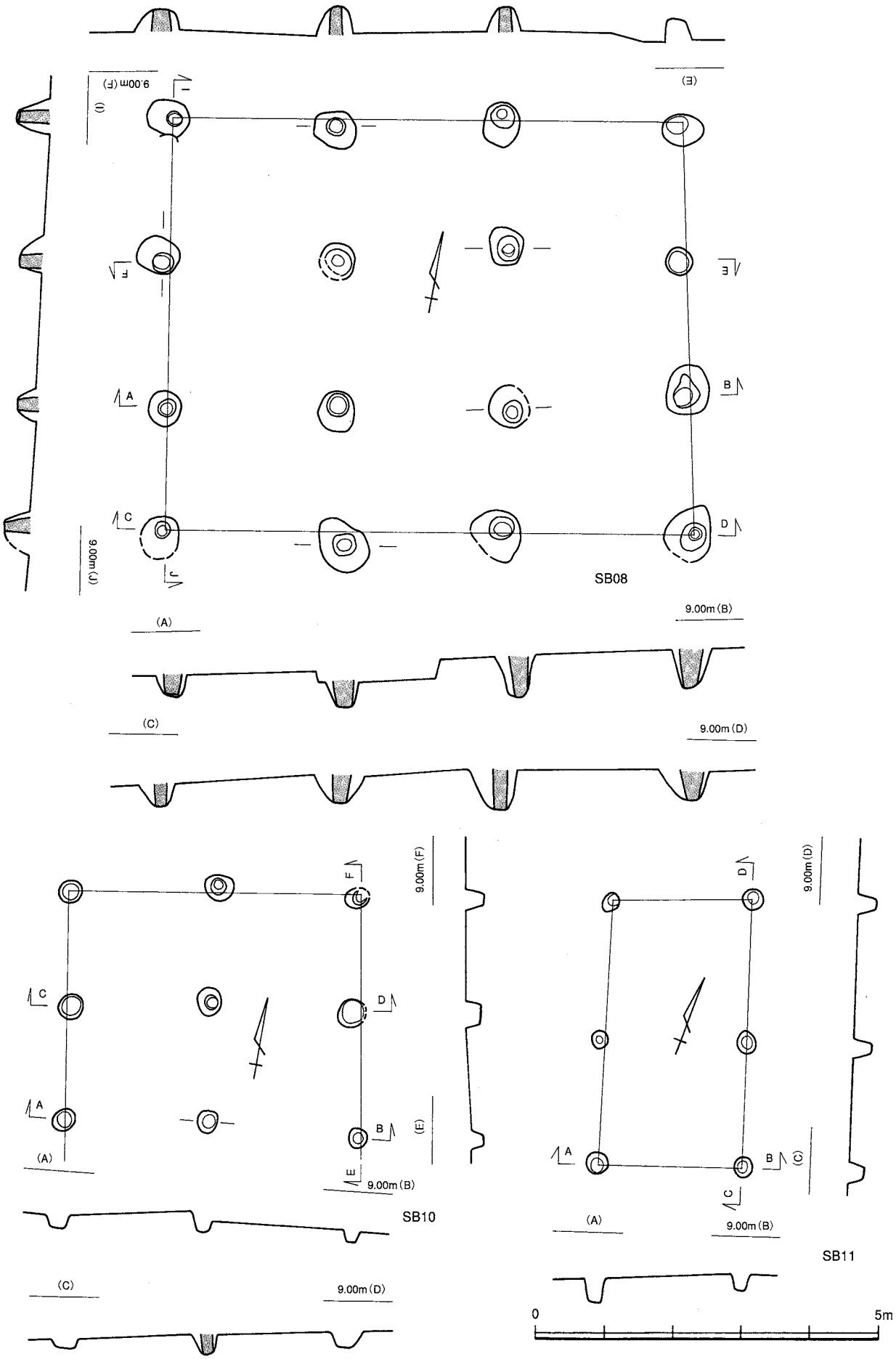
Fig,21　掘立柱建物(SB)平面・断面図1　(1/80)



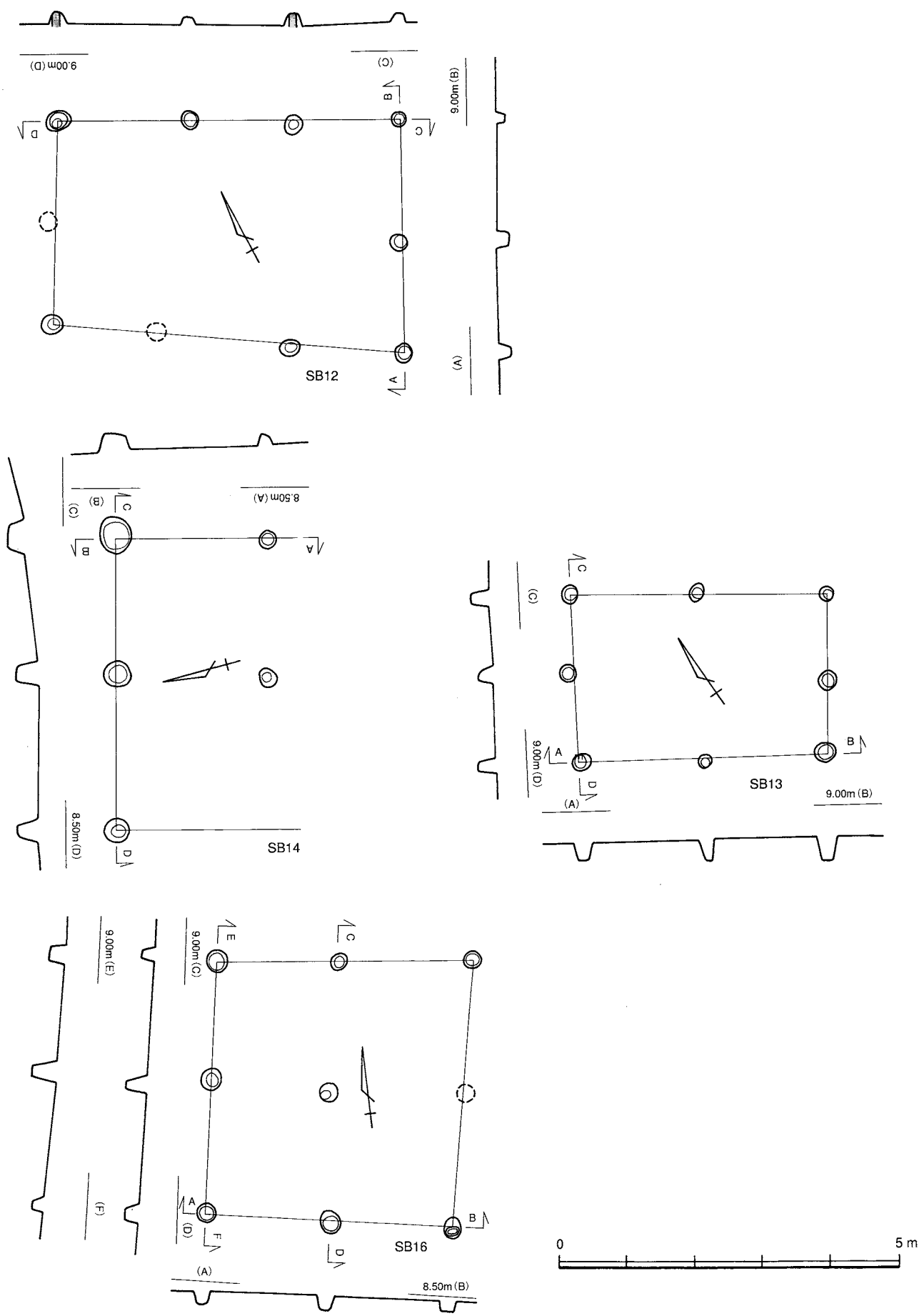
Fig,22　掘立柱建物(SB)平面・断面図2 (1/80)



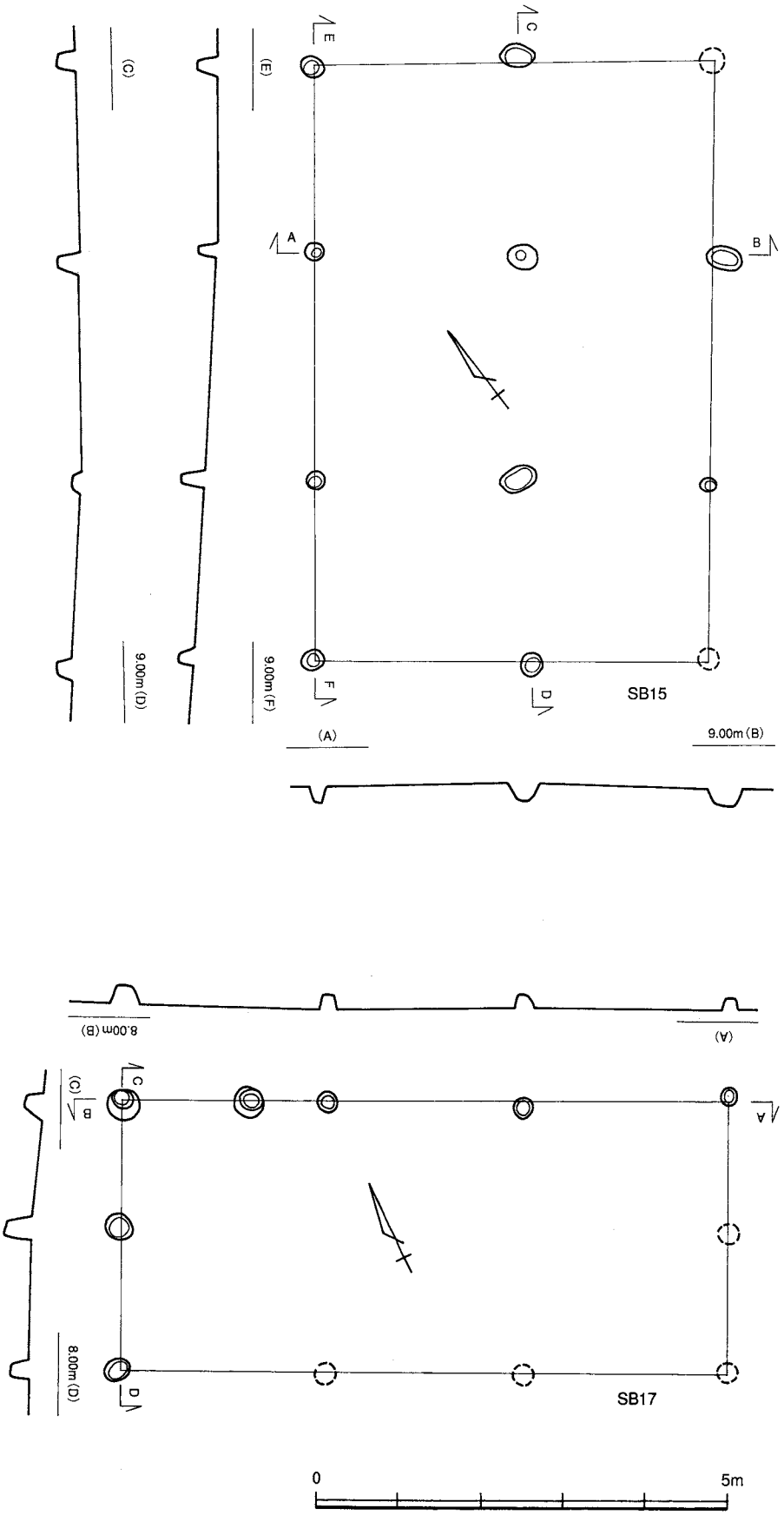
Fig,23　掘立柱建物(SB)平面・断面図3 (1/80)



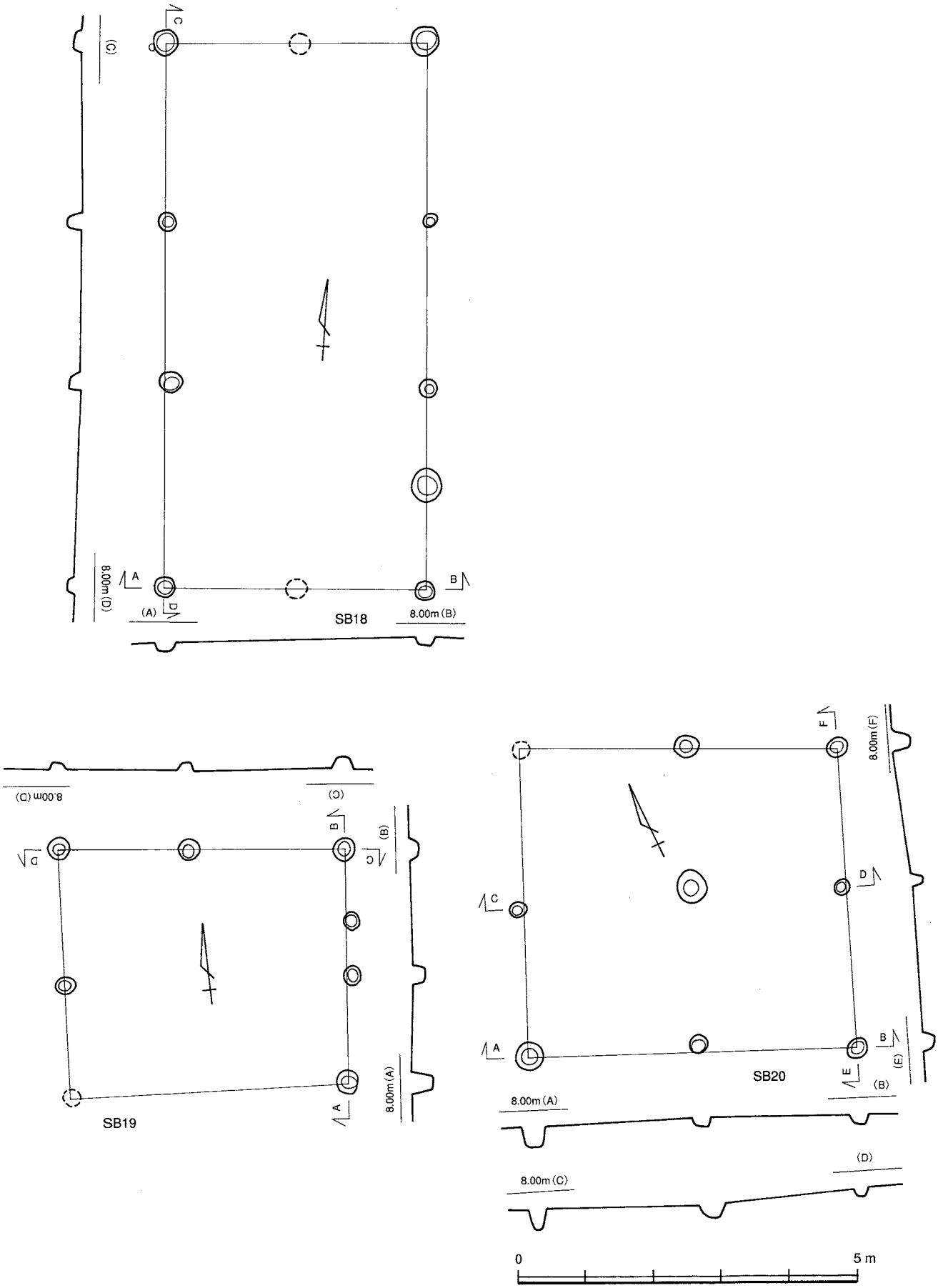
Fig,24　掘立柱建物（SB）平面・断面図４（1/80）



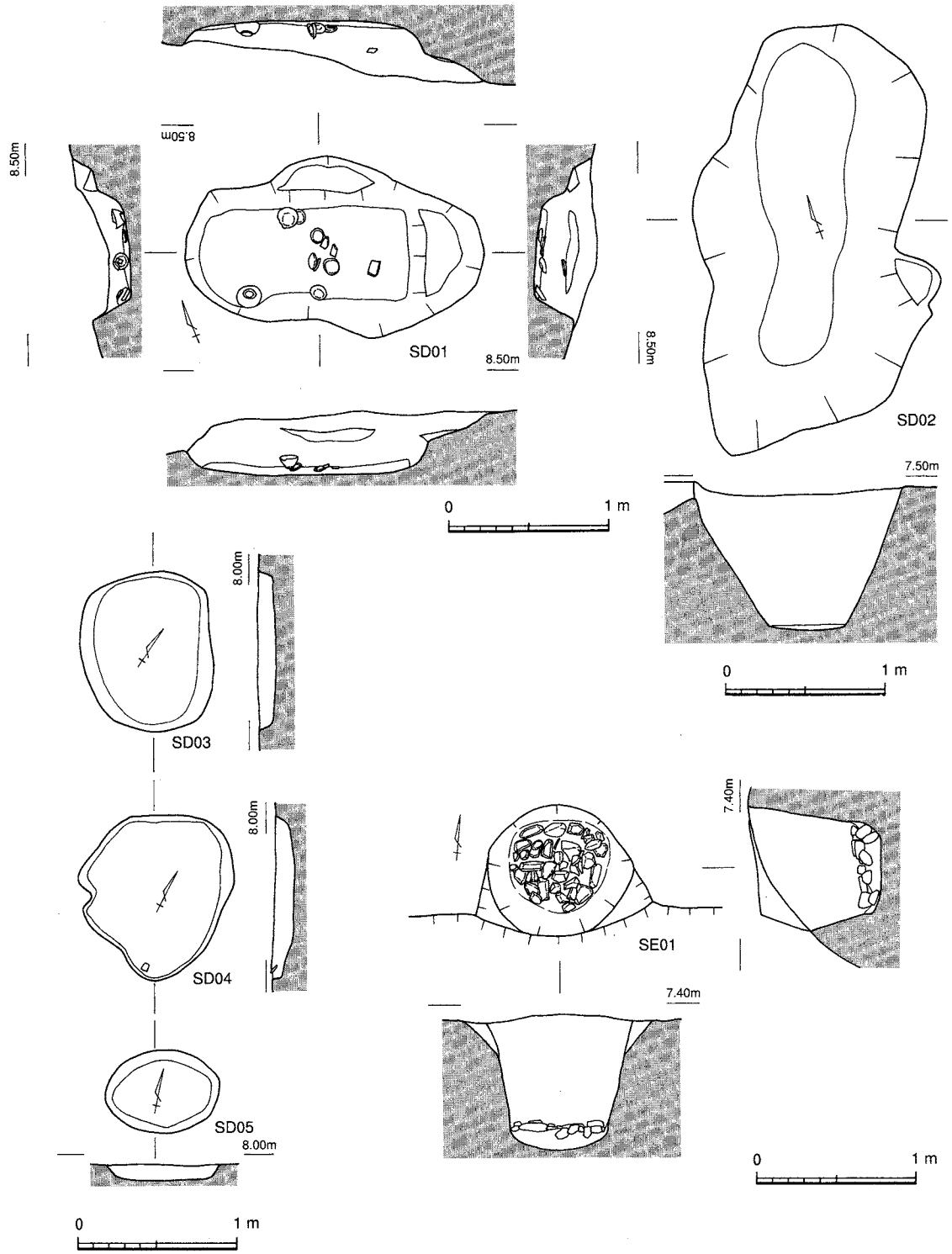
Fig, 25　掘立柱建物(SB)平面・断面図 5　(1/80)



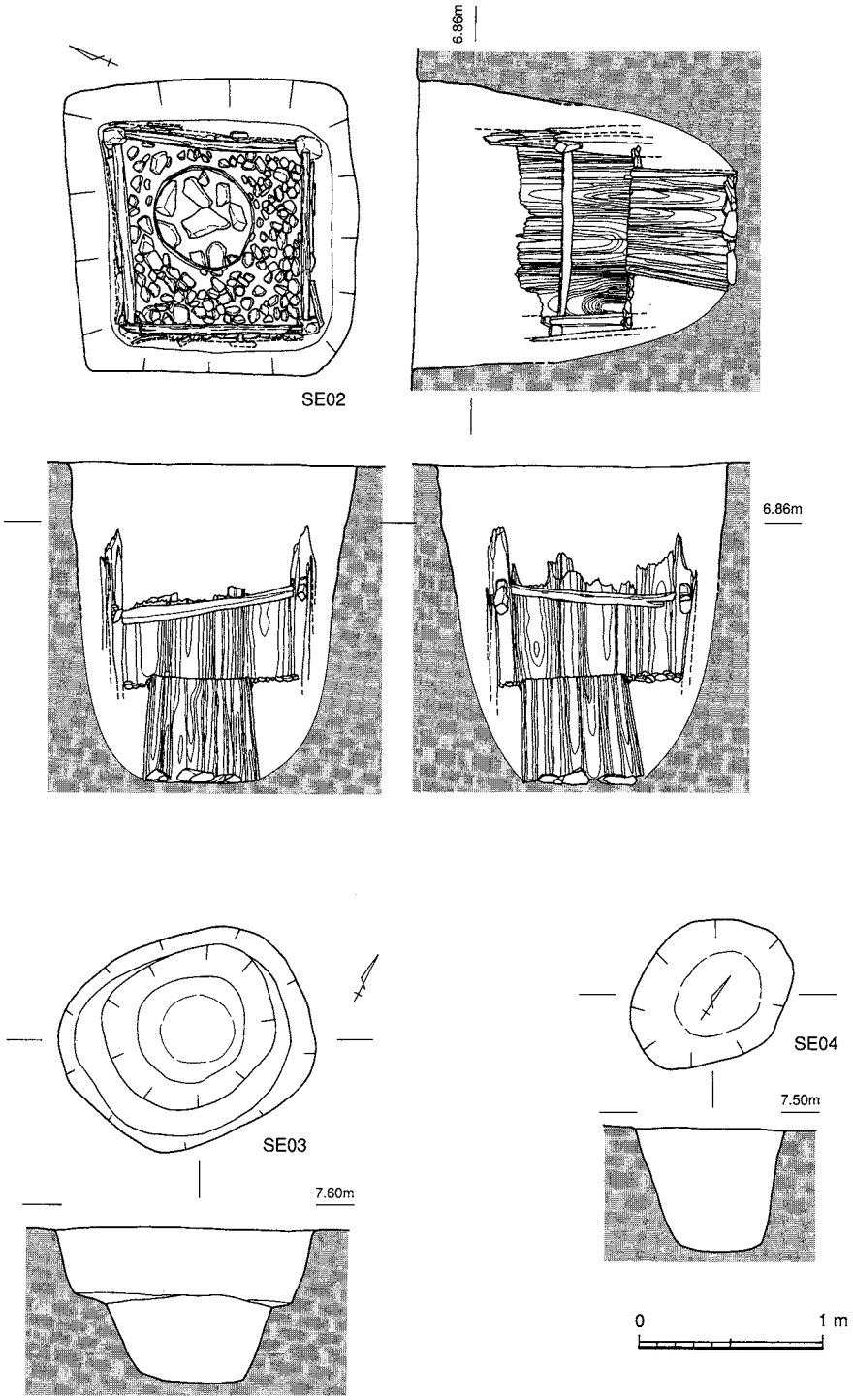
Fig,26　掘立柱建物(SB)平面・断面図6 (1/80)



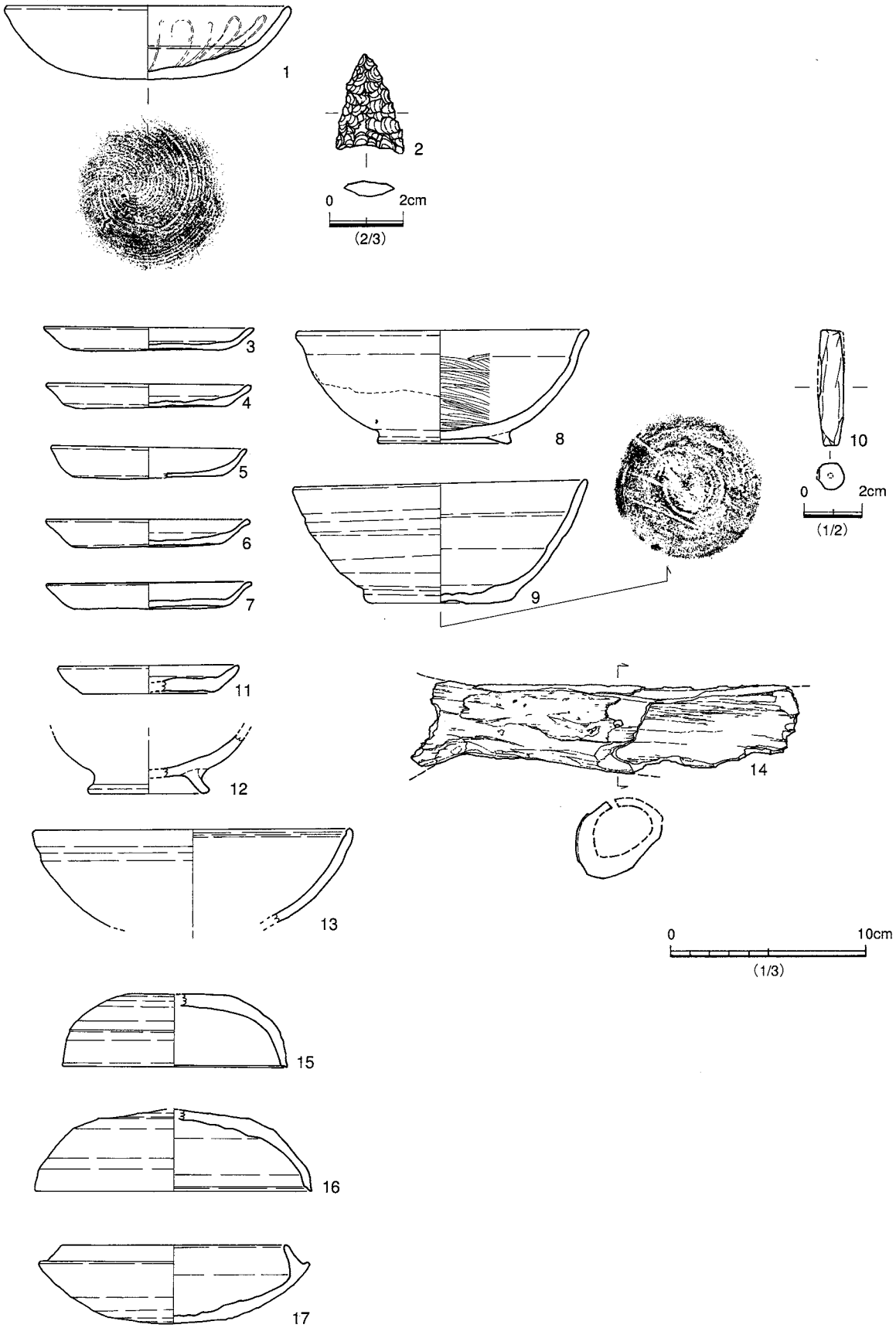
Fig,27　掘立柱建物(SB)平面・断面図7　(1/80)



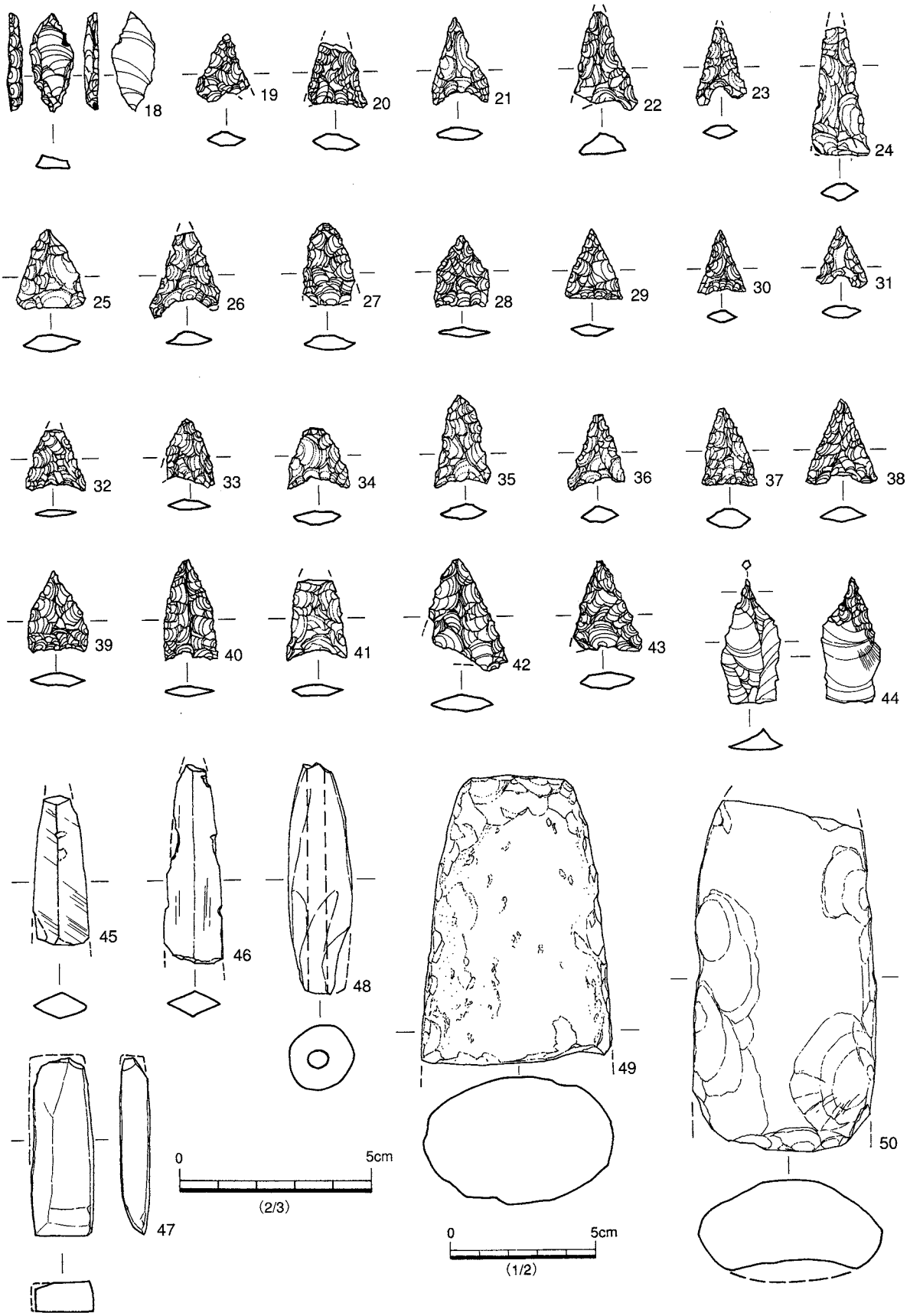
Fig,28　木棺墓・土壙（ＳＤ）、井戸（ＳＥ）平面・断面図（1/40）



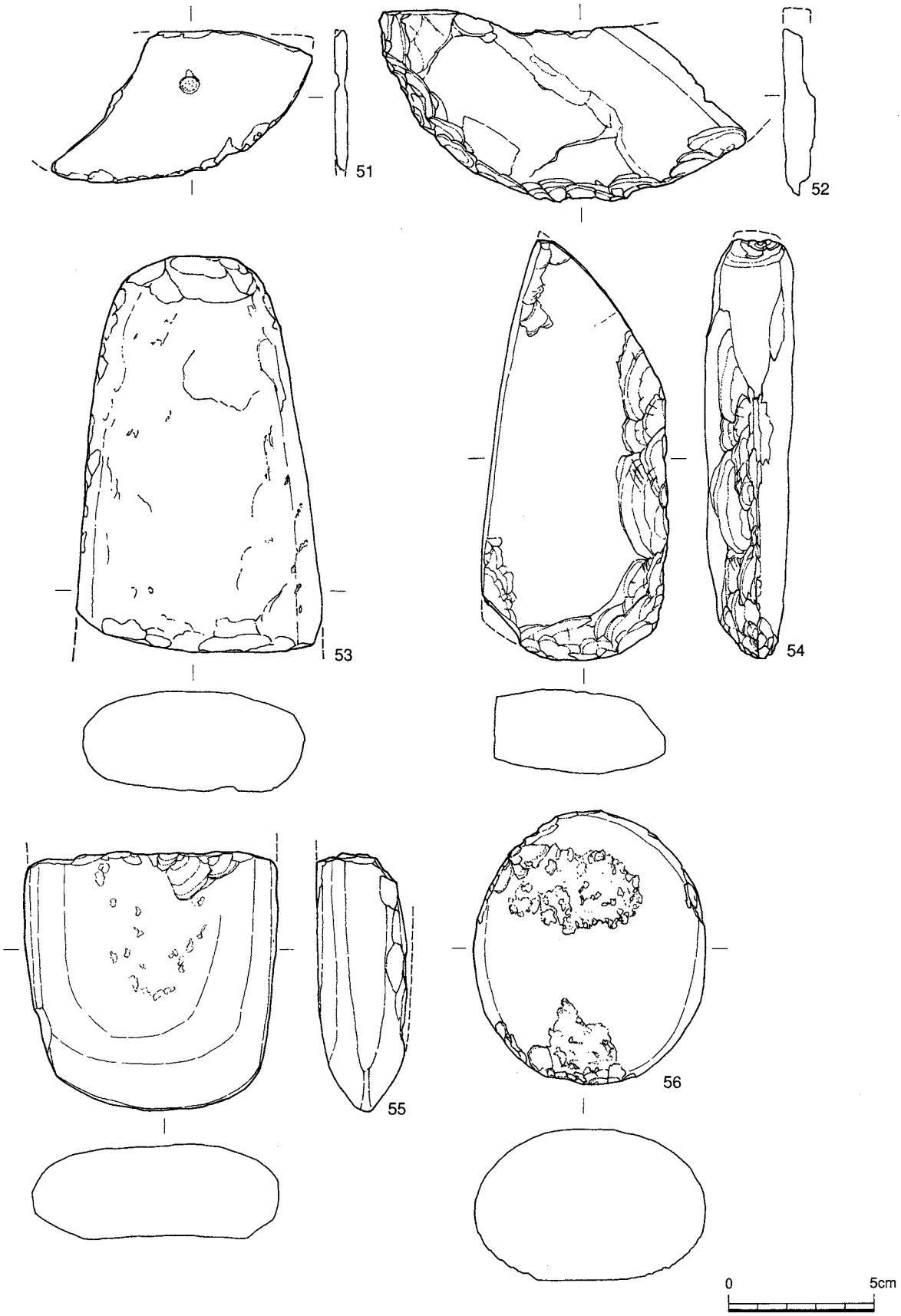
Fig,29　井戸(SE)平面・断面図 (1/40)



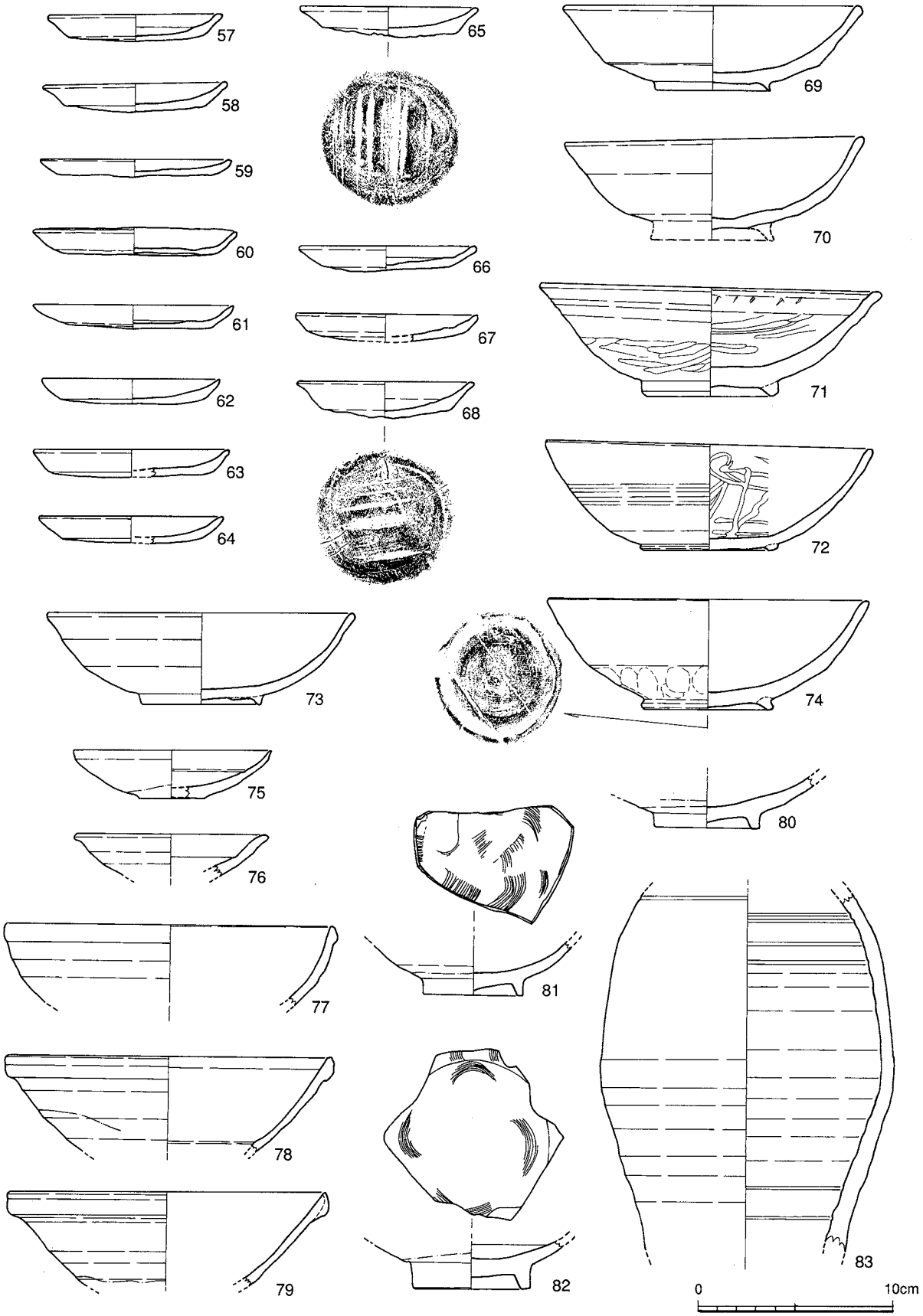
Fig,30　遺物実測図1　(1/3・2/3・1/2)



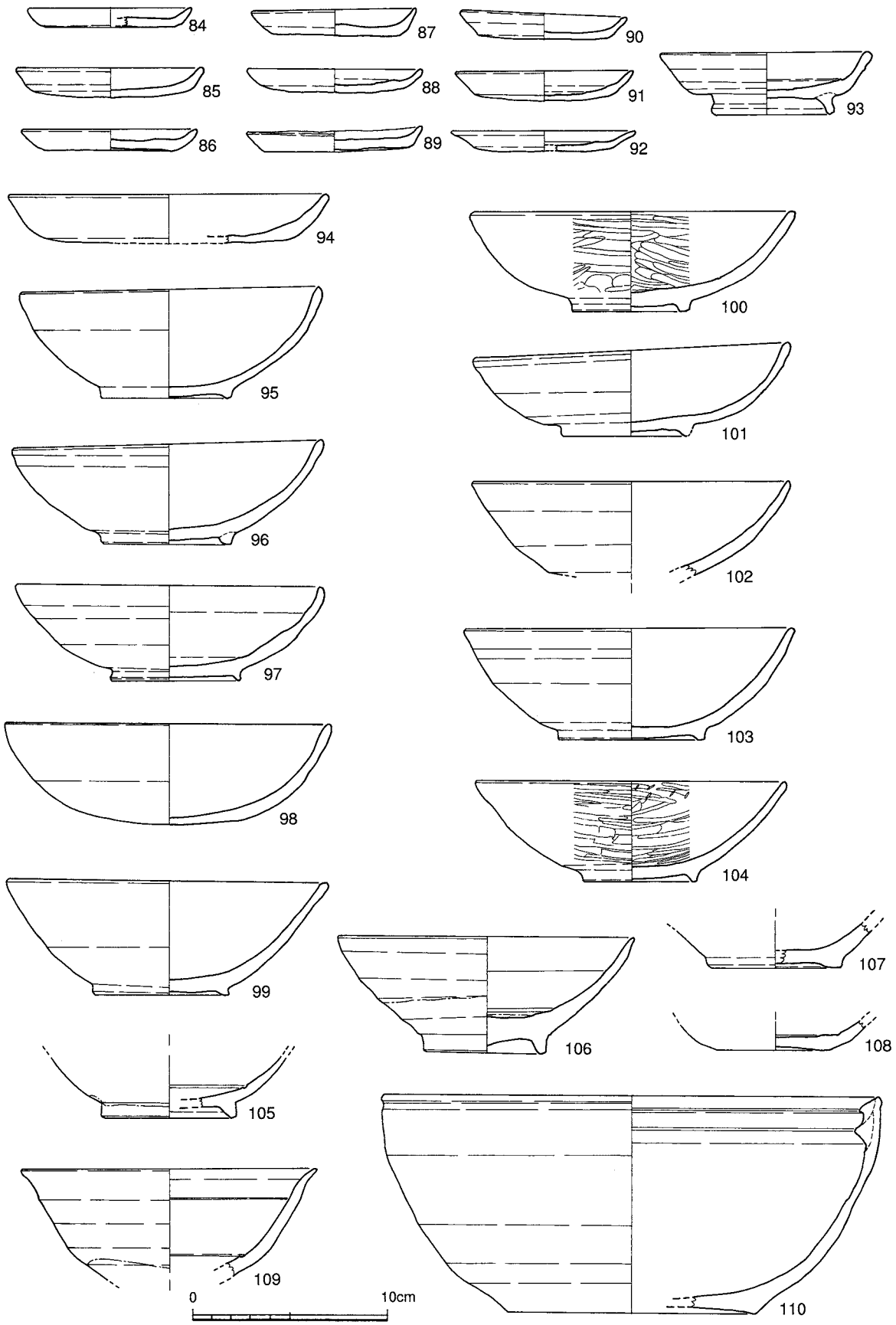
Fig,31　遺物実測図２（2/3・1/2）



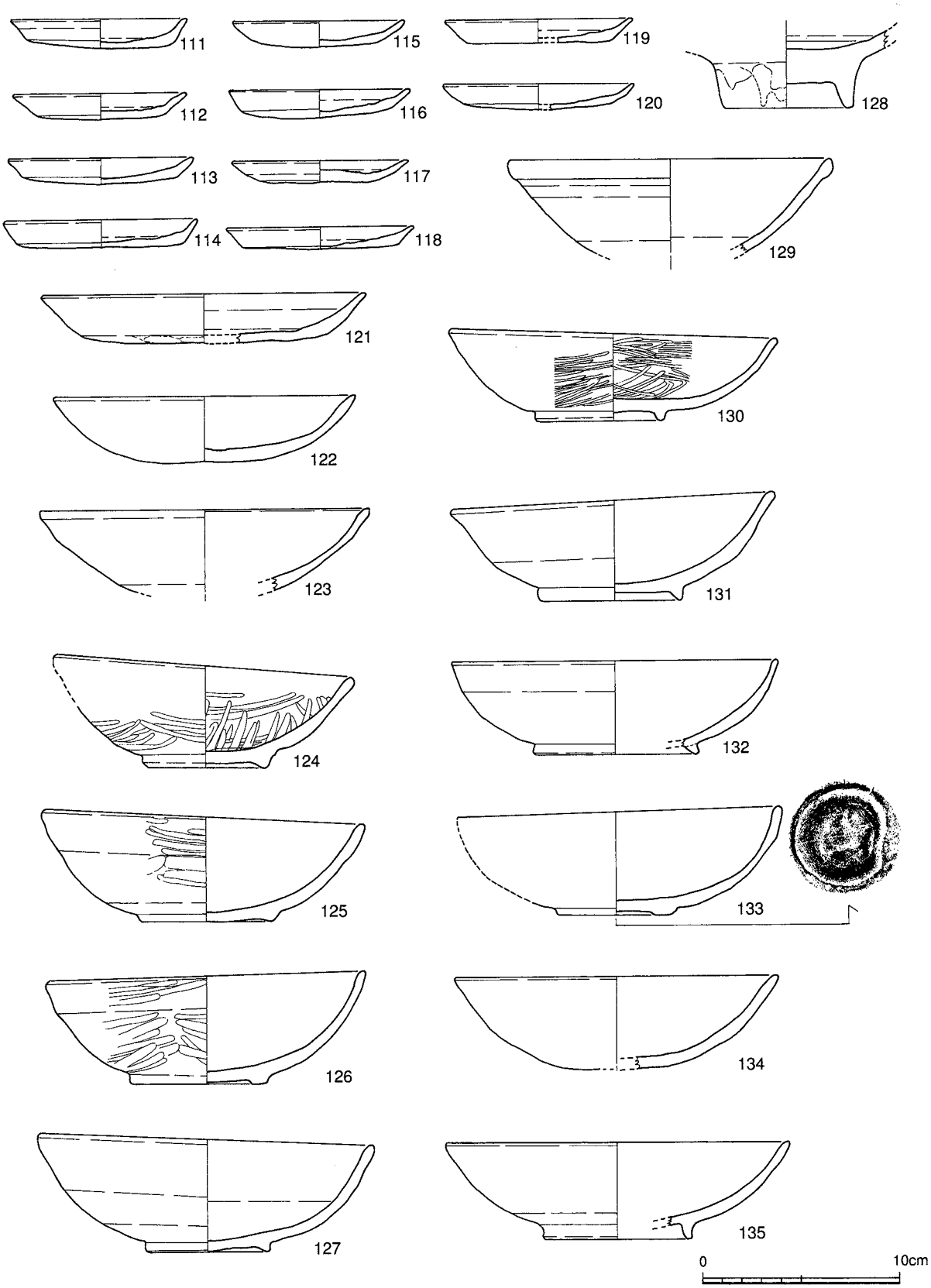
Fig, 32　遺物実測図 3 (1/2)



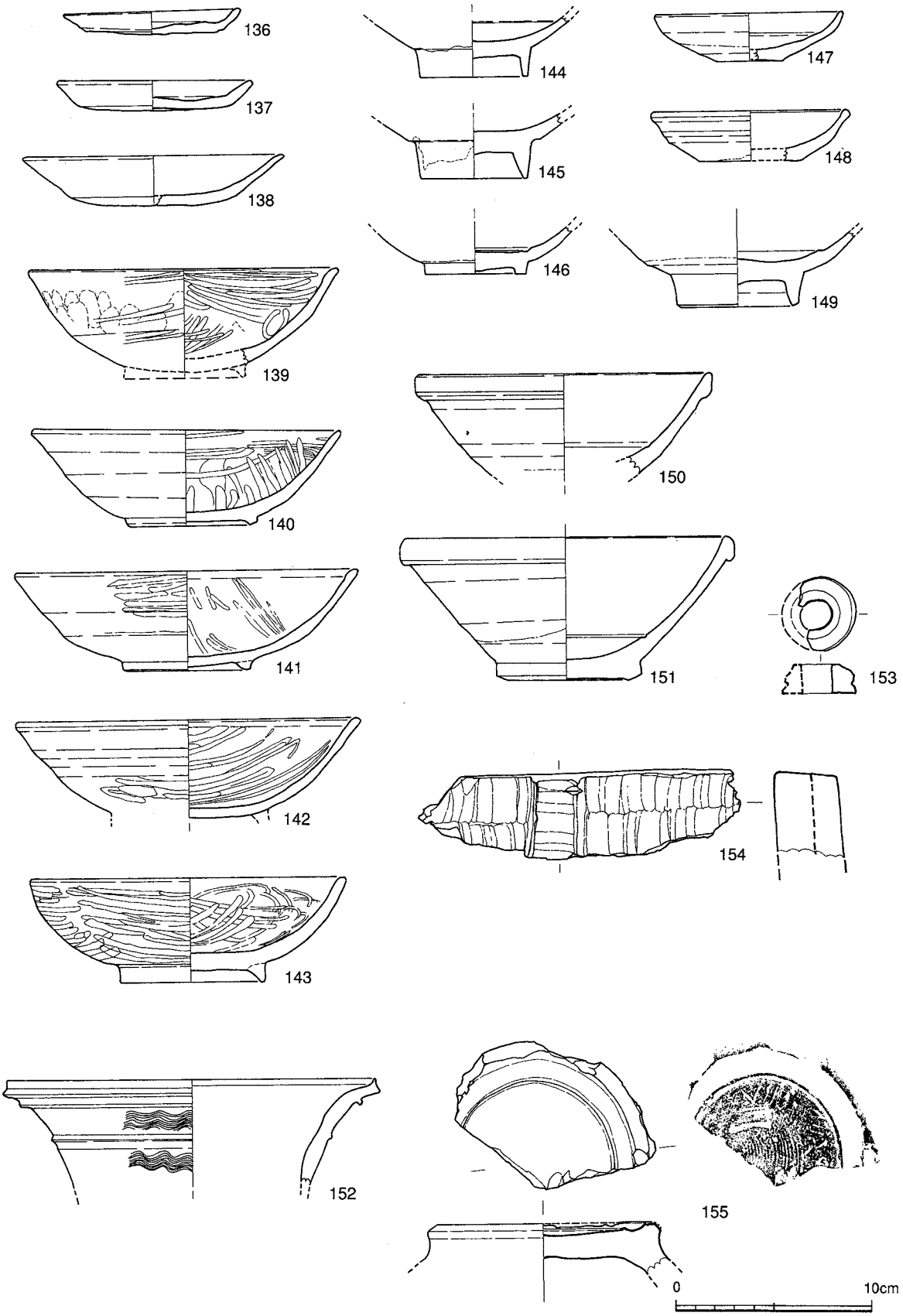
Fig,33　遺物実測図４（1/3）



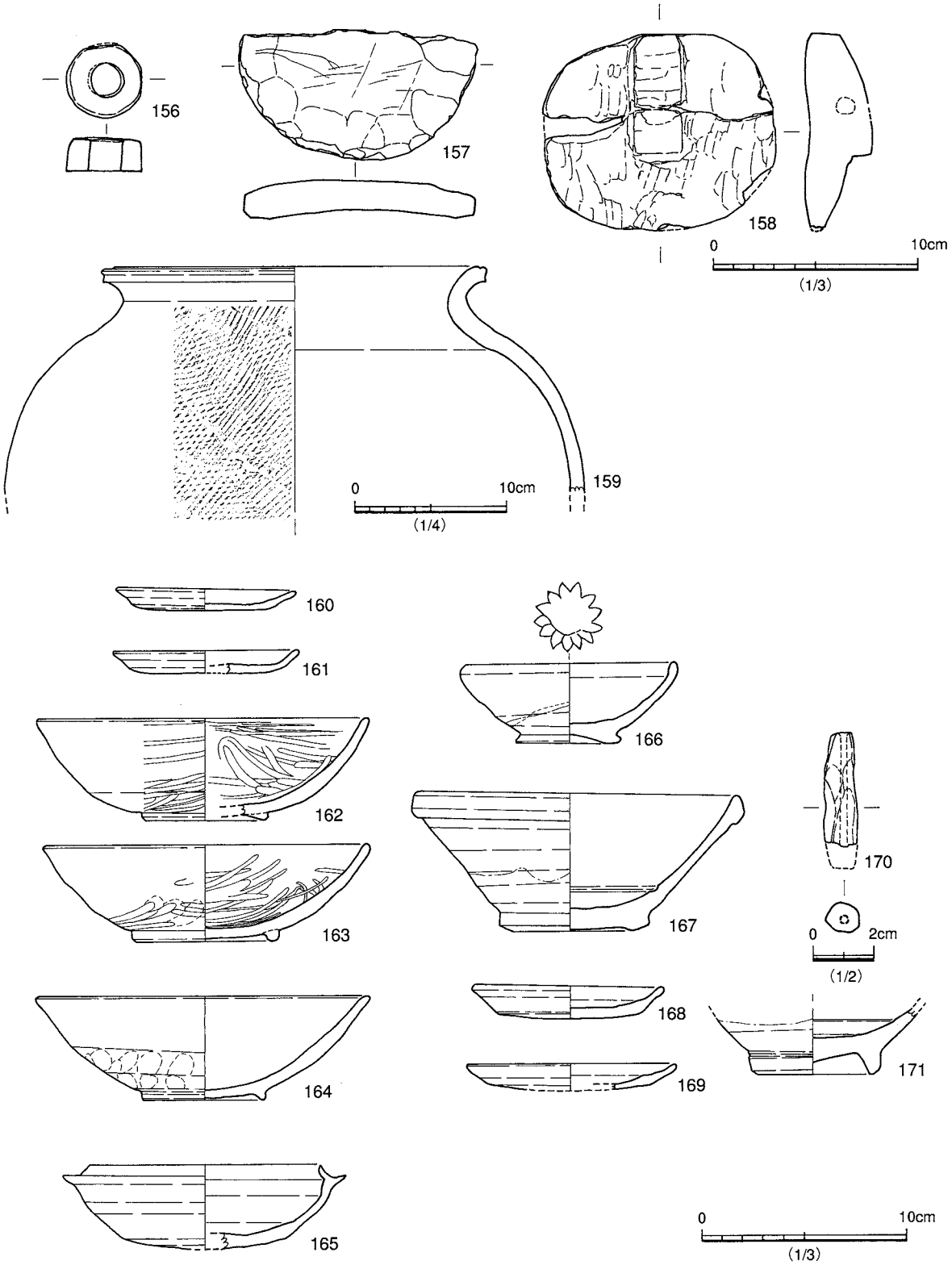
Fig, 34　遺物実測図 5 (1/3)



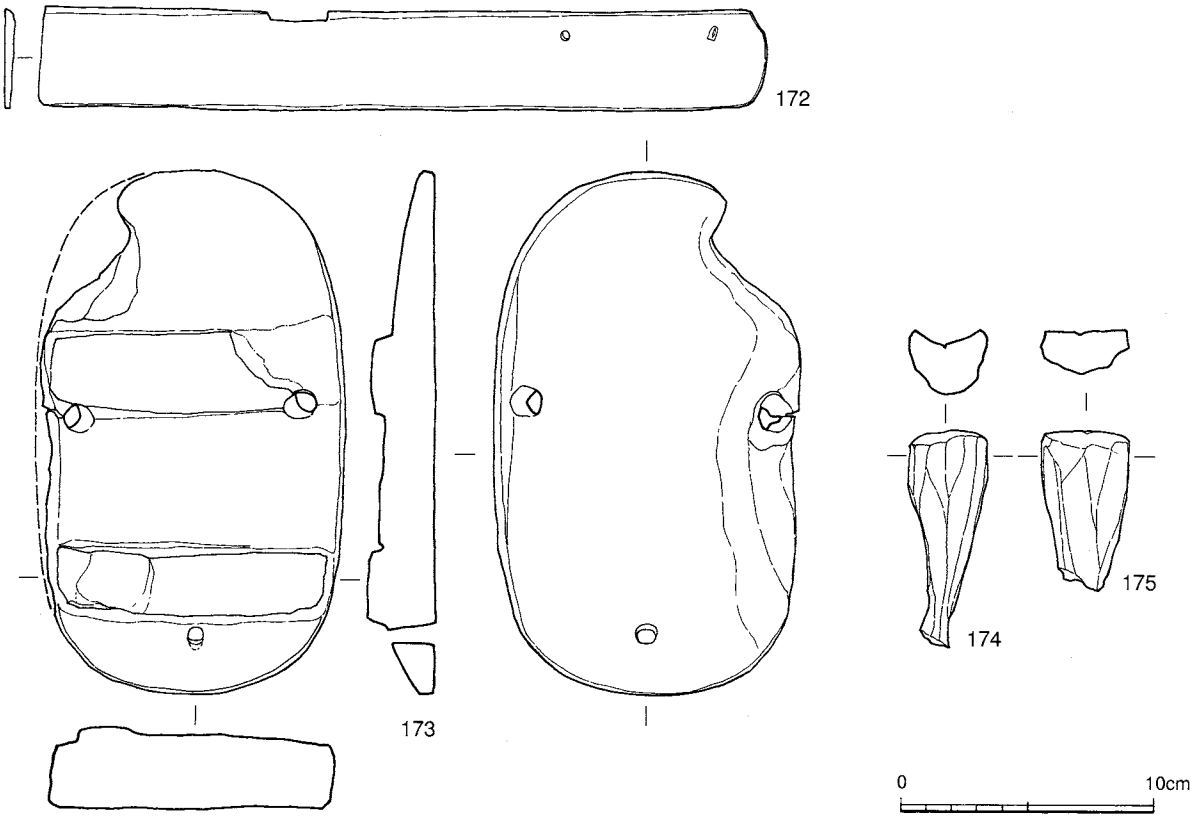
Fig, 35　遺物実測図 6 (1/3)



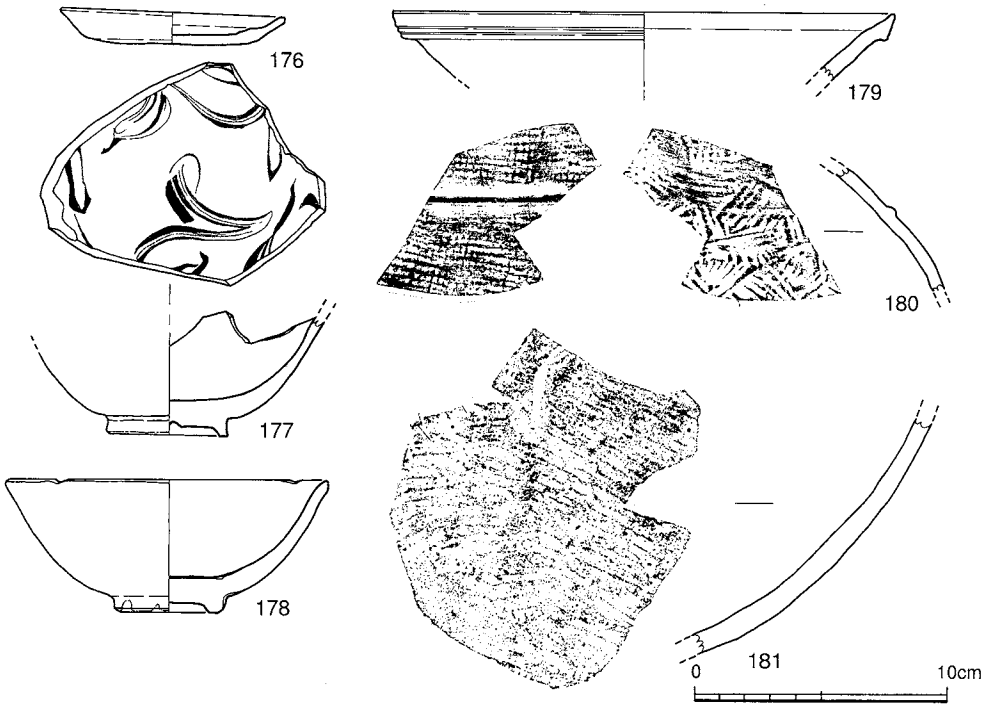
Fig,36　遺物実測図７（1/3）



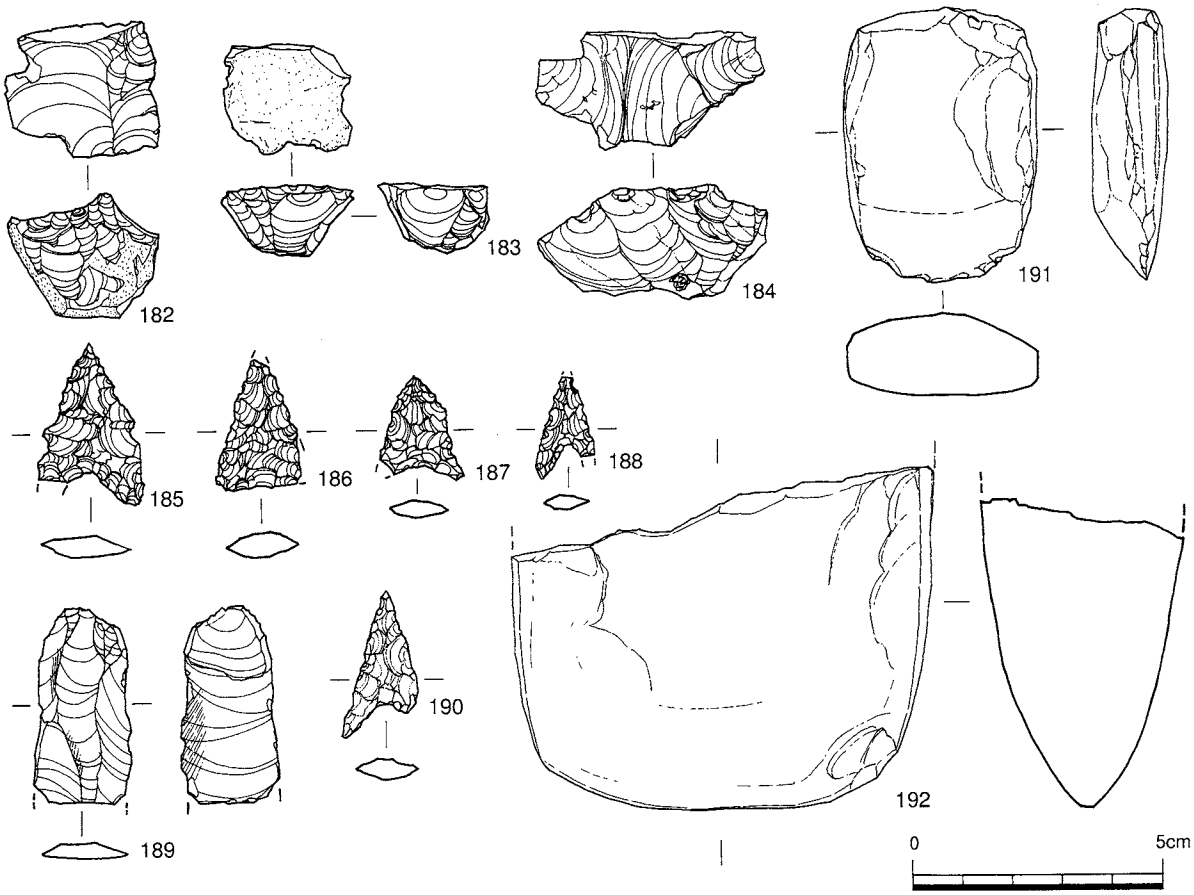
Fig,37　遺物実測図8 (1/4・1/3・1/2)



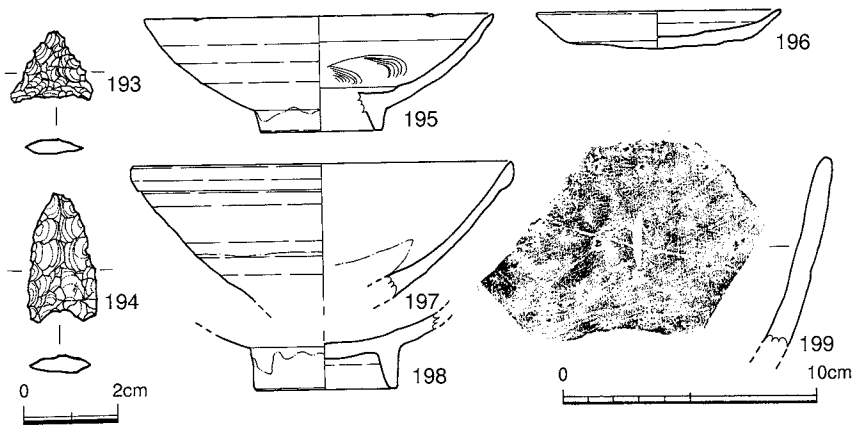
Fig, 38　遺物実測図 9 (1/3)



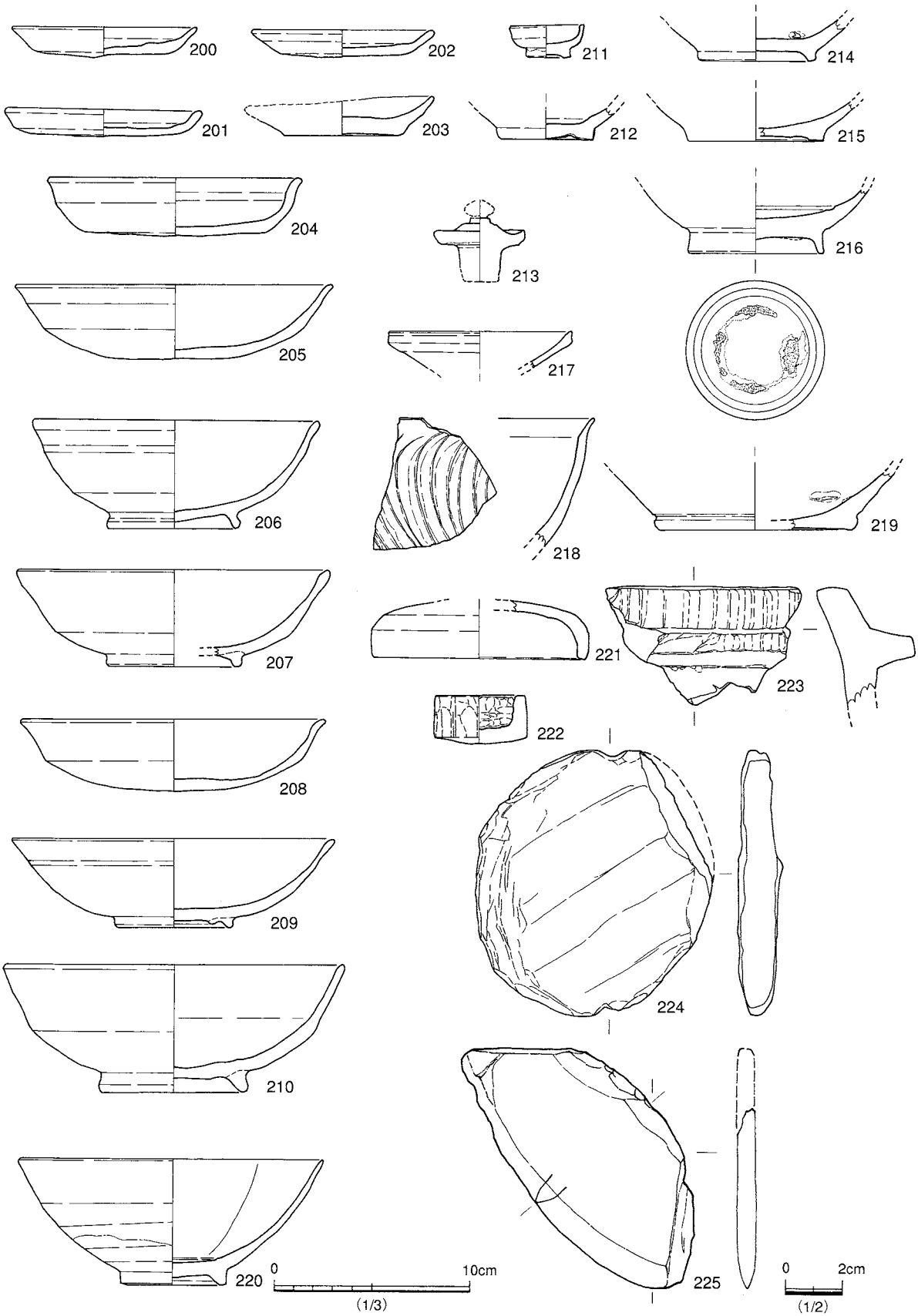
Fig, 39　遺物実測図10 (1/3)



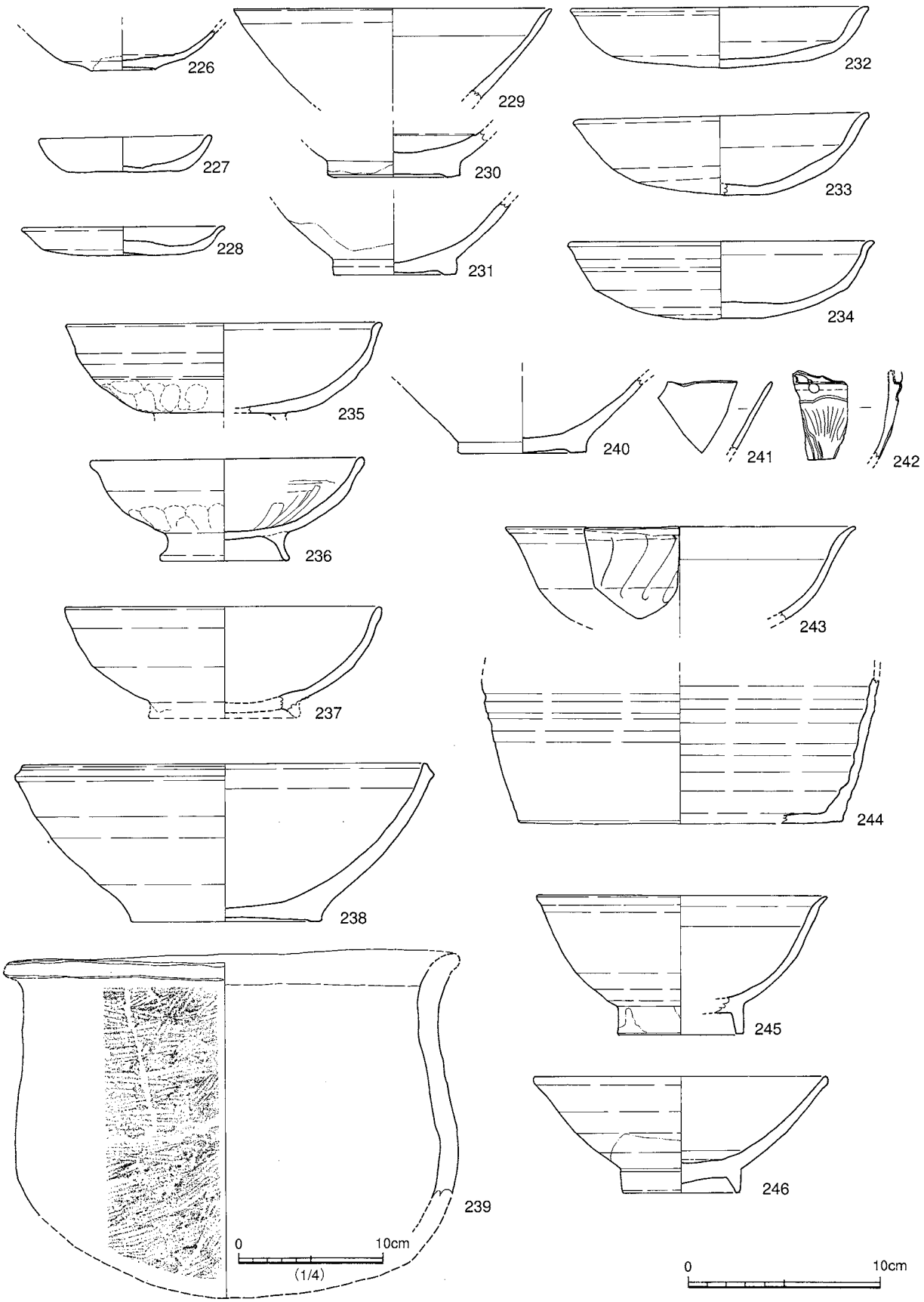
Fig,40　遺物実測図11（2/3）



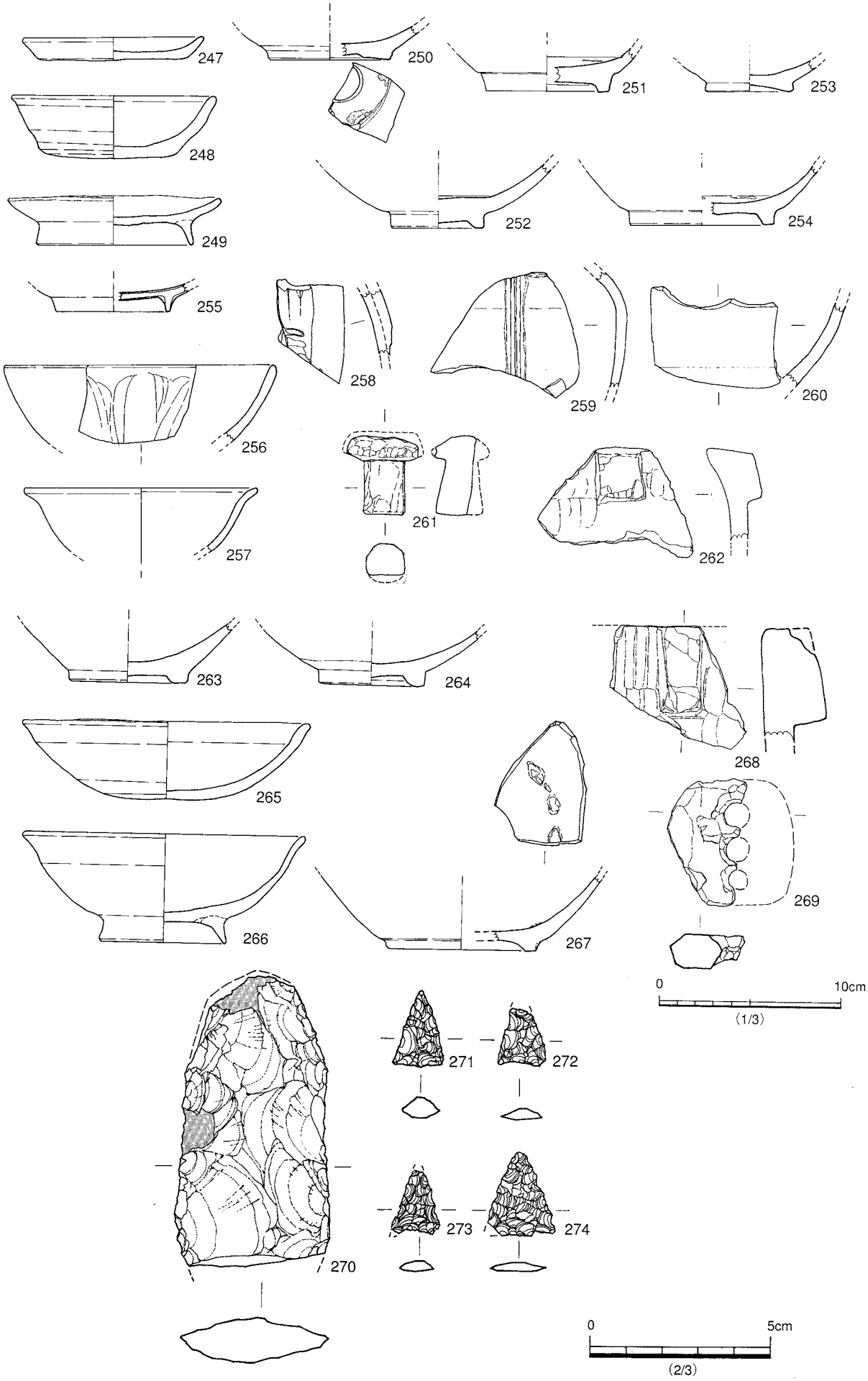
Fig,41　遺物実測図12（1/3・1/2）



Fig,42　遺物実測図13（1/3・1/2）



Fig,43　遺物実測図14（1/4・1/3）



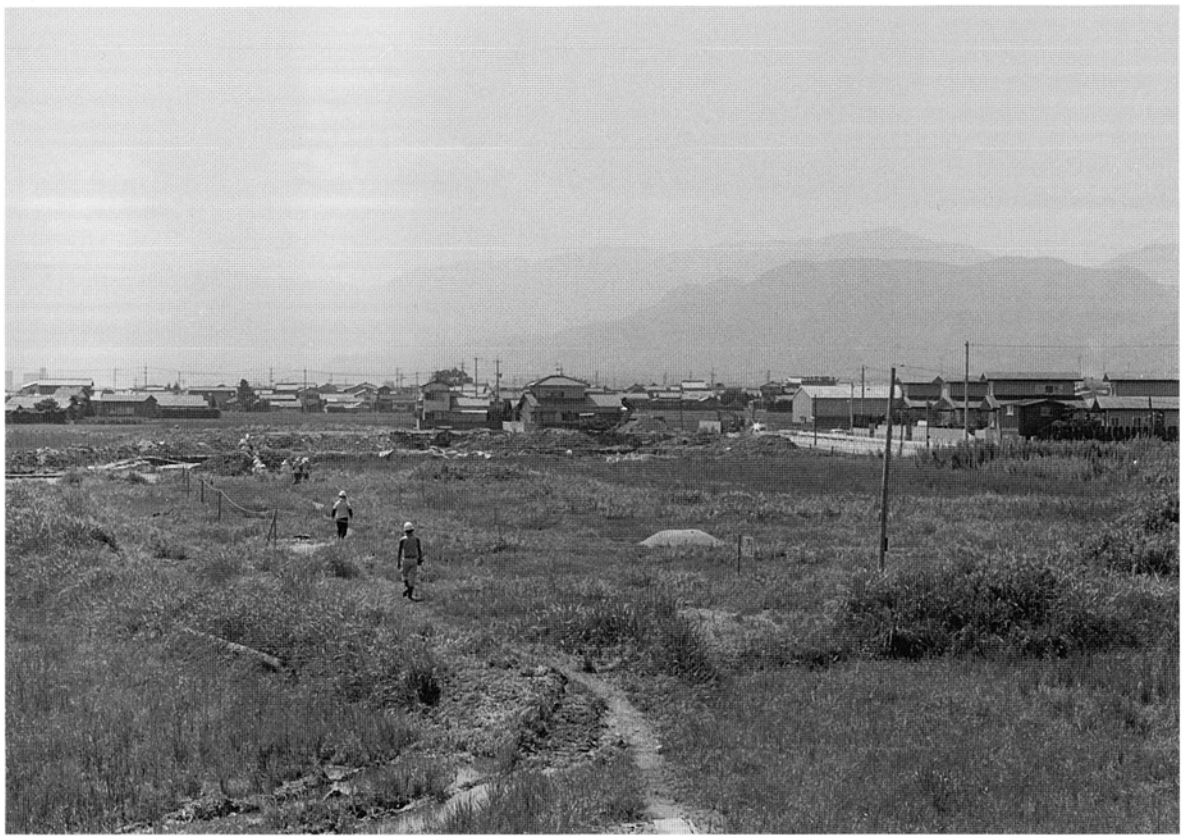
Fig, 44　遺物実測図15（1/3・2/3）

図　　版

(PLATES)

第4区　南東部作業風景（北から）

(1) 橋本榎田遺跡遠景（南東から）



(2) 調査前近景（北から）

8014-6-12

8014-67

(1) 第1区全景（西から）

8014-1320

(2) 第2区全景（西から）

8014-12-32

(3) 第3区全景（西から）

8014-8-4

(1) 第4区作業風景（北から）

8014-9-29

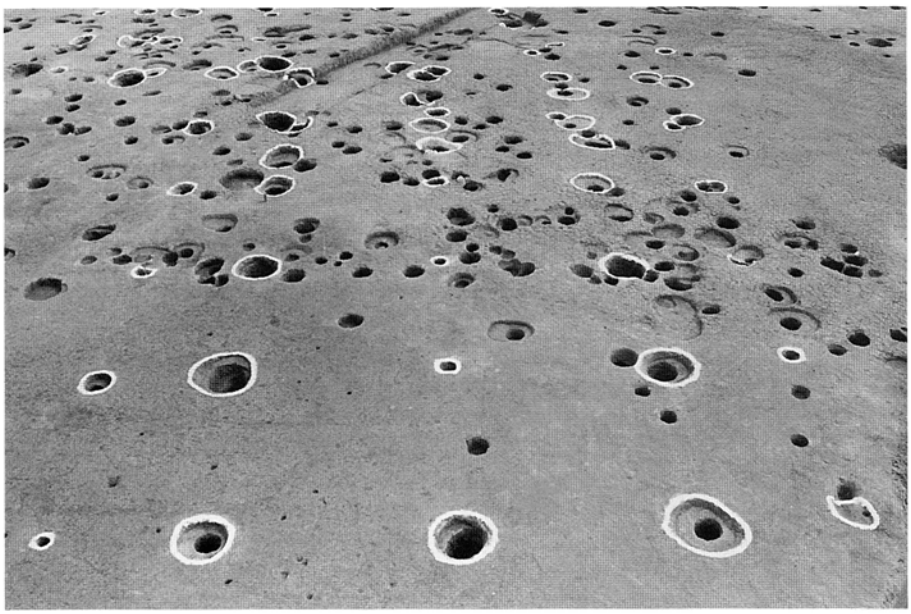
(2) 第4区全景（南から）

8014-13-3

(3) 第5区全景（南から）

(1) 第6区全景（北西から）　8014-109

(2) 第6区全景（南から）　8014-90

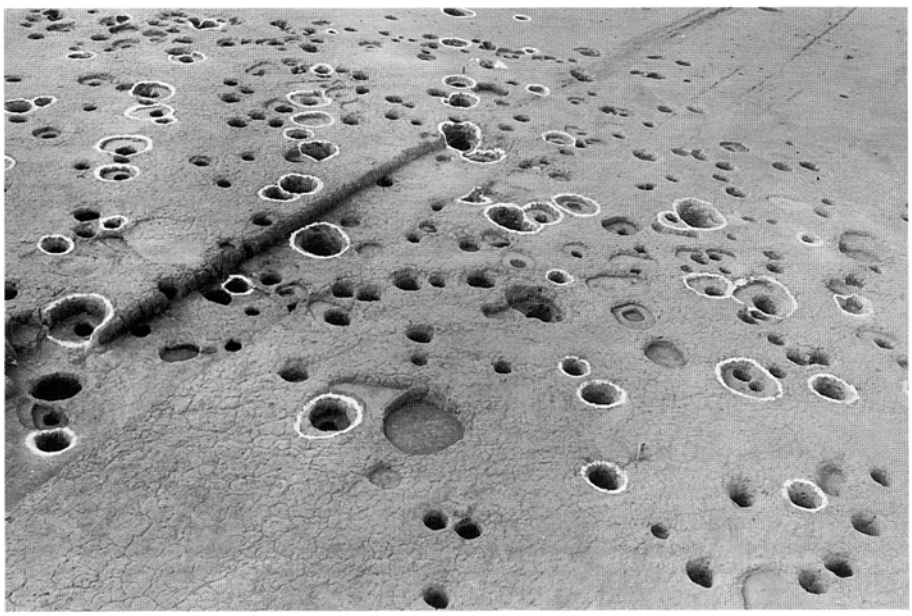


8014-6-19

(1) 掘立柱建物SB01（南から）

8014-2-2

(2) 掘立柱建物SB01（西から）

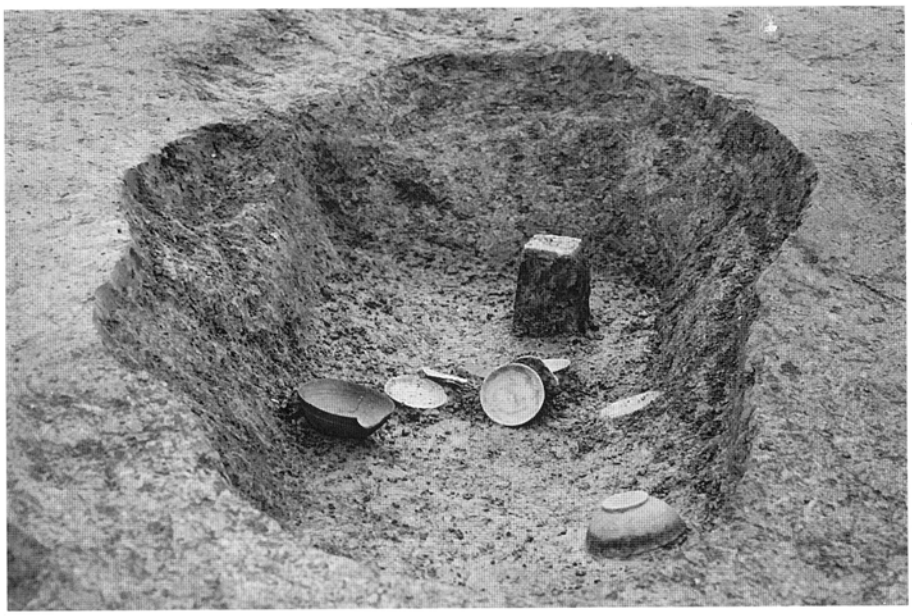


8014-6-19

(3) 掘立柱建物SB08（南から）

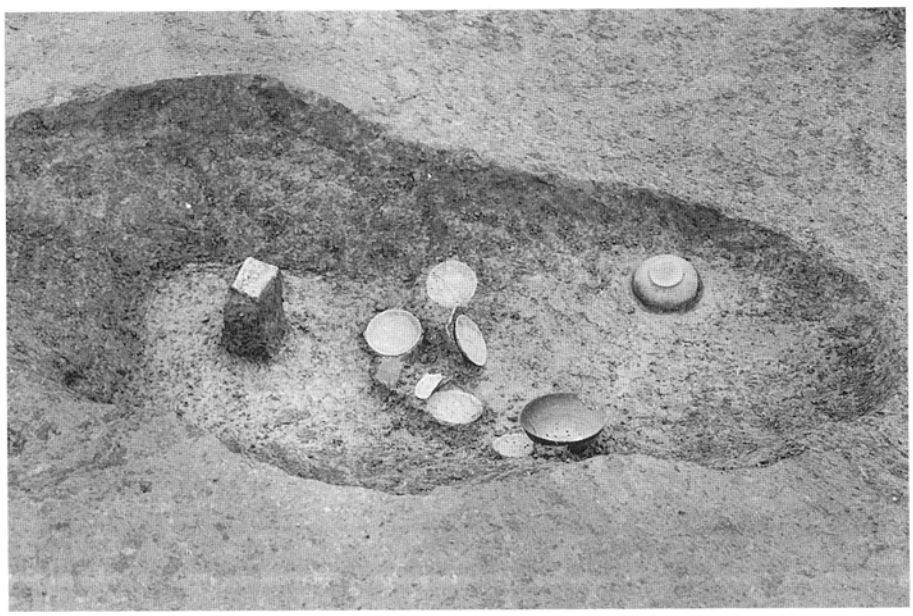
8014-6

(1) 木棺墓SD01遠景（西から）



8014-3

(2) 木棺墓SD01（西から）



8014-13

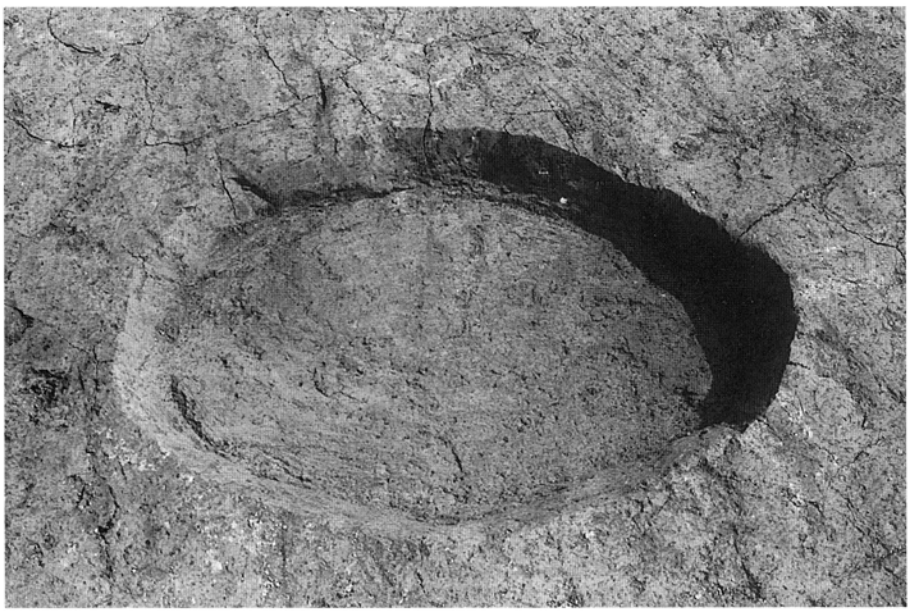
(3) 木棺墓SD01（北から）

8014-12-28

(1) 土壙SD02（北から）

8014-18-6

(2) 土壙SD03（北西から）



8014-18-11

(3) 土壙SD04（西から）

8014-14-2

(1) 井戸SE02（西から）

8014-14-23

(2) 井戸SE02井組南東部（北西から）

8014-14-22

(3) 井戸SE02井組南東部（北から）

8014-14-25

(4) 井戸SE02井筒（西から）

8014-12-23

(1) 井戸SE01（北から）

8014-12-15

(2) 井戸SE03（東から）

8014-12-25

(3) 井戸SE04（北東から）

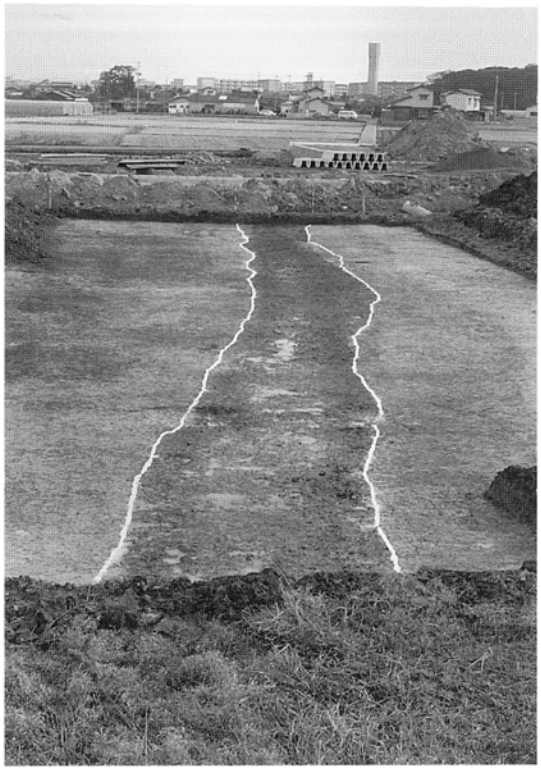
8014-3-31

(1) 溝SM01・02（北から）

8014-9-15

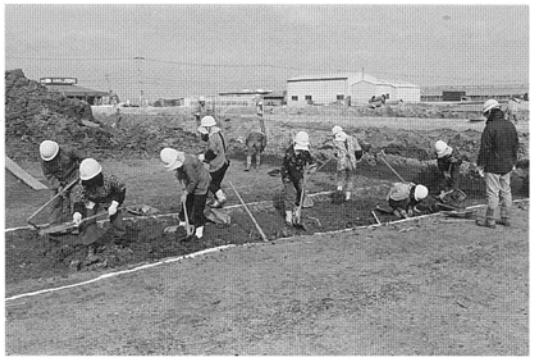
(2) 溝SM03（北西から）

8014-16-14



(3) 溝SM04検出状況（西から）

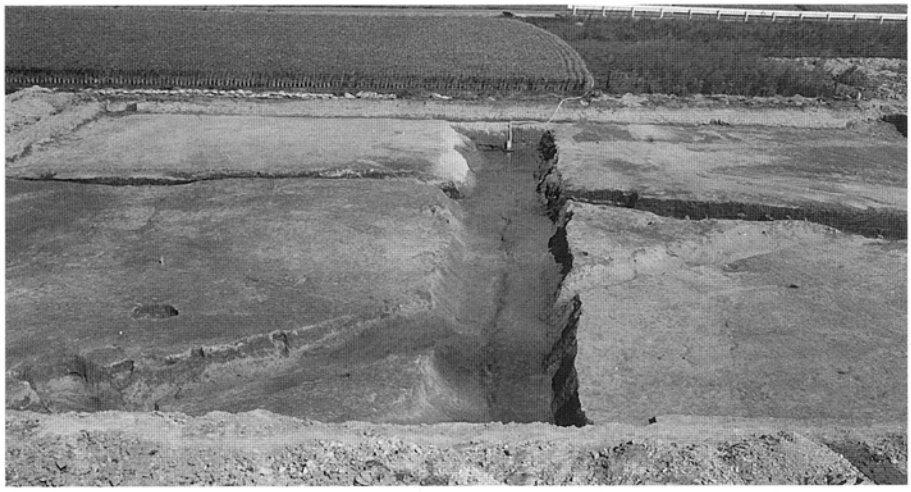
8014-16-22



(4) 溝SM04掘り下げ作業風景（南西から）

8014-21-16

(5) 溝SM04周辺作業風景（西から）

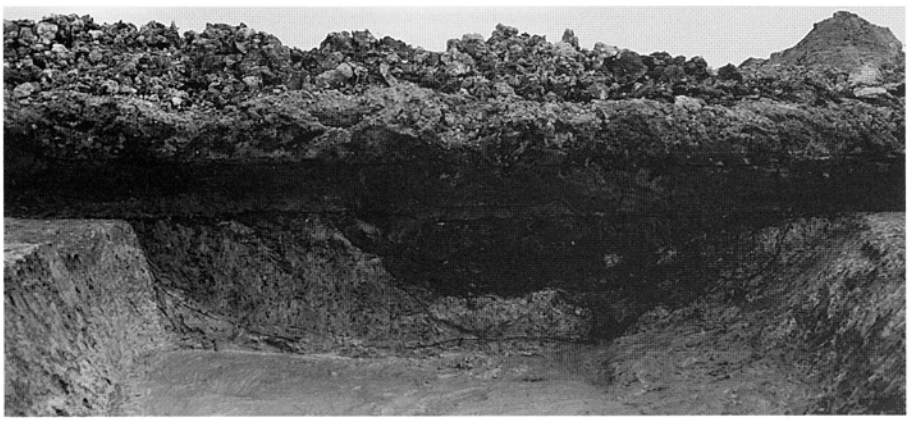


8014-9-34

(1) 第 4 区溝SM04（西から）

8014-120

(2) 第 6 区溝SM04（西から）



8014-70

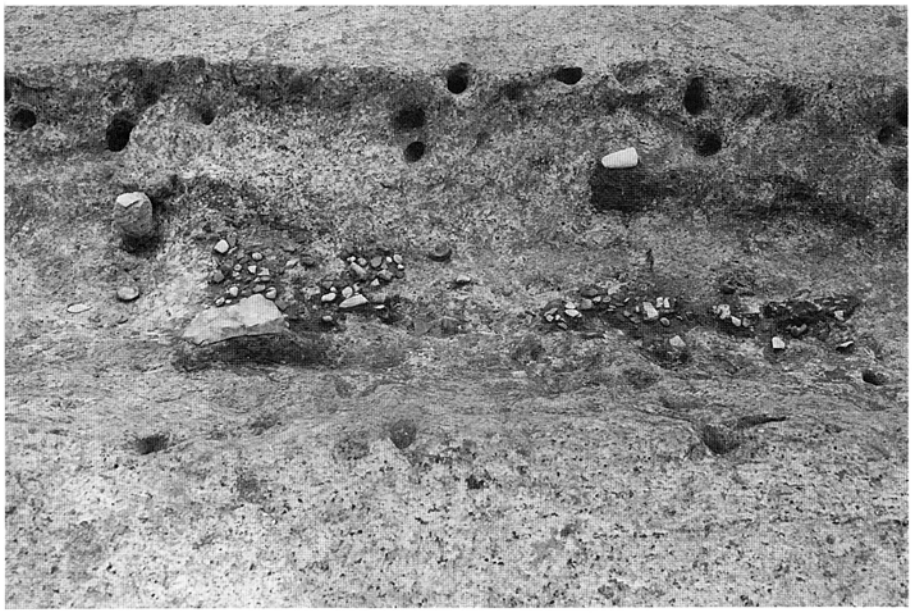
(3) 溝SM04第6区東壁土層断面
（西から）

8014-111

(4) 溝SM04第 6 区南北土層断面
（西から）

8014-98

(1) 溝SM03北側（南東から）

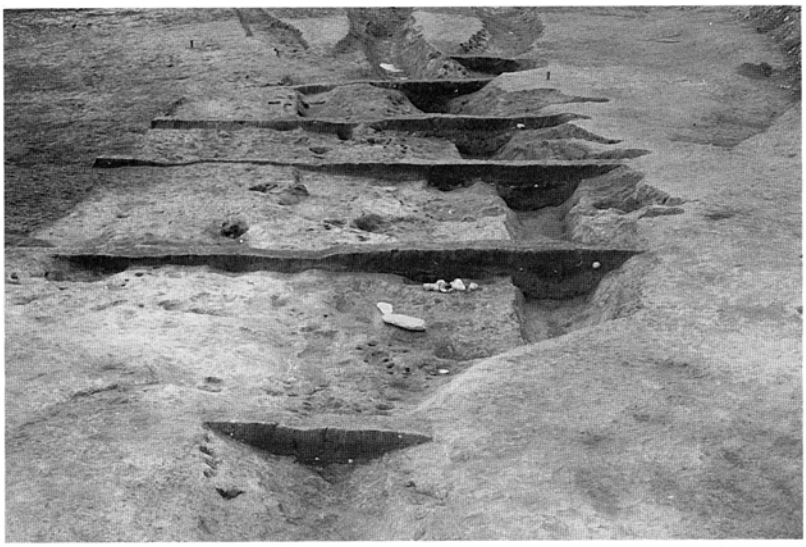


8014-129

(2) 溝SM03北側遺物出土状況（東から）

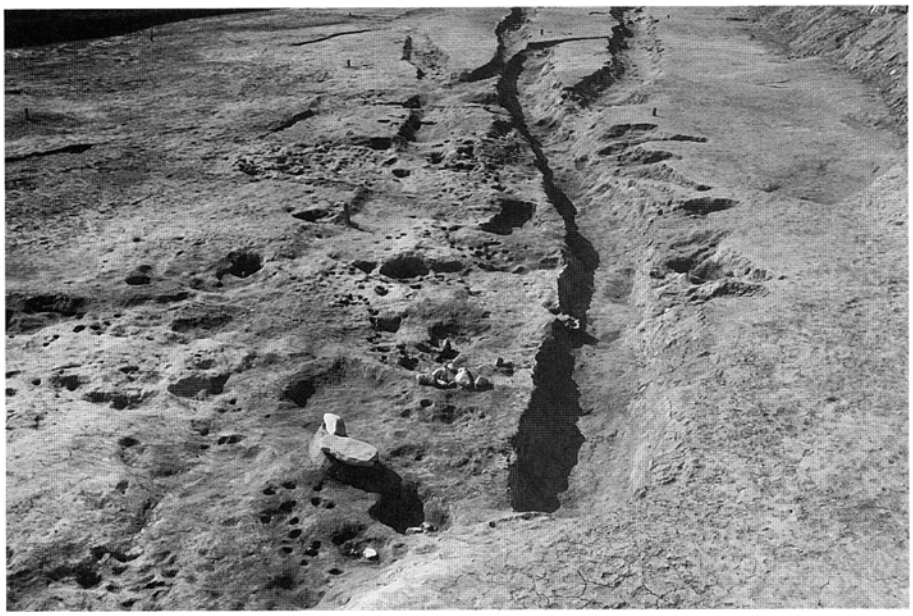
8014-133

(3) 溝SM03・05・07（北西から）



8014-17-12

(1) 第6区溝群SM03・05～08（南東から）

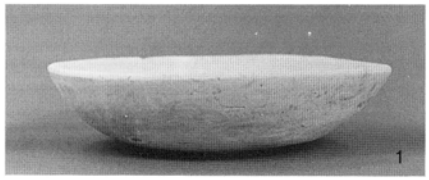


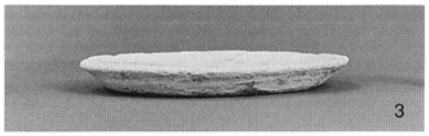
8014-136

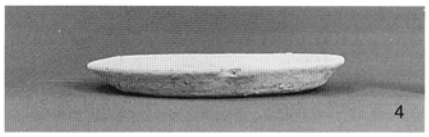
(2) 第6区溝群SM03・05～08（南東から）

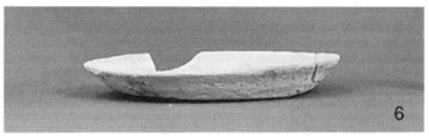
8014-86

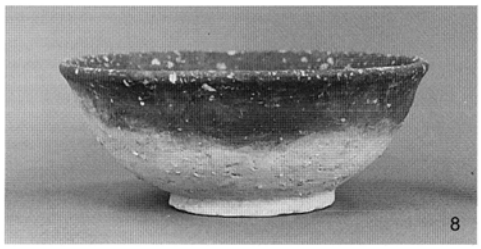
(3) 溝SM08・09（北東から）


1

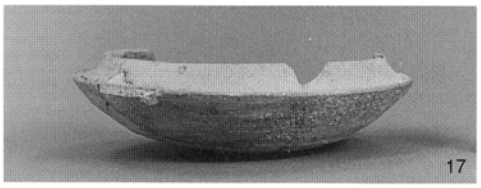

3

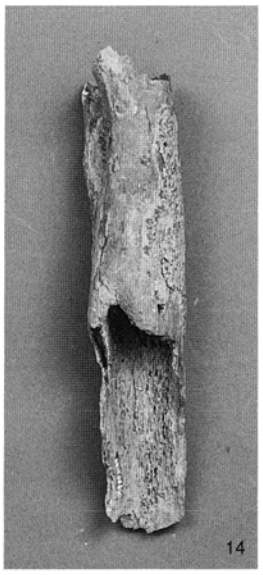

4

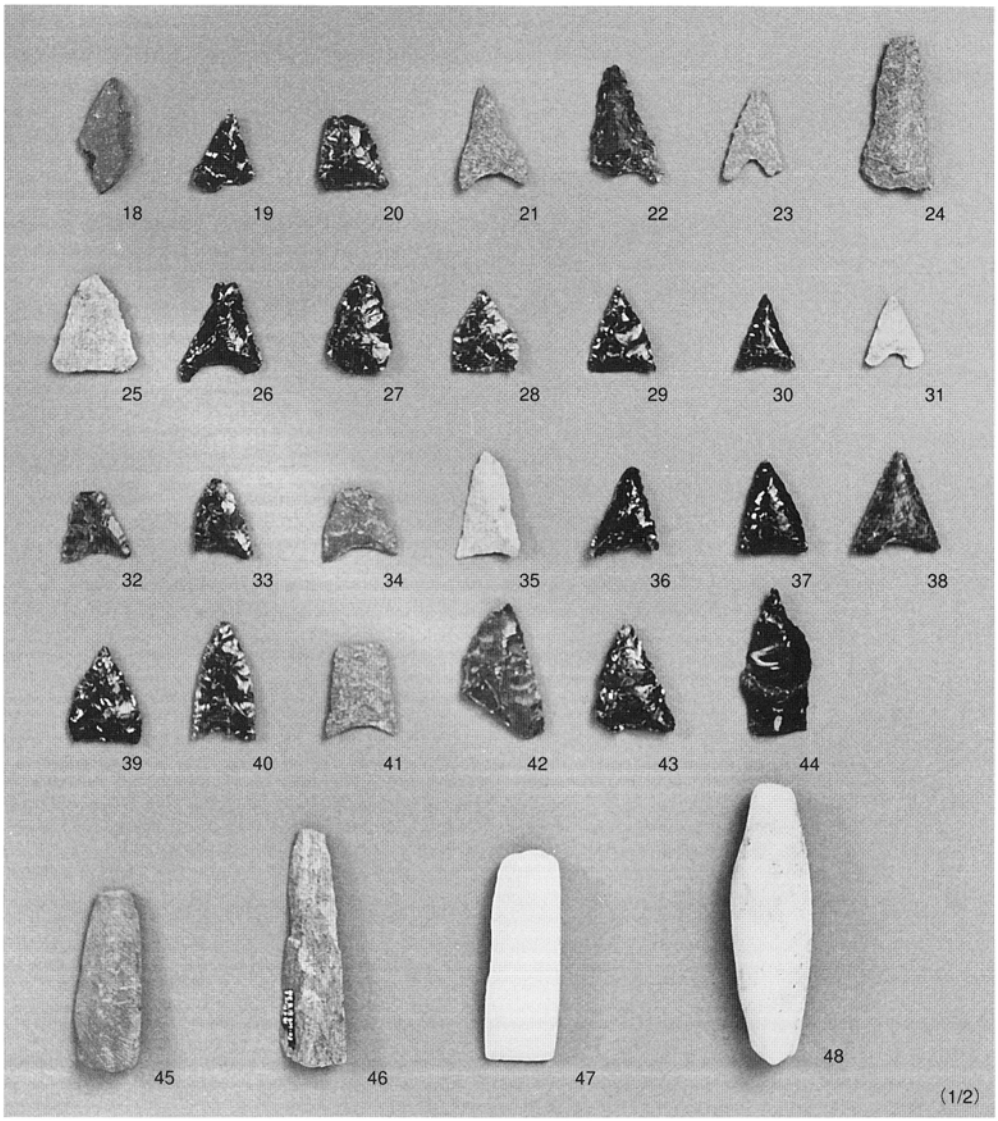

6


8

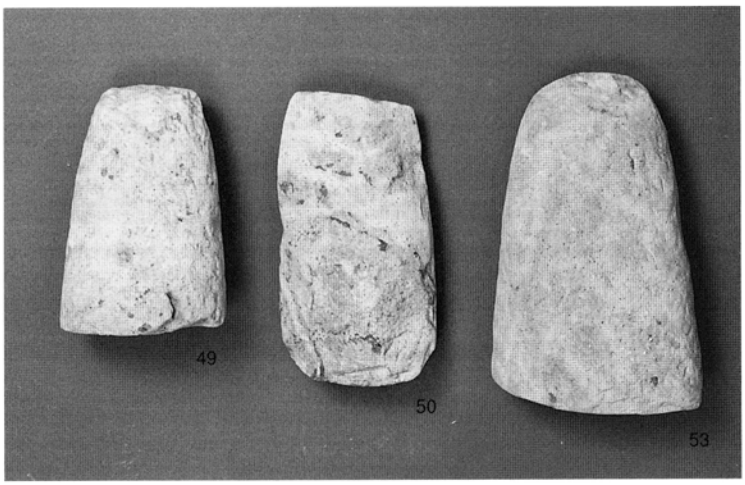
9

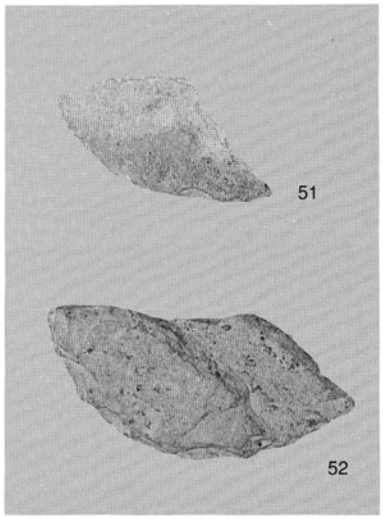

17

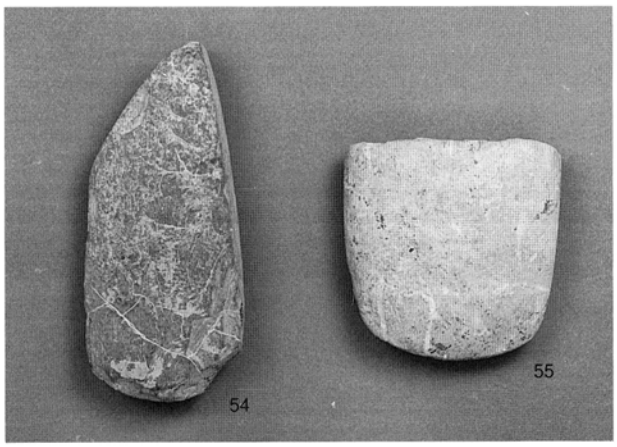

14

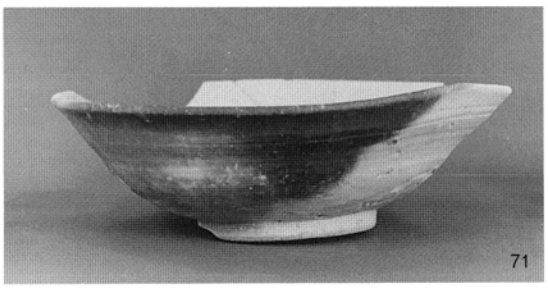

18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
(1/2)

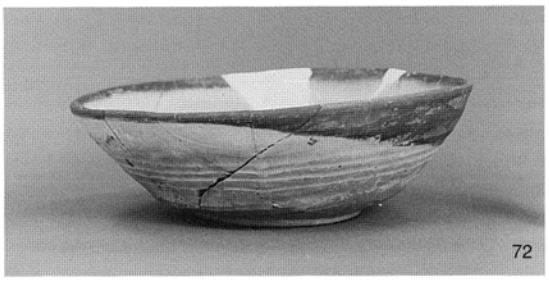
出土遺物 1（1/3・1/2）

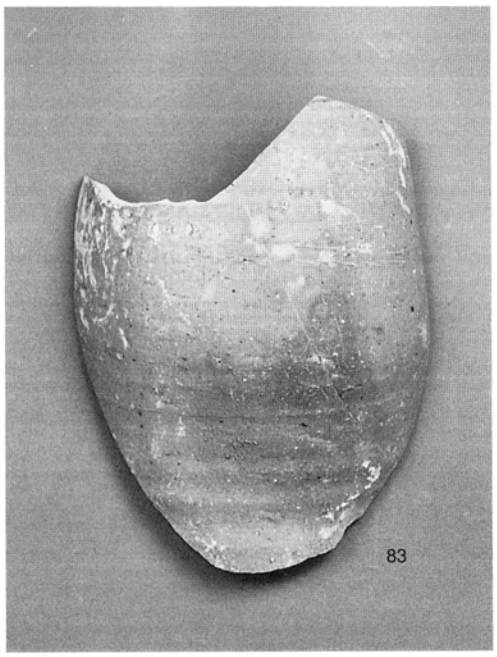


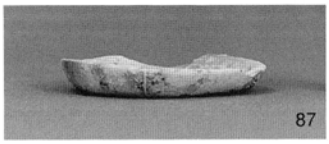


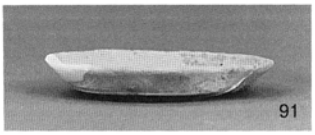


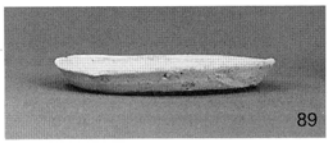


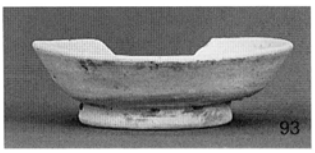




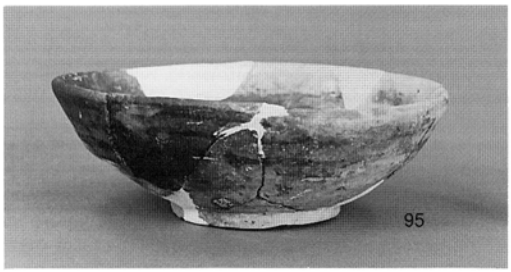


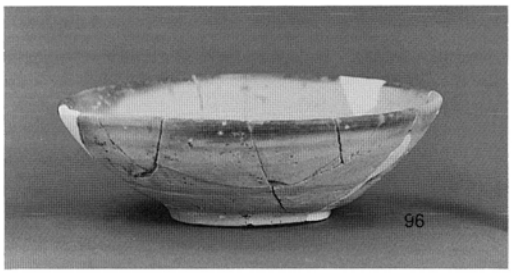


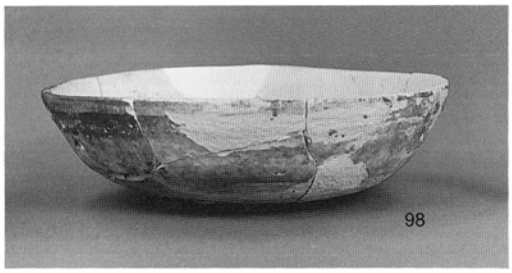


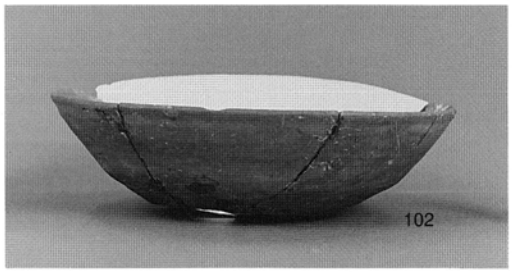


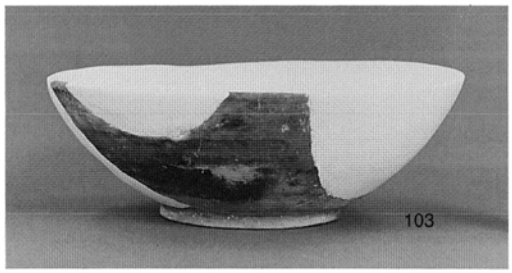
出土遺物 2（1/3）

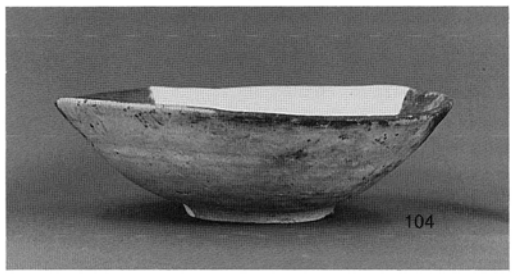


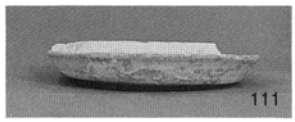


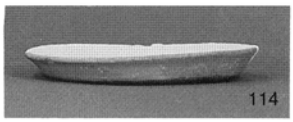


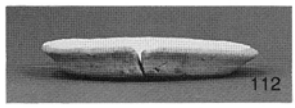


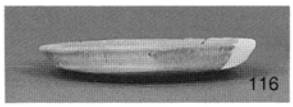


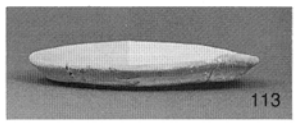




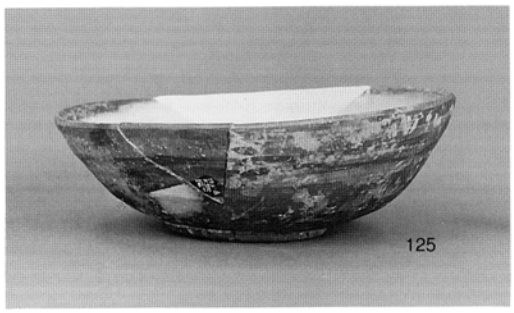


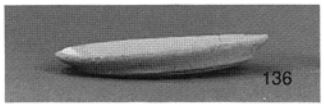


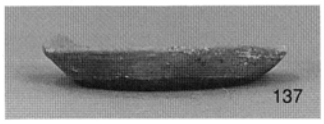


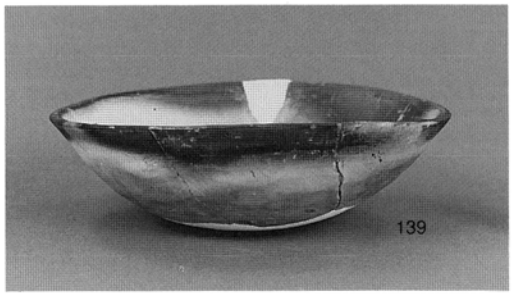


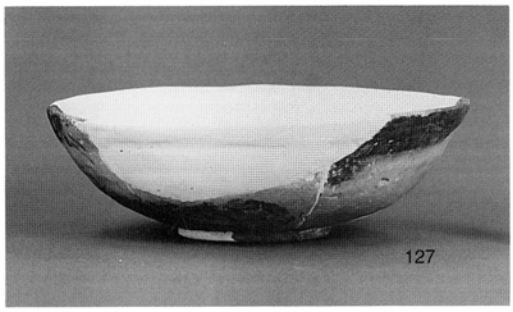
出土遺物 3 (1/3)

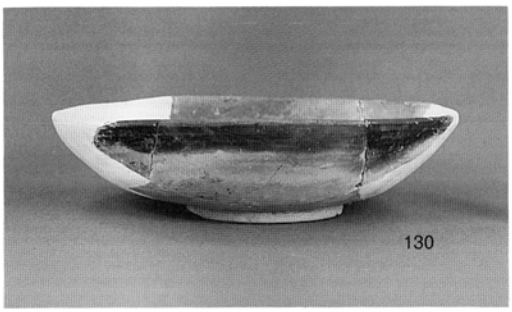


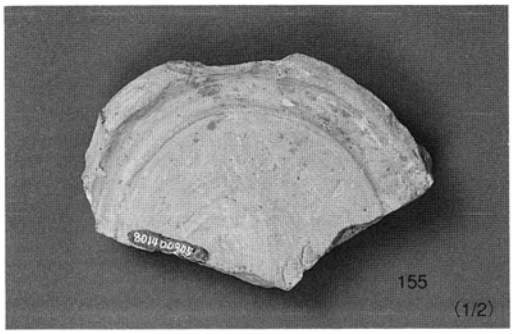






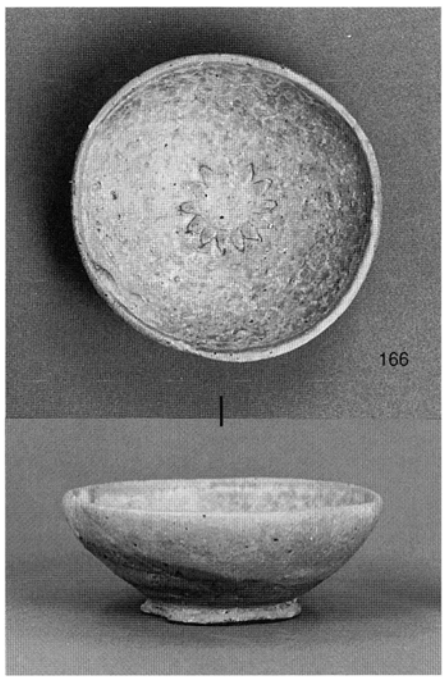


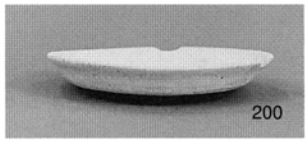




出土遺物 4（1/3・1/2）

164

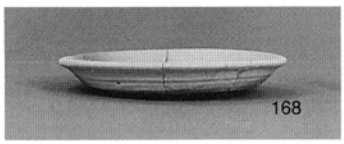

166

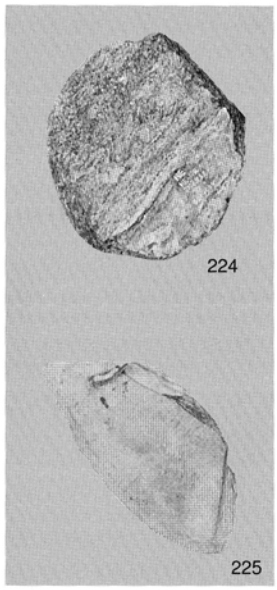

200

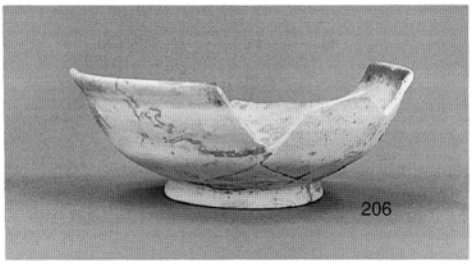
202

167

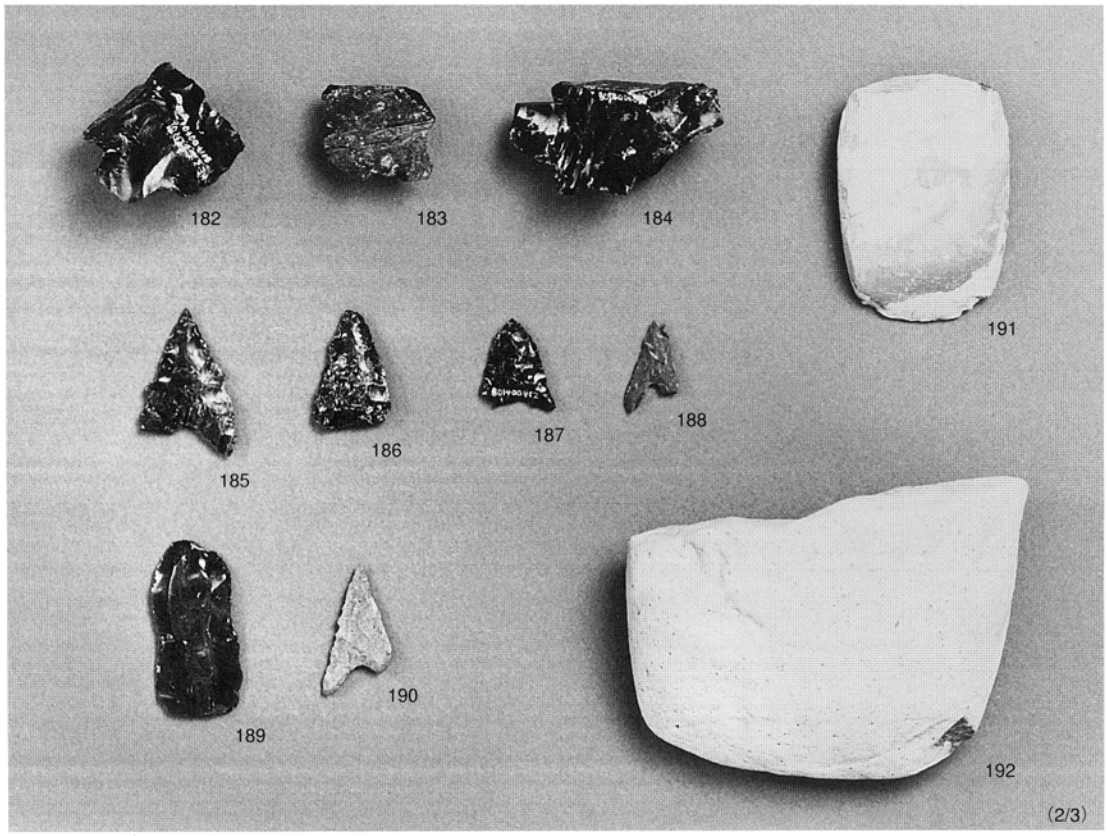
211


168


224
225


206

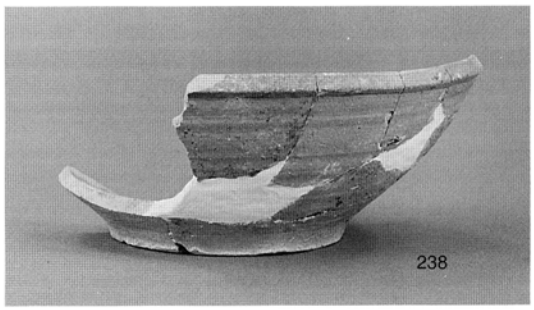
209

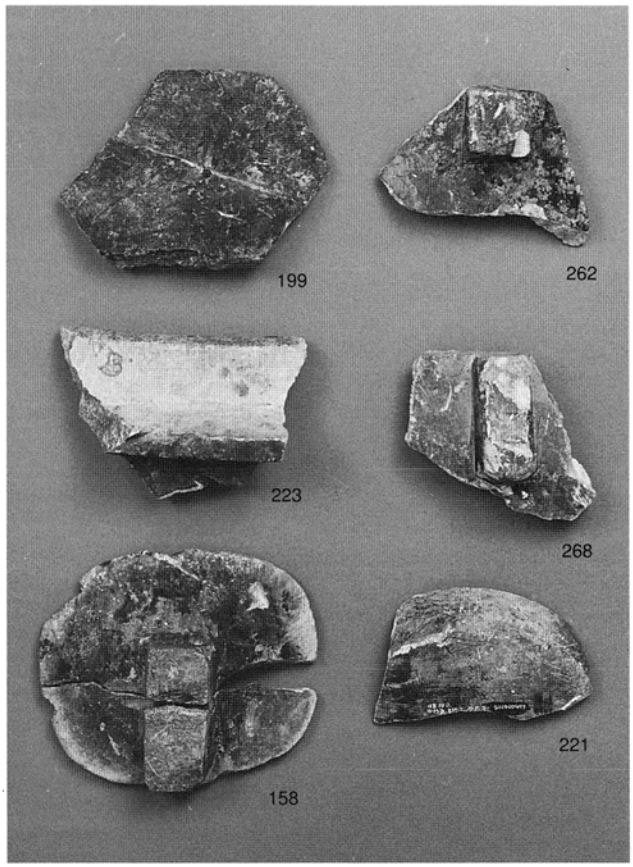

182
183
184
191
185
186
187
188
189
190
192
(2/3)

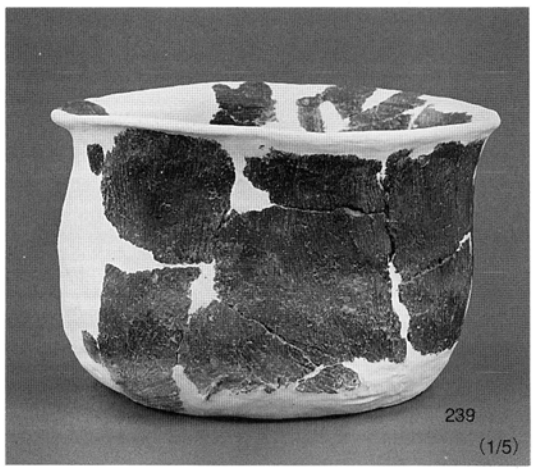
出土遺物 5（1/3・2/3）

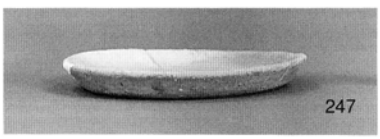
236

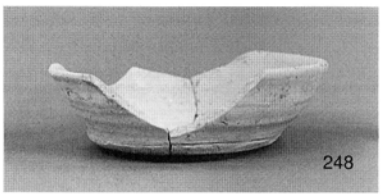
265

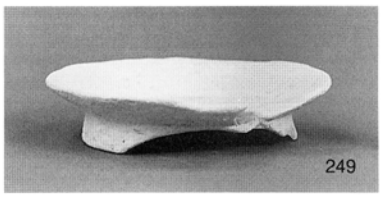

238

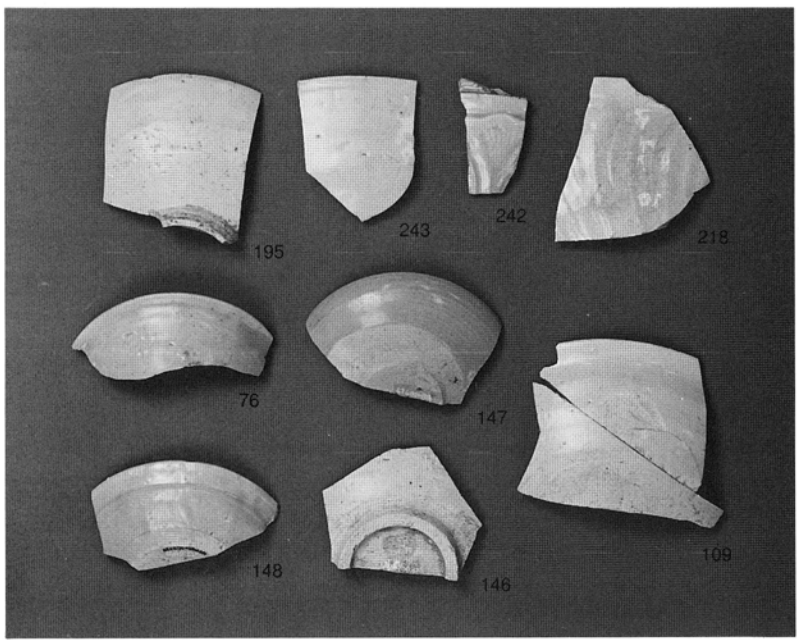

199
262
223
268
158
221


239
(1/5)

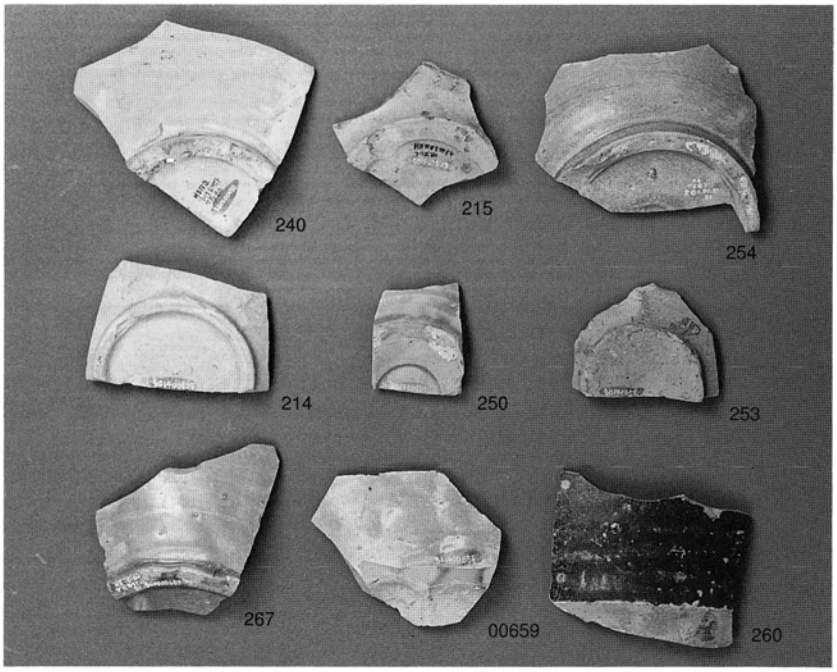

247

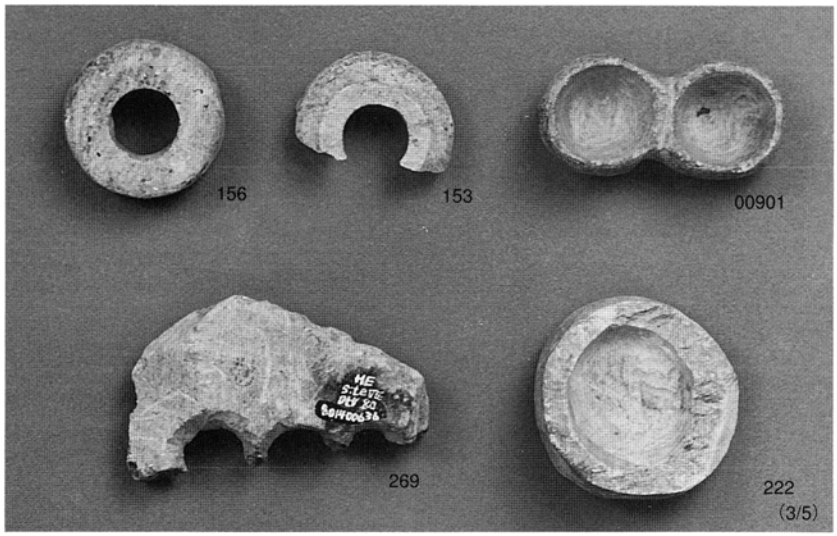

248

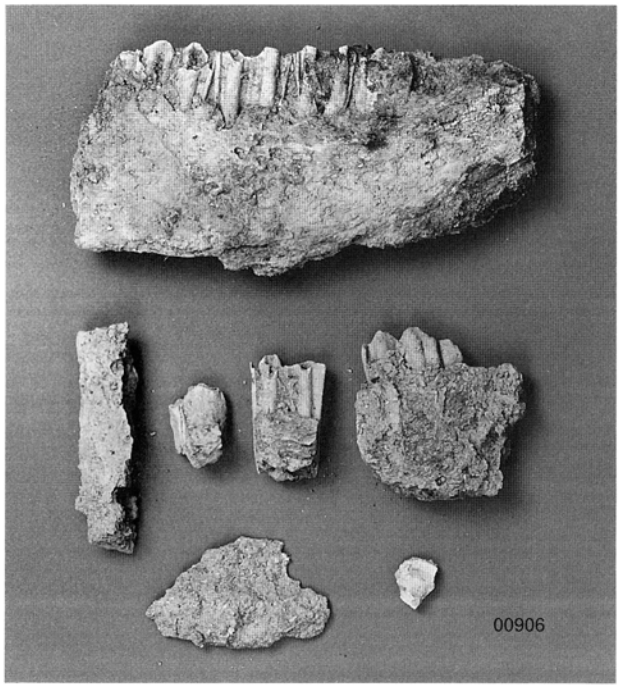

249


195
243
242
218
76
147
148
146
109

出土遺物 6（1/3・1/5）


240
215
254
214
250
253
267
00659
260


156
153
00901
269
222
(3/5)


00906

出土遺物 7（1/3・3/5）

橋本榎田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書

〈第542集〉

編集・発行　橋本榎田遺跡調査会

福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目８－１

平成９年３月15日

印　　刷　福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂一丁目10－15